



はたらく魔ニぞ。

和ヶ原聡司

イラスト ■ 029

Satoshi Wajuhara
Illustration ■ Onku

2.3

はなとんぽう

2 和ヶ原聡司

イラスト ■ 029
Satoshi Wagahara
Illustration ■ Oniku

CONTENTS

序章
・六人の『あの日』の翌日・
P002

魔王、女性の日常を垣間見る
・鈴乃の場合・
P005

勇者、敵の台所事情を聞く
・戸屋の場合・
P059

魔王、留守中の事件に動揺する
・淡原の場合・
P087

勇者、友の気持ちを喜ぶ
・千穂の場合・
P107

勇者、夢を確認する
・恵美の場合・
P127

魔王、身だしなみを整える
・真美の場合・
P183

終章
・六人の『その日』の前日・
P218

デザイン ● 木村デザイン・ラボ



序章 — 六人の『あの日』の翌日 —

「ううむ、聖別食材の残りも、心許なくなってきたな。悪くなっていそうなものも……そろそろ『すうばあ』に買い出しに行かねばならんか」

鈴乃が対魔王軍用に用いている、聖法氣たっぷり聖別食材の残量と消費期限を気にしているころ。

※

「でも、真奥さんも凄いけど、学習塾の付き添いするなんて芦屋さんも多才だなあ……考えてみると、最近私が知り合った人達って、なんか凄い人達ばかりな気が……」

千穂は、ここ数ヶ月で起こった出来事を反芻して今更ながらとんでもない状況に自分がいることに気づく。

※

「大体、なんで僕だけ毎回豚丼なんだよ。同じ豚でも格が違いすぎるだろ。僕だってカツ丼食べたい！」

漆原がその日の夕食に文句を言うころ。

※

「貴様はいつから偉そうに夕食に意見できる身になった。せめて何かしら家庭に貢献してから口を開け。カツ丼は私が不在の間、ベルの料理を魔王様の食膳に上げざるを得なかったお詫びも兼ねているのだ」

芦屋はぶつくさ言う漆原に説教をする。

※

「それにしても本当に大丈夫なのかしら……結局彼女、魔王城の隣から動いてないのよね」

恵美が夕方のニュースを見ながら、魔王城の隣に引っ越してきて、そのまま魔王達の敵として居座っている鈴乃の動静を懸念しているころ。

※

「いやー、二日も続けていいもん食うと、口が驕るな。贅沢は敵贅沢は敵っと」

昨夜は千穂が持ってきてくれたウナギを御馳走になり、今日の昼は、芦屋が何を血迷ったか近所の蕎麦屋でカツ丼を食べようなどと言い出し、日本に来てから最も贅沢な食生活を過ごした二日間と言って過言ではなかった。

「ま、頑張ってる分ご褒美があってもいいだろうし、たまの贅沢は素敵ってやつだな。その分、頑張ってる働かないとな」

魔王サタンこと真奥良夫は、徒歩通勤になってしまったアルバイト先からの帰り道、夜空を見上げながら大きく伸びをした。

「よっし、また今日から頑張ろう!!」

魔王、女性の日常を垣間見る
- 鈴乃の場合 -

肌にまとわりつくような湿気のおかげで、朝九時にも関わらず早くも不快指数の限界を振り切った感のある夏の暑気にも負けず、佐々木千穂は今日も意気揚々と戦場へ足を運ぶ。

東京渋谷区笹塚の、木造アパートの六畳一間が、今や彼女の戦場だった。

女子高生の身の上で戦場などとは穏やかではないが、事実なのだから仕方ない。

何せその戦場には、千穂の新しい『友』にして『強敵』が出入りするようになってしまったのだ。

「よしっ」

アパートの共用階段を見上げて、千穂は抱えた保冷バッグを心なしか強く抱きしめ気合を入れる。

「昨日までの鈴乃さんは、洋食方面に力を入れていたはず……。そろそろ和食に戻るころだろうから、取って今日は正面から勝負！」

作戦を確認しながら階段を上がり、薄暗いのに全然涼しくない共用廊下のドアを開け、二〇一号室のドアの前に立つと呼び鈴を鳴らす。

この部屋こそが、千穂の戦場にして、千穂が守るべき砦！

「はい」

呼び鈴に応じて、男性の声。果たして中から出てきたのは、二〇一号室に入居する魔王城の主、真奥貞夫であった。

「ようお、ちーちゃん」

「おはようございます真奥さん！」

千穂は暑さなど微塵も感じさせない晴れやかな笑顔で挨拶する。

想い人の前なのだ。汗も引つ込むというものである。

真奥貞夫、ヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室の家主で、千穂のアルバイト先の先輩である。

「佐々木さん、いつも恐れ入ります。おい漆原起きろ！ 佐々木さんがいらっしゃったぞ！」

「……………むぐ」

真奥の後ろからすぐに、真奥の同居人にして、忠実なる僕、芦屋四郎が現れて笑顔で千穂を迎えた。

この暑さにもめげずに寝坊をしているらしい真奥の忠実でない僕、漆原半蔵の寝起きのうめき声も聞こえる。

「おはようございます芦屋さん。…………あれ？ 今日はまだ、鈴乃さん来てないんですか？」

千穂は芦屋にも笑顔で一礼してからふと、部屋の中の様子をうかがって尋ねた。

ここ数日の千穂の『強敵』の気配が、今日はしない。

「ああ、今日はまだ顔見てないな」

真奥は頷いて、玄関から共用廊下に顔を出すと、隣の部屋の方を見る。

千穂も同じように隣の二〇二号室の扉を見て、少し拍子抜けしたような顔になる。

「そういえば、今朝は物音もしませんね。まだ寝ているのではないですか？」
 芦屋も室内からそう言う。

「そうですか……」

千穂としては、關志満々で来ただけに若干拍子抜けである。

「……でも、じゃあ今日は私が鈴乃さんの分も作ります！ 真奥さん達の健康的には、その方がいいですもんね！」

「ま、まあな」

「大丈夫です！ その……味はまだちょっと、鈴乃さんには負けますけど、でも、魔王城の健康は、私が守ります！！ お邪魔しますね！」

「なんとというありがたいお言葉……佐々木さんは我ら魔王軍にとって蜘蛛の糸とも言うべき一筋の救いです……漆原！ 貴様悪魔大元帥として恥ずかしくないのか！ 起きろ！ 佐々木さんに失礼な振る舞い、決して許さんぞ！」

「……………むが」

千穂は気合を入れ直して、『魔王城』に踏み込んだ。

そう、この築六十年の木造アパート、ヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室に住まう真奥貞夫は、かつて異世界エンテ・イスラの征服までと一歩に迫った悪魔の王、魔王サタンその人であり、『魔王城』という呼称は流石でもなんでもない。

世界征服の野望を「勇者」に打ち砕かれ、異世界を行き来する「ゲート」を越えて日本にやってきた魔王サタンと、その僕二人、悪魔大元帥アルシエルと悪魔大元帥ルシフェルが三人で共同生活しているのが、この東京渋谷、笹塚の町なのだ。

※

聖十字大陸エンテ・イスラに広がる人間世界を征服すべく、悪魔の大軍を率いた王の名を、サタンと言った。

絶大なる魔力の集まるその手に世界の全てを収めんとした魔王サタンと魔王軍は、野望成就の一步手前で、勇者なる人間の手により駆逐されてしまう。

だが勇者の刃もまた、魔王の心臓にあと一歩届かず、魔王サタンと腹心の悪魔大元帥アルシエルは、『異世界』へと通じる「アート」を通り、エンテ・イスラから逃亡を図る。

その『異世界』こそ、地球という星の、日本という国であった。

勇者の刃から逃れるために漂着した日本の地は、人間が支配する世界であった。悪魔の命の源たる魔力の得られぬ地、地球で人間の姿に堕ちたサタンとアルシエルは、生きるため、食べるため、そして何より世界征服の野望の再起を図るべく、人間社会のルールに従い、働かなければならなくなる。

一方で、魔王の野望を打ち破ったものの、あと一歩で命を取り損ねた勇者エミリア・ユステイーナもまた、日本でアルバイト生活をしながら魔王の行方を追っていた。

エンテ・イスラの魔王城での決戦から数ヶ月。

魔王と勇者は笹塚の交差点にて再び邂逅する。

運命は停滞していた戦火を再び燃え上がらせる……かと思いきや、力を得られず働きながらお金を稼ぐしか生きる術が無くなっていたのは勇者も同様であった。

宿敵を目の前にしながら、それよりもさらに目の前にある、

「働かなければ、生きていけない」

という過酷な現実には魔王も勇者も屈し、日々を過ごしていた。

魔王と勇者が睨み合いながら食べるために日々仕事に精を出すという「非日常的な日常」に、新たな闯入者が現れたのはつい先日のこと。

勇者よりも真剣に魔王を滅ぼそうとしていた聖職者が笹塚の六疊一間の魔王城の隣に引越してきてからの奇妙な近所付き合い。

そして、その聖職者との一時休戦と、人類の味方であるはずの勇者から聖剣を奪おうとする大天使との戦いを経て取り戻した「非日常的な日常」の平穩。

魔王城の隣に身分を偽り引越してきて、戦いの後もそのまま魔王城の隣人として収まっている鎌月鈴乃を迎えた魔王と勇者の日本での生活は、新たな局面を迎えようとしていた。

※

「……鈴乃さん、来ないですね」

千穂はすっかり用意の整ってしまった食卓の前で、心配そうに隣の部屋の方に顔を向けた。

「まあ、そういう日もあるんじゃないかねえのか？」

真奥はあまり気にしていないようだが、それでも千穂は落ち着かない。

二〇二号室に住んでいる鎌月鈴乃は、真奥の敵であるエンテ・イスラ大法神教会の人間だ。

鈴乃は引越してきた当初、正体と目的を隠し、隣人からのおすそ分けと称して、悪魔にとっては毒に等しい聖なる力、聖法気を含んだ聖別食材で作った料理を魔王城に提供し、じわりじわりと悪魔達の力を削いでいくことを目論んでいた。

数日前の大天使サリエルの騒動に絡んで正体が露見したのだが、鈴乃は大胆にもそのまま二〇二号室に住み続け、より堂々と真奥達に服盛りはじめたのだ。

しかも千穂にとって甚だうまいのは、鈴乃と魔王城の間々との間にどのようなやりとりがあったのか不明だが、鈴乃の援助と称するその攻撃を「結果的に食費が助かる」との理由で芦屋が受け入れはじめてしまったことだ。

千穂にしてみれば、想い人の隣に住む美しい女性が、真奥のハートを狙って毎日胃袋を掴み

に来ていたのである。

真奥の健康を心配する意味でも、真奥に想いを寄せる一人の女性としても、座して見ていらる状況ではない。

かくして二人の女性が、違う意味で真奥のハートを狙って魔王城に食事を提供しはじめたのだが、隣に住んでいる距離的アドバンテージを活かして必ず千穂に先んじているはずの鈴乃が、今日は姿を見せる気配すらない。

鈴乃は真奥達の敵ではあるものの、千穂にとっては新しい大切な友人でもあるので、姿を見せないとそれはそれで心配になってしまうのだ。

「出かけちゃったのかな……」

「どうでしょう。私は今日洗濯のために六時半に目を覚ましましたが、出かけた気配はないように思います」

芦屋は窓にひっかけられた洗濯物に視線をやりながら言う。

ほぼ毎日通い詰めていると言って良い千穂も、今更魔王城の洗濯物を見た程度で恥じらったりはしないあたり、悪魔と女子高生の変に深いところでの奇妙な結びつきがうかがえる。

「鈴乃さんって、携帯電話って持っていないでしたっけ」

「この前までは持ってなかったはずだし、持っても別に俺は番号聞こうとは思わんしなあ」千穂は、室温でぬるくなってしまいそうなサラダに目を落としてから、一つ頷いて立ち上る。

「た」

「私、ちょっと様子見てきます。もし具合悪くしてたりとかだったら、大変ですし」

「そうか。まあ、漆原はこの暑さの中でも平気で寝てるし、鈴乃だって普通の人間より頑丈なんだから大丈夫だとは思うけどな」

真奥は頷いて千穂を送り出してから、窓際のパソコンデスクに突っ伏して、結局未だに起きないままの漆原の後頭部を忌々しげに睨んだ。

「鈴乃さん、私です、千穂です。いますか？ 鈴乃さん……」

共用廊下に面したキッチン窓から、千穂が二〇二号室の呼び鈴を押しながら鈴乃を呼ぶ声が聞こえる。

真奥と芦屋は何げなく目を合わせて、多分本当に知らないうちに出かけたのだらうな、くらいに考えた次の瞬間だった。

「鈴乃さん？ 鈴乃さん!?」

緊迫した千穂の声が窓から飛び込んできて、真奥と芦屋は顔をぱっと上げる。一体何事かと思う間もなく、すぐに戻ってきた千穂は慌てた顔で隣の部屋を指差した。

「真奥さん芦屋さん！ 大変です！ 鈴乃さん、病気かもしれないません！」

「は!?」

「病気ですか？」

「はい！ ドアに耳当てたら、鈴乃さんの苦しそうな声が聞こえたんです！ 鈴乃さん、部屋にいます！ 何かあったんじゃないか……」

「穏やかじゃねえな。ちーちゃん呼びかけには答えたのか？」

千穂の様子に、さすがに真奥も真顔になる。

「答えてるようなそでないような、うわごとみたいな感じがします。でも、ドアの鍵閉まってる、どうしたらいいか……」

「……」

真奥と芦屋は顔を見合わせ、

「まあ、敵とはいえ隣の部屋でぼっくり逝かれても寝さめ悪いしな」

「仕方ありませんね」

「真奥さん？ 芦屋さん？」

「ちーちゃん、何かあったら、鈴乃の奴がやばそうだったから仕方なくって言ってくれよ」

「え？ あ、はい。で、でもどうするんですか？ まさかドアの鍵壊すんですか？」

「まあ、それは本当に最後の手段だな。とりあえず」

真奥はやおら立ち上がると、芦屋を伴って共用廊下に出て、千穂もそれに続く。

そして千穂がしたのと同じように二〇二号室の呼び鈴を鳴らし、

「おい鈴乃！ 生きてるか！」

中に向かって呼びかけてから、ドアに耳を寄せる。

「唸ってる、のか？ とにかくおい、芦屋」

「は、魔王様、そちら側を」

「おう」

真奥と芦屋は千穂を下がらせると、二〇二号室のキッチンの窓に、格子の隙間から腕を入れて手をかけた。

「うちと同じなら」

「これで外れるはず。せーのっ!!」

真奥と芦屋が合図をして同時に力を入れると、なんと、施錠されているはずの窓が二枚とも窓枠から外れてしまったではないか。

「え、ええええ!!」

真奥と芦屋の暴挙とも言える行動に驚きを隠せない千穂。

二人は気まずそうに千穂を振り向く。

「言っとくが、俺達が普段から鈴乃の部屋にこんなことやってるなんて思うなよ？」

「二〇一号室の廊下側の窓も、これと同じ方法で外れてしまうのです」

芦屋曰く、たまたまキッチン周り的大掃除をしている最中に、窓にこびりついた油污れを拭こうと力を入れたら、外側に外れて格子の中に落ちてしまったのだという。

防犯上問題があるし、それだけ隙間があるということは虫なども入りやすくなるし、うっかり外して格子と窓をぶつけてガラスが割れたら目も当てられない。

なんとかしたいと思つてはいるのだが、いかんせんサッシを直すような予算は魔王城にはないし、そういうことを相談するべき大家の志波美輝も長いこと不在である。

管理を委託されている不動産屋に頼むという手もないではないが、やはり家賃増額などという形で家計に跳ね返つたらと思うと恐ろしくて放置するしかなかったのだが、それがまさかこんな場面で活用されようとは。

「ちーちゃん、覗き込んで見てくれ。さすがに俺達がいきなり覗くのもアレだし」

「え、あ、はい。じゃあ……んっ！」

真奥に場所を譲られて、千穂は格子に手をかけると、外れた窓と格子の隙間から部屋の中を覗き込む。

そして、カーテンが閉め切れ、整頓された薄暗い部屋の片隅には……。

「す、鈴乃さんっ!!」

それを見た千穂の悲鳴が上がる。

「ど、どうしたちーちゃん!」

「た、大変です、鈴乃さん、部屋の中で倒れてます!!」

「何??」

千穂をどかして真奥と芦屋も慌てて格子から室内を覗き込む。

すると鈴乃の小さな体が不自然な格好で窓際に横たわっている。

薄暗いので判然とはしないが、妙に着ぶくれているようにも見え、明らかに不自然な状況だった。

「な、なんだどうした? おい鈴乃、生きてるか!? 具合でも悪いのか!」

「……………」

どうやら声も上げられない状況らしい。

呼吸をしている様子は見て取れるが、それでも小さなうめき声が聞こえるだけで、体に異常が起こっているのは一目瞭然であった。

しかしこれだけ呼びかけて立ち上がらないのなら、中から鍵が開くことは期待できない。

「くそっ、ドアぶち破るわけにもいかねえし……仕方ねえ!」

真奥は一つ舌打ちをしてから、

「ちーちゃん、恵美に連絡して鈴乃が非常事態だつて来てもらえ! 間に合わなかったら最悪救急車だ。芦屋! どうにかして外から窓を開けられないか試してみろ。最悪割れ。ドア破るよりは窓割ったほうがなんぼかマシだ!」

「わ、分かりました!」

「了解いたしました!」

真奥の指示に千穂と芦屋が忠実に動き出す。

「魔王様はどうされるのですか？」

「仕方ねえだろ。ぶち破るのは最後の手段なんだから……」

真奥は突っかけていた靴をきちんと履き直すと、靴ひもを結び直して言った。

「不動産屋んとこ行って、非常事態だ！ つつてマスターキー出してもらう。連絡はちーちゃんの手配にするからな！」

「で、電話じゃダメなんですか？」

「まだ営業時間まで何十分がある！ それに電話でこちやこちや言うより、あの距離なら走って行った方が話が早え！」

真奥はそれだけ言うと、炎天下の笹塚の町に走り出す。

数日前の騒動で鈴乃に自転車壊されてしまったため、偉大なる魔王サタンの交通手段は、残念ながら健脚による全力疾走のみである。

「……何……なんの騒ぎ……？」

そして真奥が飛び出したその瞬間を見計らったかのように、寝癖を立てっぱなしの寝起きの漆原がのそりと魔王城の玄関から顔を覗かせ、緊急事態にも関わらず、千穂と芦屋は大いに脱力したのだった。

※

「本当に……面目ない……」

意気消沈した鈴乃の声が、魔王城に響く。

「私の不注意で、皆に迷惑をかけてしまった。詫びのしようもない……」

「そ、そんなに気を落とさないでください。大したことなくて良かったですよ！」

魔王城の畳に正座して平身低頭している鈴乃を、殊更明るい口調で千穂が励ますが、

「でも、ちょっとこれは聞けすぎるわよ」

恵美は呆れ顔を隠さない。

「千穂ちゃんから連絡があったときは何事かと思ったわよ。まさか家の中で熱中症起こして立ち上がれなくなるなんて、子供じゃあるまいし」

「っ……」

恵美の言葉に、鈴乃は顔を真っ赤にして下を向いてしまう。

「で、でも、大人だって熱中症にはかりますし、今時はそうバカにできないですよ！」

「その原因がこれじゃなければね」

千穂の必死のフォローも虚しく、さらなる追い打ちをかけたのは漆原である。

鈴乃の傍らに無造作に放り出されているのは、厚手の革の外套であった。

「つつ〜」

全員の視線が外套に集中し、鈴乃はいたたまれなくなつて元々小柄な体を更に縮こまらせてしまふ。

「まあ、大事に至らなくて良かったって言うしかねえな」

その上魔王に同情されては、立つ瀬も何もあつたものではない。

「魔王様は出勤前だというのに、汗をかかせおつて、まったく」

芦屋もすっかりお怒りである。

それも仕方のないことで、千穂の連絡で恵美がアパートにやつてきたのと、真奥が不動産屋を連れて鍵を持ってきたのがほぼ同時だった。

マスターキーを使つて部屋に入つてみると中はものすごい蒸し様で、それなのに鈴乃自身は全身をすっぱり覆うような革の外套を羽織つたまま倒れていたのだ。

千穂が窓を全開にし、恵美が男性陣を部屋の外に退去させてから鈴乃の衣類を脱がして冷水を頭から被せ、ようやく鈴乃は意識を取り戻した。

救急車呼んだ方がよいのではと言う不動産屋にお礼を言つて帰らせ、恵美と千穂が鈴乃から原因を聞き出すと、思いがけない答えが返つてきたのだつた。

「日焼けしたくないからってこんな着て熱中症とか、ちよつと恥ずかしくて人には言えない

よねー」

「う、うるさいっ」

漆原から外套を奪う鈴乃の顔は、暑さと羞恥とその他色々な理由で真っ赤になつてゐる。

「し、仕方ないだろう！ 部屋のカーテンは適当に見繕つたものだから遮光性が低かつたし、それにヒヤケドメなどという便利なものがあるなど知らなかつたのだ！」

鈴乃の熱中症の原因は、日焼けを恐れての厚着だった。

エンテ・イスラにも「日焼け止め」のための薬材は存在するが、日本のように、量産されてはいないし、そもそも誰でも手に入られる程、安価なものでもない。

多くのエンテ・イスラの民にとって日焼け防止とは即ち日光を避けることに他ならず、その結果、エンテ・イスラ南大陸の砂漠地域に住む民達のように、日光や熱を遮る布を被る、という選択肢しか思い浮かばなかつたのはこの際仕方がない。

だが、日本の夏は砂漠気候とはまた一線を画す高温多湿の夏であり、体感温度には湿度が密接に関わってくる。

絹や紗の着物は風を通しやすいとはいふものの、あくまで普通の着物に比べれば、というレベルであり、その上に風を通さない革マントなど羽織つた日には内側に空気と熱がこもつて即席スチームサウナの完成である。

大体、砂漠の民だつて日光避けの布の素材や数には細心の注意を払う。何もなかつたからと

いって手持ちのもので済ませようとする鈴乃が無茶なのだ。

「だからこっちに長居するなら色々勉強しなさいって言ったのに」

鈴乃はムキになって漆原に反論していたが、恵美にしてみれば、何度も警告したことなのに生活態度を漆原とは違う意味で改めない鈴乃にも、大いに問題があると思わざるを得なかった。

「でも鈴乃さん、お肌白くて綺麗ですよ」

「ここ数日、外を出歩いてたせいでこれでもうっすらと日焼けしてしまっている」

千穂は鈴乃の珠の肌を褒めるが、鈴乃は少し悲しげに自分の手の甲を睨むばかりだ。

「鈴乃さん」

鈴乃の表情に心中を察した千穂は痛ましい思いにかられるが、

「肌は白い方が隠密聖務や変装が必要な聖務があったとき便利なのにな……」

「……そーなんです」

日焼けを嘆く理由から妙に物騒な気配を感じ取って表情が固まってしまふ。

「そういえば芦屋、お前この間日焼け止めとか買ってたか？」

そんな女性陣をよそに、真奥が芦屋を見て、芦屋もはたと頷き立ち上がる。

「そういえばそうでした」

芦屋が薬の買い置き箱の中から取り出したのは、薬局で安売りしているボトルだった。

「どうしてあなた達がそんなものを買ってるのよ」

「先日のお騒動のせいで、魔王様は徒歩通勤を余儀なくされているから」

恵美の問いに芦屋は軽く鈴乃を見下ろし、鈴乃はまた申し訳なさそうに顔を伏せる。

「魔王様の健康のためにも、外を歩く間の紫外線対策を万全にせねばと思ったのだ」

「魔王のくせに、生意気にも紫外線対策？」

「魔王とか関係ねえだろ。それに俺使ってねえし。なんかそのクリームベタついてイヤだし、

匂いも若干だけ匂いになるんだよ。これでも食い物扱う仕事してんだから、あんまりそういうのとかにつけるのもどうかなと思うしよ」

「……」

飲食店でアルバイトする男性としては至極最も、真面目な回答だが、前提としてあるのは悪

魔の王が悪魔大元帥に心配されて一度は日焼け止めクリームを塗ったという事実。

最近こういった真奥達の生活態度に慣れてきた恵美も、久々に辟易してしまう。

「どうせ誰も使わないんだから、その日焼け止め鈴乃にやっちゃえよ」

「敵に塩を送るくらいなら、日がな一日家にいる漆原に使わせた方がマシです」

「芦屋の中での僕のポジションが全然分らないよ」

芦屋の毅然とした物言いに、さすがの漆原も突っ込まざるを得ない。

「あはは……でも、真奥さんの言う通り、安いのは肌触りとか微妙だったし、鈴乃さ

んも買うんなら自分のお肌に合ったやつ使った方がいいですよ」

「そうか……千穂殿も、使っているのか?」

「え? はい。私もそんなに高くないのですけど持ち歩いています。汗かくと落ちちゃうんで」
鈴乃の問いに、千穂は持ってきたバッグの中から、小さなボトルを取り出す。

「……」

「私も持ち歩いてるわよ」

鈴乃の視線に気づいて恵美も自分の鞆たぶから小さなボトルを取り出す。

「あ、それ最近CMでやってるのですよね。評判いいって聞きました」

「そうね、試供品もらって試して使ってみたら気に入っちゃって。ちょっと使ってみる?」

「わあ! いいんですか!」

恵美の申し出に千穂が快哉かさいを上げて、いそいそと手の甲を差し出す。

そんな女性二人の様子を見ながら、鈴乃はふと芦屋を見た。

「その……日焼け止めなどという便利な薬剤は、魔王達のような生活水準でも手に入るものなのか?」

「魔王城の家計を愚弄ぐろうするか!」

芦屋は眉根まゆねを寄せて喚わめく。

「私が駅前の薬局で購入したこれは安売り398円だ! この程度では、魔王城の家計はいささかの痛手いたでも感じない!」

芦屋が印籠いんろうのように突きつけるボトルの腹には、端が汚れた「¥398」の値札シールが物悲しく張りついていた。

「あー待つてベル。千穂ちゃんも言ってたでしよ。肌に合うもの使わないと気持ち悪いし、場合によっては肌に悪影響よ。きちんと選んだ方がいいわ。高ければいいってもでもないけど、アルシエルのそれはおすすめできないわ。見たことないものそんなの」

「エミリア! 貴様も私の選択を愚弄ぐろうす……!」

「芦屋、やつばそれ人氣ねえんだって。だから安売りだったんだって。だって俺お前に言われて薬局寄ったときか日焼け止めの棚見たけど、同じやつ見たことねえもん」

「魔王様までそんな……」

恵美に突っかかるとした芦屋だったが、主の非情な一言に、畳の上に崩れ落ち、

「その日焼け止め、コスメサイトの口コミ評価が平均で星一つ半。評判最悪みたいだよ」
漆原の一言がトドメになって、悪魔大元帥アルシエル、撃沈。

「そういえばあなたがお化粧してるの見たことないけど、化粧品は何を使ってるの?」

視界の端で、芦屋が炎天下のアスファルトで焼け死んだナメクジのように干からびてゆく様を見ながら、恵美は何げなく鈴乃に問う。

「ああ」

鈴乃は一つ頷いて口を開いた。

だが、その答えは、恵美と、そして千穂にとっては予想だにしない一言だった。

「化粧品の類いは、特別持ち合わせていない」

「……え？」

恵美と千穂は、顔を見合わせる。

「ん？ どうした二人とも」

「化粧品を……」

「持って……ない？」

「ああ、勿論銭湯で入浴するときに使う石鹸や、しゃんぷー？ と、りんすは持っているぞ」

「え、あ、いやその。そういうんじゃないくて」

「化粧水とか、乳液とか、持っていないんですか!？」

「ケシヨウスイやニユウエキというのがなんのことだか分からないが、まあ、持っていない」

「……」

恵美と千穂は、その答えに絶句し、お互い顔を見合わせ、そして、

「わっ!! にや、にやにをふるんだ!」

申し合せたように恵美が鈴乃の左の頬を、千穂が右の頬を唐突につまんだ。

そして指先に伝わるその手触りに愕然として、手を離す。

鈴乃はいえ、恵美と千穂の突然の暴挙に目を白黒させて、両頬を押さえて二人を睨むが、

肝心の恵美と千穂は、鈴乃の頬をつまんだ指先をただ眺めるばかりだ。

「な、なんなんだ一体!」

「お化粧」

「してない」

「……」

「鈴乃さん……日本に来て、どれくらいでしたっけ……?」

「な、なんだ千穂殿突然。そうだな……もうすぐ二週間……いや、三週間と少しくらいか?」

「その間、一度もお化粧してないんですか?」

「だから言っているだろう。化粧道具を持っていないと」

「……べル、私からもいいかしら」

「なんだ」

「こんなこと聞くのも悪いんだけど……あなた、今いくつ?」

恵美と千穂は何か途轍もない衝撃を受けているようだが、それにしても悪魔とはいえ男性が三人いる前で、なかなか不機嫌な質問である。

だが鈴乃はあまり気にしていないのか、ごく自然に口を開いた。

「私の年齢か? 私は今年でにじゅう……」

「うわあっ!!!!」

「……だが」

「肝心なところを邪魔したのは、窓際のニートである。」

「うわ、ブルースクリーンになった！ 最悪だ！」

「どうやらパソコンにトラブルが発生したようだが、そんなことには恵美も千穂も構ってられない。」

「……ごめんベル、聞こえなかったわ。いくつなの？」

「ん、だから今年でにじゅ……」

「魔王様あああああああああああああああああああああああ!!!」

「……歳だ」

今度は、絶望の淵から蘇った芦屋だった。

「私は、私は間違っているのでしょうか！ 私は買い物で得をしているつもりで実は損をしていたのでしょうか！ 魔王様！ 私はこれからどうしたら……っ!!」

「芦屋うるせえ暑苦しい近寄るな」

泣きながら主に縋る芦屋の様子を恨みがましい目で見ながら、今度は千穂が問う。

「あの、鈴乃さんすいません、また聞こえなくて……」

「いやだから、私は今年でにじゅ……」

「あああああ!! 電源落ちた！ 再起動できない!!」

「魔王様ああ！ やはり私も定期的に働きに出て家計を補強すべきでしょうかああ!!」

「……歳だと言っているだろう」

「魔王！ あなたのこの部下ちよっと黙らせて!!」

「芦屋さん！ 漆原さん！ 少し黙っててください!!」

いつになく殺気立った恵美と千穂の様子に、真奥も鈴乃も目を白黒させる。

だが、芦屋と漆原が黙っても、裏庭の蟬や、近所の子供の叫び声、更にはチリ紙交換や廃品回収、暑さで頭のネジが飛んだのか焼き芋屋にラーメンの屋台まで現れる始末で、結局恵美と千穂は、肝心なところだけは聞けず仕舞いになってしまったのだった……。

結局鈴乃が化粧品を持っていなかったのは、日本とエンテ・イスラ西大陸での化粧という行為に対する認識の違いから起こる齟齬が理由だった。

鈴乃にとって、化粧品は専門の調合師が作る大変に高価な医薬品、という認識が強く、またエンテ・イスラと日本の「化粧」と「化粧品」の概念やTPOが大きくかけ離れていたため、今まで購入しようと思わなかったらしい。

エンテ・イスラの生活文化上、儀式や祭祀、または余程改まったフォーマルな場に出るのでもなければ、貴族でもない民間人や、貧乏をしない聖職者が化粧をすることはない世界である。

それだけに、まだ女子高生である千穂が化粧品を使っているという事実は、鈴乃にとってかなりのカルチャーショックだったようだ。

「遊佐さん！ 今すぐ鈴乃さんのためにお化粧品買いに行きましよう！ もう日焼けしちゃうてるんです！ 鈴乃さんの綺麗な肌を守るためにも、紫外線対策を！ 遊佐さんならきつといい化粧品を売ってるお店知ってますよね！」

「ちよっと千穂ちゃん落ち着いて！ はあ、そうね、そうよね」

恵美は深い息を吐きながら、千穂に同意する。

結局鈴乃の本当の年齢を聞き出すことは叶わなかったが、前後の文脈から最低でも恵美と千穂より四歳以上、年上であることは確定事項である。

それでいて化粧品もしないのにこの珠の肌というのは、女性として羨む次元を超えている。

「まあ、逆にナチュラルにこれなら、下手なのに手を出して荒れちゃうわないか心配だけど、日焼け止めだけでもいいものを使うに越したことはないわね。ただ、今日も明日も私仕事なのよ。案内してあげたいのはやまやまだけど。それに、ペルを熱中症で倒れた日に出かけさせるのもね」

「そ、それもそうですね……」

ならば自分が、と言いたいところだが、千穂の化粧品は高校生でも気軽に買える、いわゆる「プチプラ」と呼ばれる価格帯のものであり、鈴乃の肌に合うものが手に入る保証もないし、

そもそも千穂自身そんなに化粧品に詳しいわけでもない。

「それに私も、自分に合うもの買ってるだけで、別に詳しいわけじゃ……あ、そうか」

恵美はそこまで言っただけで、思い出して顔を上げた。

「早めがいいなら、梨香が確か明日シフト入ってなかったし、ずっと家にいるって言ってたからお願いすれば、案内してくれるかも」

「梨香って、鈴木さんですか？ 前にマグロナルドに一緒に来た……」

千穂は、恵美と鈴乃と共にアルバイト先のマグロナルド橋谷駅前店にやってきた恵美の友人の顔を思い出した。

「うん。彼女、エンテ・イスラのことは何も知らないけど『鈴乃』とも面識あるし、言えば引き受けてくれると思うわ」

「確かに、梨香殿は世慣れた空気を纏っていたが……指南してもらえらるのなら、是非お願いしたい」

「私も、ちよっと興味あります」

「そう？ じゃあちよっと聞いてみるわね」

恵美はスリムフォンを手にとって梨香の番号を呼び出すと、あることに気づいて、この部屋の主を振り返る。

「魔王、あなた明日、勤務あるの？」

「あ？」

恵美の呼びかけに、真奥はあからさまに面倒くさそうな顔をする。

直前まで真奥は芦屋と漆原を正座させ、勇者の前でダラけるだけならともかく情けない姿を見せるなど滾々と説教をしていたのだが、今この流れで恵美からの用など面倒事以外の何物でもない。

「……いや、仕事……」

「千穂ちゃん」

恵美は、真奥の「一瞬のためらいを聞き逃さなかった」。

さっと鋭い視線を千穂に向けると、千穂はしばし冷や汗を流しながら、申し訳なさそうに真奥を見て、そして白状した。

「……………ごめんなさい真奥さん」

「……いや、俺こそ、すまねえ」

真奥としても、千穂がいる前でシフトの嘘が通じるなどと思っではいなかったし、後輩に嘘をつかせるのもどうかとも思うので、千穂に詫言と共に、さらりと降参した。

「で……なんだよ。明日俺は休みだよ。それがどうした」

ただ、恵美の言うことに素直に従いたくなかっただけである。

恵美は頭くす、意外にも真面目な顔で真奥に言った。

「どうせ暇してるんでしょ。明日のお買い物、ベルと千穂ちゃんに付き添ってあげて」

※

翌日午前十一時、真奥と千穂と鈴乃は、京王線新宿駅西口改札で恵美と梨香と合流したのだった。

「で、真奥さんは、美女四人に囲まれているというのに不満そうだねえ」

「……あんな、おせっかいなだけじゃなくて、本当面倒な奴だな」

「自覚はあるよ」

「なお悪いわ」

真奥は辟易して溜息をつく。

「ごめんね梨香、突然呼び出して」

「いいのいいの、どうせ暇なんだから、恵美の友達達は私の友達よ。どーんと大船に乗ったつもりでいいさい」

「梨香殿、休日を私のためにさいていただきかたじけない。今日はよろしく頼む」

鈴乃は梨香に小さく一礼。元々強靱な肉体を持っているせいか、昨日の熱中症の後遺症は欠片も見当たらないう。

「よろしくお願いします!」

千穂も元氣よく一札。梨香は得意満面の笑みでそれに応える。

「お任せあれ!」

真奥は恵美と梨香と千穂と鈴乃の挨拶を、少し離れた所で冷めた目で見ていた。

休日を使って付き合っているのは真奥も同様なのだが、どうもそこを旁（たづな）つてくれる者はこの場にいらないらしい。

当初、真奥は鈴乃の買物に付き合えという恵美の要請を、即答で拒否した。

ただでさえ最近鈴乃の騒動で疲れているのに、何を好き好んで敵の買物などに付き添ってやらねばならないのか。

だが恵美は恵美で、そんな真奥の反応は予測済みだった。

「分かってると思うけど、彼女結構迂闊なところあるでしょ」

アパートの廊下に真奥を連れ出した恵美は、そう言っただけ腕を組んだものだ。

「それで鈴木梨香やなんか迂闊なこと口走らないように見張れっか? 俺の知ったことじゃねえよ。そっちでなんとかしろ。俺には関係ねえ」

「うん、きつとそう言うと思ったわ」

だが恵美は、真奥のそつけない態度も意に介していない。ただ、「言、少しかだけ大きな声でこう言った。」

「なら私は、どんな手段を使っても、今日以降、ベルと千穂ちゃんが魔王城に食糧援助するのを全力で止めてあげるわ」

「なんだという!」

その言葉に血相を変えたのは、部屋の中にはずの芦屋だった。

「エミリア貴様! 魔王城を兵糧攻めにするつもりか!」

「あら? だって敵の援助なんかできないんでしょ? だったら人間側から悪魔側に援助する理由もないと思うわ? 私は勇者として、それを止める義務を感じざるを得ないわね」

「しかしこちらにも家計の都合が……」

「それこそ「私の知ったことじゃないわ。そっちでなんとかしなさいよ。私には関係ないわ」
「う」

真奥は自分のセリフを復唱されて、グウの音も出ない。

「大体アルシエル、あなた言ってたわよね? 聖別食材よりも家計が助かることの方が大事って。ベルの援助を進んで受け入れているくせに、こういうときは「向こうが勝手にやってることだ」とか言い出すわけ? 誇り高き悪魔大元帥様は、随分とさもない根性してるのね」

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ」

「……それに！」

恵美は真奥と、横から顔を出した芦屋を交互に見て、声を響める。

「あの天使のことを思い出した方がいいわ」

「……」

恵美の言う天使とは、もちろんサリエルのことだ。

「こんなこと、思い出すのも気持ち悪いけど、サリエルは千穂ちゃんにも興味を示してた。魔王、あなたのすぐそばに『普通の人間』として研究材料にしたいみたいなことも言っていたわ。またベルと一緒にいるときに、何かちよっかい出してこないとも限らないでしょ」

「うーん……………」

恵美の心配は分らないでもない。

真奥も正直、如何に木崎が美しいとはいえず、サリエルがあそこまで簡単に骨抜きになって己の天使としての分を忘れたとは思えない。

思い難いのだが、あの戦いの後のサリエルは、そうとしか思えないほどマグロナルドに通い詰めては、木崎の機嫌を取るために真奥や千穂にも愛想をふりまき、本気で天使の分を放棄してしまつたと思えないのも確かだ。

「……はあ。仕方ねえなあ」

「魔王様!？」

「家計と、ちーちゃんのためだぞ」

真奥が折れた形になり、恵美も少しか表情を和らげた。

「結構よ。もし時間が合うようなら、夕方以降仕事が終わつたら、後は私が引き受けるから」

「……へいへい」

と、とりあえず納得してつてきたは良いものの、真奥は早くも後悔しはじめていた。

恵美と別れてから、鈴乃が化粧品を一切持っていないという話を聞いた梨香は、恵美や千穂と同じようにひとしきり鈴乃のほつたをいじり回した末に、京応百貨店の一階化粧品売り場に向かった。

「な、なんだこりや!？」

売り場全体が、奇妙な甘ったるい匂いで覆い尽くされている。そこかしこに掌に突き刺さりそうなまつ毛を生やした外国人女優の大きな写真が散りばめられ、カラフルな液体が満ちたボトルが数えきれないほど陳列され、広大なフロアには見たこともない横文字が大量に並んでいる。

そして恐ろしいことに、

「男が一人もいねえな」

「いるじゃん、あんたが」

「そういうことじゃなくてだな!」

梨香に突っ込みながら、真奥は改めて売り場を見渡す。

客も、従業員も、全てが女性。特に従業員は、カラフルな商品とは対照的に黒一色の衣装に統一されておられ、皆似たような髪型と化粧をして、全く個性識別ができない。

男性はエスカレーターそばに、店舗全体の案内役といった風情の老紳士が一人いるのみで、真奥のような若い男は足を踏み入れることすら躊躇われる空気だった。

「な、なあ、俺よく分からないんだが、化粧品って薬局とかに売ってるんじゃないめなのか？」
付き添いとは言え、鈴乃達がこの場で買い物をしはじめたら、真奥は一体どこでどう過ごせば良いのだろうか。

一緒にくっついていなければ後で恵美に何を言われるか分からないし、さりとて真奥に全く縁のない商品の売り場では、精神的な意味で真奥に立錐の余地は無い。

「ここなら色々試せるからさ。試供品も沢山もらえるし、ライン揃えようと思つたらいろんなパリエーションが簡単に揃うし、買わないまでも参考になるかなって」

「らいいん？」

試供品、というのは今こうして立っているだけでもそこかしこで女性客が小さな包みを無料でもらっているのが見えるので分かるのだが、真奥と、そして鈴乃も、梨香の言った言葉が分からず首を傾げる。

「んー、まあ要するに、化粧しはじめから落とすまでに必要な化粧品の流れを指してそう言うんだ。物は試しだけど、ちよつとよろつてみようよ」

「ま、マジか……」

真奥は思い切り気後れしているが、梨香は鈴乃と千穂を率いてずいずいと売り場に入つていつてしまう。

「うわあ、かわいいボトルー」

千穂が棚に陳列された、真奥にはなんだかよく分からない横文字の商品を見てうつとりとした声を上げる。

「あちら新商品でして、学生さんにも人気なんですよー！」

すると、千穂の声に呼び寄せられたかのように、突然その売り場の従業員が飛んでくるではないか。

「こちら、テスターですのでよろしかったらどうぞ！」

「ありがとうございます！」

従業員はそう言いながら、千穂に細いしおりのような紙を手渡す。

「あれは香水のテスターね。あの細長い紙に香水が染み込ませてあるの」
なんだらう、という表情を隠さない真奥と鈴乃に、梨香が先んじて解説を入れる。

「千穂ちゃん、行くよー！」

「あ、はい、すいません」

そして梨香は、千穂に少し強めに声をかけ、さらなる説明を千穂に積み掛けようとする従業員から引き離した。

「引つかかると長いからね。こういうところは、個人でどれだけ売り上げたかがダイレクトに評価に関わってくるから、皆すいずい来るのよ。うかうかしていると食べられちゃうぞ」

「……」

梨香は冗談めかしているが、出来高が直接評価に反映されるということなら、先ほどの従業員は迅速さも領ける真奥である。

「で、鈴乃ちゃん、お化粧したことない……ってのが正直信じられないけど、それなら色々塗りまくるようなんじゃないやなくて、肌に負担の無いオーガニック系なんかがいいんじゃないかなと思っただから、この辺りどう？」

どう？　と言われもピンとこない鈴乃だが、真奥と違っただけは女性なので、なんとなく梨香の指し示すショップの様子に気持ちが高ぶっているようだ。

「に、日本の化粧というのは、楽しそうだな」

鈴乃は小さく千穂に耳打ちし、千穂も嬉しそうに頷く。

「鈴乃さん、お化粧したら、絶対にもっと綺麗になると思います」

「そ、そうか？」

気がつかしうにしながらもまんざらでもなさそうな鈴乃。

「とりあえず、色々聞いてみよう。こういうところはすぐ買う必要はないし、予算に応じて色々組んでくれるから、あまり気負わずに行くといいよ」

そう言っただけで梨香は鈴乃と千穂を促して、店内に踏み込む。

一方の真奥は後に続いたものの、売り場を埋め尽くす自分の身の回りに存在しない概念だらけの商品を見回しながら一人立ち尽くしていた。

たまたま入口近くの棚に飾られていた商品宣伝用のPOPが目に入り、そこにあった見本品の、卓上ラシュー油の小瓶程度のサイズのボトルに入った『新作美容液！』のPOPがついた商品に五千円もの値札がついているのを見て、膝がガクガクと震えはじめる。

化粧品の名のつくものは寝癖を急いで直す際のワックスと、唇が荒れたときのリップクリーム程度しか持っていない真奥にとって、この空間はエンテ・イスラから日本に流れ着いた瞬間と同じ思いを想起させた。

全てが自分の理解を越え、見知った物が何一つ無い。

言葉が全く分らない。

自分達と同種の生き物（男性）がどこにもいない。

恐ろしさで心細さに、情けなくも座り込みそうになった瞬間、

「何ボケっとしてんの」

「っはっは」

唐突に肩を叩かれて我に返った。

ふと見ると、梨香が不思議そうな顔をしてこちらを見ている。

「もしかして真奥さん、こういうところ来るの初めて？」

「……あ、ああ」

「あー、じゃあきつつかもね。男の人には何かなんだかさっぱり分からんでしょ」

馬鹿にされるかと思いきや、思いがけず梨香の口調は優しくかった。

「まー馴染む必要はないけど、こういう空気を知ってる男つてのは得点高いから、社会勉強だと思っでもちつと我慢してね。いつかカノジョでもできたときには、来ることになるかもしれないんだからさ」

「お、おう……その、鈴乃とちーちゃんとは？」

「お店の人に任せてきた。お医者さんみたいに問診とかあって、肌の様子とか機械で測ったりもしてくれるから、あとは鈴乃ちゃん自身で買う買わないは判断するしかないしね。断つてもOKってことは教えてあるし、千穂ちゃんにはまだ手の届かない値段だろうからお店の人も分かってくれるし、まあそつちもお勉強かなって」

「そ、そうか……なあ、一つ聞いていいか」

カノジョ云々は置いておいて、真奥には、この化粧品フロアに入った瞬間から気になって気になって仕方ないことがあった。

「女の化粧品って……どれだけ種類があるんだ？」

「え？」

梨香は真奥の問いに一瞬考え込んでから、不意にやりと口角を上げる。

「本気で聞きたい？」

真奥は久しぶりに、人間に対して本能的な恐怖を覚えた。

「まず朝に顔洗う洗顔フォームから始まって化粧水、美容液、アイケア、乳液、クリーム。出かけるんならサンプロテクトに化粧下地、コンシーラーにファンデーション、肌の血色次第ではチークやハイライト。目元にもアイライナー、アイシャドウ、マスカラ。時間があつたり気合入った人なんかは部分マスカラや下まつ毛用マスカラとか分けて使うね」

「……マスカラつてのは、あの両手でシャカシャカ……」

「楽器じゃないよ。定番ボケはやめてね」

「……」

「さすがに口紅は分かるでしょ？ その口紅周りで言えばリップライナー、グロス、リップ美容液なんつてもあるね。手の爪のマニキュアなんかこだわる人は本当こだわるし、夏はみんなミュールとかサンダル履いて爪先出すから、ペディキュアも欠かせないわね」

「……」

真奥には、もう未知の世界の魔術の文言にしか聞こえない。

「これだけで終わると思ったら大間違いだぜ。家に帰ったらメイク落としに洗顔スクラブ、風呂上がりに念入りにボディケア。夜用化粧水、夜用美容液にパックとかして、除光液でマニキュアやペディキュアを落とした後、寝てる間のネイルケアすりや完璧よ!」

もはや真奥は垢輪の顔をしている。

真奥が梨香に遊ばれているのを見て助け船を出したのは、戻ってきた千穂だった。

「あの、年齢や肌質や環境によって使うものは違いますし、みんながみんなそんなに沢山使ってるわけじゃないですよ? 一つで何役もこなすものもあるし、あんまり驚かないで……」

「ありや千穂ちゃん、もういいの?」

「はい、鈴乃さんがあそこで……邪魔になっちゃいますし」

「あ、そっか。やってみるんだ」

「はい。お店の人も、やりながら色々教えてくれてるみたいです」

「……あ?」

真奥は垢輪になって空洞化した目を鈴乃の方に向けてると、鈴乃は先程問診をしていたデスクから、大きな鏡のある化粧台に移動していた。

「何してんだ?」

「お店の一般的なラインで、試しに化粧してもらってるのよ」

「……タダでか?」

「基本無料だと思うけど」

「ラー油が五千円もするのにか?」

「は?」

「……いや」

ただ鈴乃のそばで待っていても仕方がないので、鈴乃が終わるまで梨香は千穂と真奥を連れて一通り売り場を回る。

梨香も決して裕福な生活をしているわけではないので高級化粧品ばかりを使い続けているわけでもないものの、やはりそこはOLの空気の力。

学生の千穂や男性の真奥だけでは絶対に声がかからないだろうが、梨香と一緒にいるおかげで立ち止まると必ずなんらかのテスターや試供品が飛び出してきた。

「どれか気になったのあったら、千穂ちゃん持って帰る?」

「え、い、いいんですか?」

「お母さんに見つかっても怒られたりしないなら、折角来たんだし持って帰りなよ」

「う、うう……ど、どうしよう、どれにしよう」

千穂は福を煽めかせて梨香が手に入れた試供品を眺め、真奥はもうこのフロアにいる間は無念無想で過ごそうと心に決める。

「そろそろ鈴乃ちゃん、終わるころかな」

千穂が遠慮がちに二、三の美容液の試供品を手を取ったとき、梨香が時計を見る。

三人が売り場に戻ると、そこには、

「ち、千穂殿……」

落ち着かない様子で、鏡台の前に座る鈴乃がいて、千穂は思わず声を上げる。

「わあ!」

「へ、変ではないかな……」

「そんなことないですよ! 鈴乃さん、すごい綺麗です!!」

「おお、やっぱ元が良いと出来もいいねえ!」

「つい、頑張りすぎてしまいました!」

なぜか千穂と梨香と一緒に、売り場の美容部員の女性まで、大仕事をやりきったようにいい顔をしている。

「ね、真奥さん! 鈴乃さん、綺麗になりましたよね」

「あ、ああ……まあ、変われば変わるもんだなあ」

真奥も千穂に突かれ、とりあえずそう言ってみる。

元から色白の肌のキメがさらに艶やかになり、凛とはしているものの幼い印象が拭えなかった鈴乃の顔立ちが、大人の女性のそれに代わっている。

日頃も血色のいい方ではあるが、口元のみずみずしさも増しているように見えた。

なので真奥は比較的素直にそう言ったのだが、なぜか梨香が顔を顰めて、

「これ見てコメントがそれだけかい」

と苦言を呈した。

真奥としてはそれでも十分社交辞令を果たしているつもりなのだが、なぜか千穂も微妙そうな表情。

「そ、そうか。おかしくは、ないか。うん」

だが当の鈴乃は意外にも、満更でもない様子である。

それまで『業務用の化粧』しかしたことなかった鈴乃は、初めての『女性としての化粧』で生まれ変わった自分の面差しを、驚きつつもやはり気に入ったらしい。

「うん、鈴乃ちゃん、すごく可愛くなったよ。そこは間違いないから」

梨香は鈴乃に自信をつけるように背を叩くが、なぜかそのまま鈴乃の背を押さず、

「じゃあもうちょっと見て回ろうか」
と言いつつ出した。

「え?」

慌てたのは鈴乃である。

一瞬、化粧を施してくれた美容部員の方を振り返るが、そちらもあまり梨香の言動を気にし

ていないようだ。

「お待ちしております、お気に召しましたらまたお越しください」

「え？ え？」

それどころか美容部員の女性は鈴乃の首から汚れ避けの不織布カバーを外すと、笑顔で鈴乃と梨香を送り出してしまふ。

「気に入ったのは分かるけど、即決はNG」

「は？」

「とりあえずごはん食べに行つて、ちょっとあちこちぶらつこ。それで大丈夫なら、買いに行こうよ。ね？」

「あ、ああ……」

梨香の意図が分からない鈴乃だったが、千穂も何も言わないのでとりあえず従う。

そして真奥は、他人事ながら、あそこまでやってもらつておいて一銭も払わずに出てきてしまつていいのだろうかという不安でいっぱいだった。

「恵美の奴……今日の俺の昼飯代も持つてもらわなきゃ、割に合わねえぞ……」

お昼も大分過ぎた午後三時。

真奥は京応百貨店の女性衣料品売り場の隅のベンチにぐったりと座り込んでいた。

鈴乃の化粧品を買いに来たはずなのに、化粧を施してもらつて以降、なぜか女性陣のウィンドウショッピングが始まったのだ。

何を買うでなく、ただあちこちの店を行き来するだけの店内散歩とも言ふべき動きに真奥はがつり体力を削られてしまった。

鈴乃と千穂と梨香は、真奥の座るベンチに近い雑貨売り場で、可愛い食器を買うでもなくただ見て回っている。

鈴乃は余程化粧が気に入ったようで、鏡面の壁やショーケースのガラスなどに自分の顔が映ったときなど、気恥ずかしそうに、それでもどこか嬉しそうにはにかむのに真奥は気づいていない。

鈴乃がエンテ・イスラのことを梨香にうっかり話してしまうのでは、という恵美の心配も完全に杞憂で、鈴乃が日本の常識について不自然に分からないことなどは千穂がうまくフォローしてくれている。

当然サリエルも現れず、このまま何事も起こらない場合、真奥は本当にただ休日を鈴乃のために費やしてしまっていることになる。

まあ、千穂と鈴乃には日々の食事について一応の恩があることは間違いないので、それならそれで構わないのかもしれないが、恵美の要請でというのがどうにも気に食わないというか腑

に落ちないというか……。

「ん？」

そんないじましいことを考えていると、ふと鈴乃が真奥のいるベンチに戻ってきて、難しい顔をしながら隣に座った。

「どうした？」

「いや……少しその……」

鈴乃はほんの少し眉根を寄せて、頬のあたりを盛んに気にしている。

「あ、やっぱ来たかな。顔、なんか変な感じする？」

と、鈴乃の異変に気づいた梨香と千穂も真奥の所に戻ってきて、鈴乃の顔を覗き込む。

「少し、頬と目元が……びりびりする」

「やっぱ来たか。いきなり全部は、ちよつとやりすぎたかもね」

梨香がそれほど不思議に思うでもなく靴の中から、ウェットティッシュのようなものを取り出し、鈴乃に差し出す。

「お化粧落としに行くよ。お手洗いでいい」

梨香の提案に驚いたのは鈴乃もそうだが真奥もだった。

ここまでしっかり化粧をしてもらったのに、こんな短時間で落とすのか。

「だ、だが、せつかく……」

「元が綺麗な肌なんだから、荒れちゃったら最悪でしょ」

躊躇うのは鈴乃も同じだったが、そんな鈴乃を強引に立たせて手洗いに引立てる梨香。

「な、なんだどうした」

二人の背を見送りながら驚く真奥だったが、千穂が少し残念そうに解説した。

「多分……ラインの中に、鈴乃さんのお肌合わないものがあつたんだと思います」

「はあ……」

「お化粧って外に出ている間ずっとするものですから、靴を夕方買うのと同じで、疲れてくるころや遅い時間になつても肌と合ってる化粧品が、一番自分にいい化粧品なんです。お母さんの受け売りですけど」

「なるほどな」

それであえて梨香は、食事をしたりあちこち歩き回ったりしていたのか。

「夏場は汗で浮くから特に選ぶのが難しいって、売り場のお姉さんも言っていました。鈴乃さん、お化粧気に入ってたみたいだから落ち込んでなければいいんですけど……」

千穂の心配は的中した。

梨香に連れられて戻ってきた鈴乃は、すっかり化粧を落としていつもの彼女の顔立ちに戻っており、肌の違和感はなくなつたようだが明らかに意気消沈している。

「そ、そんなに気に入ってたのか」

鈴乃の落ち込み様に驚く真奥だったが、一方の梨香はといえば、

「だーかーらー、よくあることだからそんなに気を落とすことじゃないって。それに、ようやくこれから本命なんだから、しゃきっとしてしゃきっと」

と鈴乃の手を取ってどこかへと向かいはじめた。

千穂と真奥も顔を見合わせながら慌ててそれを追う。

梨香が向かったのは、ルミナ新宿の、確かに化粧品売り場なのだが先ほどのように美容部員が大挙して待ち構えているのではなく、普通の薬局よりちよつとおしゃれな程度のコスメフロアだった。

値段も、先ほどの売り場に比べればずっと安価なものが揃っているのが一目で分かる。

客層も、千穂より若い学生から主婦に至るまで多種多様だ。

梨香は売り場の様子を見ながら鈴乃に言う。

「プロにやってももらったんだから、大体の感覚は分かるでしょう？ そしたら揃えられるもんはちよいちょい安いのがプチブラで揃えて、自分に一番いい組み合わせを探して。本当のところ、私達くらいのトシの女がさっきみたいなお店なんかで買えるのは、年に一回思い切って化粧水や美容液を一、二本が関の山よ」

「……」

「化粧品は、自分に合うかどうかが第一。はつきり言って値段の高い安いは二の次よ。こうい

うところから色々試して試行錯誤するの。一回で全部自分に合う化粧品を見つけるとか無理無理。いきなり高いの買って、さっきみたいに合わなかったりしたらダメージでかいじゃん？」

「う、うむ……なるほど」

「あ、あれ、私が使ってる日焼け止めです。種類いっぱいあるんで、鈴乃さん、どうですか？」
千穂が自分の愛用品を見つけて棚の前に鈴乃を誘う。

「そ、それなら最初からこっち来ておけば……」

そんな千穂と鈴乃の様子を見ながら真奥がそう言うのと、梨香は少し肩を凍めた。

「鈴乃ちゃんの年齢まで化粧したことないって、自信がないとかトラウマがあるとか、何かお化粧品自体に抵抗があんのかなって思ってたさ」

鈴乃は千穂と二人で、千穂が愛用しているという洗顔クリームなどの棚を見ながらあれこれと話し合っていた。

「折角美人なのに最初で頓いてはしかなかったから、まずいいところお試して思ったのよ。私だってあんな高い所、何回も足踏み入れたことないわよ。いつも使ってる化粧水は、家の近所のタケツヨの千円のやつだし、私も恵美に期待されてるほど、お化粧品詳しいわけじゃないもん」

つまりさっきの化粧品羅列の呪文は、やはり真奥をからかっていたということだ。

「それでも千円か……女ってのは大変だな」

飲み食いできない物のランニングコストとしては十分高額に感じる真奥だが、梨香は苦笑するだけだ。

「それを引き合いに出して男に『女って大変なのよ!』とか言う奴は私も嫌いだけど、困ったことに、大変なはずの面倒事が嫌いじゃないからね、女は。だから余計大変なのよ」

考えても詮ないことだが、もし真奥は自分が女だった場合、日本に降り立ったら最低限の化粧品を揃えたりしたのだからかと考えてしまう。

だが木崎も、同僚の女性クルーも皆何かしらの化粧をしているのを見ると、やはり女性の社会常識として最低限の身だしなみは整えていただろうと思ひ、ついでそれにかかる金額に思ひを馳せ、自分は男で良かったと改めて思うのだ。

「だからね真奥さん。千穂ちゃんも、実は恵美も、あなたに会いに行くときはそれなりにおめかししておるのだよ、少しくらいその努力を費めてやっているかい?」

「……気持ち悪い言い方すんな。あんた俺がそんな気の利いた男に見えるのか」

「見えないから言ってるの。まあ恵美とは仲悪いからいいけど、千穂ちゃんなんか、費めてあげたら喜んでくれると思うけどなあ?」

「……………」

千穂相手の話だと、無下に切り捨てるわけにもいかず、魔界の王は貝の沈黙を余儀なくされる。

裏める裏めない以前に、真奥は千穂に対して、言わなければならないもつと大きな回答を保留にしているのだ。

それをきちんと答えるまでは、そのようなことを軽はずみにするべきではないとも思う。

「ま、男の人にしてみりや無駄で面倒だろうねえ。でも、最近では男性コスメとかも流行ってるんだぜ?」

「はあ!? 男が化粧すんのか?」

「女ほどがっちりじゃないけどね。ムダ毛剃ったり、肌ケアしたり、男性用のナチュラルカラーの口紅とかあったりするんだよ?」

「冗談じゃねえよ! そんなことしてる奴見たことねえぞ?」

「折角だから試してみたら? お店でお客の受け良くなるかもよ?」

「なってるまるか! 男は素のまま男らしいのが一番だ!!」

「だからその男らしくなるための化粧もだね……!」

「これ以上余計な出費増やしてたまるか!!」

結局真奥は、鈴乃と千穂の買ひ物が終わるまで梨香に遊び倒されてしまったのだった。

夕方、新宿で梨香と別れ、笹塚駅で千穂と別れた真奥と鈴乃は、並んでアパートへの帰路につく。

鈴乃の手には、ルミナのコスメフロアで購入した化粧道具一式が入った紙袋と、京応百貨店で化粧をしてもらった店の小さな紙袋が一つ。

ハーブの香りがどうしても気に入った、という小さな美容液を一瓶だけ購入したのだ。

「随分、機嫌がいいな」

最初の化粧を落としたときは完全に意気消沈していた鈴乃も、今はどこか楽しげに微笑んでいて、今日一日を楽しんだことがはつきり分かる表情だった。

「そうだな。柄にもなく楽しんできました。こんな経験は初めてだったからな」

「ん？ この前も、なんだか色々好き放題買い物してたじゃねえか」

鈴乃と恵美と梨香が初めて連れ立ってマグロナルドに来たときは、鈴乃は相当色々な買い物をしていたような気がして真奥は首を傾げる。

「ああ、そういうことではない。こう……」

鈴乃は歩きながら、千穂と別れた笹塚駅の方向を振り返る。

「友と一緒に、ただ純粹に休日を楽しむ、ということをしたことがなかったから、今日はとても楽しかった」

「ふーん……そっか」

真奥も訝然かに聞いたわけではないが、エンテ・イスラにいたころの鈴乃は、かなり凄惨かつ過酷な日々を送っていたらしい。

一度はそんな過去からの波に吞まれて、恵美や千穂すら犠牲にしそうになったのだ。

それを思えば、今の彼女を取り巻く環境は、あまりにも明るく、快いものだろう。

「貴様にも、感謝せねばなるまい」

「あ？」

「エミリアに言われたのだろう？ 私の様子を見張れと」

「……まあ、それだけが理由でなくてもいいが……」

「エミリアも、まだ私を全面的に信じられはしない。それだけのことを、私はしてしまったかな。日本に居座っているサリエル様が、千穂殿に害を及ぼさないと限らない」

「……ああ」

「私もその懸念は持っていた。だから正直、貴様がいて少しだけ心強かった」

「おお？ どうした、突然」

「お前達やエミリアが、この国に来て今のような生活をしている理由が、なんとなくだが分かったということだ」

そして鈴乃は、夕暮れの中でやおら立ち止まると、はつきりと真奥に向かい合う。

「魔王、私は貴様の敵だ。それは変わらない。だが、これだけは信じてほしい。私はもう決して」

て、千穂^{ちほ}殿やエミリアを裏切るようなことはしない。だからエミリアが貴様を討伐^{とうはつ}すると決めるまでは、私も貴様達に手を出したりはしない」

「いい話のようで、死刑の執行猶予^{しゅぎょうようよ}申し渡しに聞こえなくもないのは気のせいかな」

真奥^{まおく}は苦笑するが、鈴乃^{すずの}の言葉に嘘偽^{うそいつはり}りがないことだけははっきりと理解できた。

「お前の好きにしろよ。恵美^{けみ}はともかく、ちーちゃんを悲しませるようなことさえないけりや、それでいい」

「承知した。それと、そのような状況だからこそ、貴様からの借りを清算したい。アルシエルもやかましいからな。早いところ、代わりの自転車の目星^{めぼし}をつけてくれ」

「言ったな。覚悟^{かくご}してろよ。めっちゃいいやつでも遠慮^{えんよ}しないからな」

真奥はにやりと笑ってそう宣言すると、

「んじや帰るか。そうだお前、恵美がどう言うんならそろそろ携帯電話買えよ。お前の様子が気になるってんで恵美が前にもましてアパートに頻繁^{ひんぱん}に来るからうるさくて仕方ねえ」

「携帯電話こそ、エミリアに相談^{さだん}したな。今日のことと礼を言わねばならないし……」

夏の夕暮れ時。

敵同士の隣人同士。魔王サタンと訂教^{ていぎょう}審議^{しんぎ}会筆頭審問官クレステイア・ベルの話題は、今日の買い物ことから、明日の朝食の献立と芦屋^{あしや}の料理の腕についての話題に移ろいつつあったのだった。

勇者、敵の台所事情を聞く - 芦屋の場合 -

鈴乃が梨香達と共に化粧品を買いに行つた翌日の昼のこと。
「エミリア、貴様自炊はするのか」

「は？ いきなり何よ」

その後が気に入り鈴乃の部屋を訪ねてきた恵美に、ヴィラ・ローザ笹塚の二階共用廊下で顔を合わせた芦屋が敷から棒にそんなことを言い出したのだ。

「自炊はするのかと聞いている」

「よく分からないけど……日によるわよ。一人暮らしだから一回に沢山作って二、三日同じもの食べちゃう日とかもあるし、今は夏だから簡単なもので済ませるとか、疲れてるとコンビニのカレーとか商店街のお惣菜買っちゃうこともあるけど、それがどうしたの」

コンビニとお惣菜のくだりは言う必要が無かったか、と思つた恵美。

芦屋の主夫としての能力が高いのは周知の事実なので、そのことをネタにまた何か嫌味の一つでも言い出すのかと思いきや、芦屋は深刻な顔で鎮くと、さらに妙なことを聞いてきた。

「貴様の平均的な勤務時間は、九時五時か。それとも残業などあつたりするのか」

「はあ？ なんてそんなこと知りたいのよ！？」

「他に聞ける者がいないのだ！？」

普段なら妙なことを訪ねてくる芦屋など突っぱねるところだが、やけに真剣な面持ちだったために、恵美は仕方なく答えてやる。

「……正社員じゃないから、私は滅多なことじゃ残業したりはしないわよ。終業は入り時間次第だけど十七時から十九時つてところかしら。遅番の人なんかは十一時とか十三時に入つたりもあるみたいだけど」

「やはりそうか……」

それだけ聞くと、芦屋は深刻に眉根を寄せて何かを考え込んでいる。
一体なんなのだろう。恵美は首を傾げる。

「あなた、魔王みたいな定期的にアルバイトでも始めるつもりなの？」

この前、日焼け止め云々の話題で家計がうまく回らないことを気に病んでいたことを思い出しよう尋ねると、

「その可能性も、捨てきれんただけ言っておく。邪魔したな」

そう言つて、部屋に戻つてしまった。

「なんなのよ……」

恵美は不穏なものを一切感じないことが不穏な気がしながらも、とりあえず鈴乃の部屋の呼び鈴を押そうとして、

「やはりこのままではいかん!!」

突如響き渡つた芦屋の怒声に驚いて目を見開いた。

「い、いきなり大きな声出さないでよ！ 一体なんなのさ！」

芦屋が部屋の本真中で仁王立ちのまま怒声を上げたものだから、漆原は思わず畳から腰を浮かして飛び上がった。しょう。

「……このままではいかああん!!!」

「だから何がさ！」

漆原は芦屋の殺意に満ちた目に嫌な予感を覚えつつ、先を促す。

「漆原、貴様、今の状況をどう思う!?」

「はあ？ 今の状況って？」

「我々はこのままで良いのか、ということだ!!」

「はあ、何、それはつまり、本当は魔王の真奥がアルバイトして、芦屋が主夫してるこの状況ってこと？」

このままでいいのかと聞かれれば、客観的に見れば良くないだろうと漆原でも思う。

一応この部屋に住まう三人は魔界の頂点に君臨する大悪魔達であり、本来はエンテ・イスラの人間世界を征服するべく日々努力をしなければならないはずである。

人間に身をやつしてのフリーター生活は当然自分達の本意ではなく（漆原自身は結構楽しんでるものの）、家主にして魔王たる真奥も、必ずエンテ・イスラ征服を成し遂げると日々公言して憚らない。

だから芦屋が言いたいこともそういうことなのだろうと思いきや、

「もっと根源的な問題だ！ 我々はこのまま、唯々諸々と佐々木さんやベルの食料援助を受けて続けて良いのか!!」

「芦屋の根源の置き場がよく分からないよ」

漆原はがつくり屑を落としてから、それでも突っ込む。

「でも何いきなり。何か問題あるの？」

「大アリだ！ 貴様はそうは思わんのか！」

「だから何がさ。ちゃんと説明してくれないや分からないよ」

「愚か者め！ 良いか！ クレステティア・ベルはそもそも我らの敵だ。敵からの塩を受け続けていること自体、我らの矜持にかかる由々しき事態だ」

「今更な気がするけど……変な話だけど、それはお互い利害が一致したってのもあるでしょ」
鈴乃は聖別食材で真奥達の弱体化を狙いたいし、真奥達は鈴乃の食糧援助のおかげで家計が助かっている。

何がプラスで何がマイナスかはともかく、確かに鈴乃と魔王軍の利害は一致していた。

「だが！ それも奴の聖別食材の在庫がもつ間だ。その後、ベルが普通の食材を援助してくれるとは思えんし、そんなものを受け入れることもできん。となると、その日から家計が一気に傾く！」

「完全にベルのご飯アテにして家計組んでんじやん。てか家計が傾くって大げさなんぐつ」

「貴様の通販による無駄遣いも大いに影響しているのだぞ……！ 自覚はあるのか、んん！」

「近い近い近い苦しい苦しい苦しい」

芦屋に頼まれた胸倉を振り払いながら、漆原は喚く。

「でも佐々木千穂は普通に好意でやってくれてんだろ。あいつだって色々持ってきてくれてんだし、ベルの分が無くなってもそこまで影響ないんじゃないの？」

「だから貴様は愚かだというのだ。佐々木さんは一人暮らしをされているわけではあるまい」

「最近の芦屋、どうして佐々木千穂に対してナチュラルに敬語なの……」

「佐々木さんの差し入れには、少なからずご両親のお力添えなくては成り立たぬものが多い。それは材料的な意味でも、金銭的な意味でも、調理道具的な意味でもだ。どういうことが分かるか。佐々木さんから過分な援助を頂くということは、どこかのタイミングで相応の『お返し』をしなければ、佐々木さんのご両親から魔王城への信用に関わるのだ！」

千穂曰く、魔王城に来るのは両親公認ということだが、逆に言えば千穂の両親から真奥への信用が失われた場合、千穂も魔王城に来るのが困難になってしまう。

まして真奥一人ならともかく、家人全員が千穂の差し入れを本気で当てにしているなどと先方に知られれば、魔王城の評判はストップ安に陥るだろう。

どれだけ千穂が自分の好きでやっていること、と言いつ張りうとも、保護者の立場からすれば、千穂の行動全てを看過することはできないだろう。

そして魔王城の家事家計の全権を預かる芦屋の立場は、どちらかというと千穂の両親の立ち位置に近い。

「分かるけど、色々突っ込みたくはある」

「かと言って、佐々木さんの性格では、魔王様ご自身がよほど強く仰らない限り、手料理を持つてくるのをやめろと言っても聞き入れてはもらえないだろうし、こちらとしても佐々木さんのご厚意を無下にするのは心苦しい」

「あー、真奥そういうの言えなさそう……」

「そこで本題だ!!」

「わっ！ だ、だから急に大声出すなって」

「お返しをするにしろ、家計を見直すにしろ、これ以上収入という面に於いて魔王様お一人にご負担をかけるわけにもいかない。なので、私もこれまでのような単発のアルバイトだけではなく、定期的にシフトを組んで出勤する仕事を探そうと思う」

「あ、そう。頑張ってるね」

割と予想できた話だけに漆原としては拍子抜けだが、芦屋の、本当に本当の本题はここからだった。

「だがそうすると、これまで完璧を期した私の家事が、滞る危険性もあるわけだ」

「う、うん、まあ、そうだね」

漆原の脳裏に嫌な予感がよぎる。というより、確信が湧き起こる。

「そこで漆原、貴様の出番だ」

「やつぱり!!!」

「私が出勤する日の家事を、貴様が担当しろ。拒否は許さん。拒否した場合は、この部屋から叩き出すぞ」

「そ、そんな無茶苦茶な!」だ、大体芦屋は魔力に関することの調べものだってあるんだろ! そっちはどうするんだよ!」

「貴様のパソコンのインターネット機能は飾りか? 動画サイトと通販サイトを見る為だけのおもちゃか、んん?」

「あ、いや、その……」

「魔王様のように毎日働きに出るとは言わん。だが週に二日、可能ならば三日、働きに出られるだけで家計は大きく上向く。分かるな?」

「わ、分かるけども……」

漆原も、そう理詰めで来られると、自分の行いを全面的に肯定するつもりはない。

だが、じゃあやれと言われてやれるかというと、それは全くの別問題。

たまたに食器を洗われることがあると、大体漆原の洗った皿は油が残っていたり、乾いた米がこびりついていたり、洗った後のシンクにゴミが残っていたりして、その都度芦屋の逆鱗に触れるのだ。

手伝っても手伝わなくても不興を買うなら面倒事は避けたい漆原だったが、そんな漆原の内心を察してか、芦屋は難しい顔で頷いた。

「もちろん、日がな一日ごろごろしている貴様に最初から全てを押しつけるつもりはない」

「へ?」

「魔王様も新人が一人前に育つかどうかは研修が九割、とまで仰っていた。私もそう簡単に動め先が見つかる保証はないし、その間貴様になつぷりと家事一切を仕込んでやる!」

「うえええええええ!?!」

漆原にとっては迷惑この上ない宣言だったが、芦屋の目はどこまでも本気だった。

※

全開の怒から聞こえてくる、隣室の悪魔大元帥と悪魔大元帥の、どこまでもスケールの小さ

「あなた、毎日こんなこと聞いているの」

「そうだな。むしろ今日はかなり特殊な会話だと思うほど、魔王もアルシエルもルシフェルも同じ話しかない。全員的生活様式が完全に固定されているとは思えないな。他の話題が入り込む余地が無いのだからと思う」

「……」

鈴乃を訪ねてきたら、突然廊下で芦屋に勤務時間を訪ねられた恵美。何事かと思えば鈴乃の部屋に逗留していたら、芦屋の主夫力が高次元の水準にあるという事実だけが察せられる会話を聞かされて、げんなりしてしまふ。

「もしアルシエルがどこかに勤務するようなことになったら、そちらも見張りに行ったりするのか？」

「冗談じゃないわよ」

恵美はそう言ったときのことを想像し、頭を抱えてしまった。

※

「いいか漆原！ 家事とは大まかに分けて掃除、洗濯、炊事の三本柱で成り立っている」

「はいはい……」

漆原は正座状態で堂々たる宣言をする芦屋を見上げながら、やる気のない声で頷く。

「何せ我らが住まう城はこの規模だ。一つ一つの作業は決して大きな困難を伴う量にはならない。慣れない貴様でも、炊事以外は二時間もあれば完遂できるだろう！」

「ええ……二時間も……」

「貴様は毎日何時間バソコンの前に座っている？」

「はい、すいません」

「そして炊事に関してだが、貴様に一汁三菜全てを作らせようとは思わん。冷蔵庫や家計との兼ね合いもあるし、貴様に火を使わせるのは不安すぎる」

「一応これでも炎の魔術だって使う悪魔大元帥なのに、なんでガスコンロの火使うだけでそんな不安がられなくちゃいけないのさ」

「とにかくだ、炊事に関しては米を研ぐ、炊飯器のスイッチを入れる程度のことしかさせるつもりはない。問題は、洗濯と掃除だ。これは基本的に日中に行わなければならない。何故だか分かるか？」

「人のことバカにするにも限度があるだろう」

「普段貴様が何時に起床するのかを思い出してから発言しろ」

完全に小学生以下の認識で扱われていることに不満を呈する漆原だが、芦屋は全く意に介さ

ない。

「洗濯は朝八時から九時ごろに始めるのが理想だな。この季節だともうそれくらいから陽は十分照っているし、近所迷惑にもならない」

「近所迷惑って……隣にベルがいるだけなんだし、そんなこと気にしても……」
「必要以上に相手に付け入る隙を与えるなどということだ！ ただでさえベルは我々の敵で、それでいて食糧援助を受けてしまっているのだぞ！」

「あおき、付け入る隙とか食糧援助とか、殺伐としたいの仲良くしたいのどっちなの？」

「掃除も同様だ。魔王城の掃除機は安物だから、排気音がやたらとうるさい。掃除と洗濯を同時にやる必要がある場合は先に掃除機をかけ終わってから、洗濯物を干すのだ。そうでないと、埃が舞うからな」

「ペランダが無いってのは、辛いことだね……」

「では早速、今日の分の洗濯物を片づける。そして洗濯機が回っている間に掃除機をかけるのだ。良いな！」

「はいはい……」

「返事は一回でいい！」

「あああああもう!! 分かったからさっさと始めてよ!!」
こうして、芦屋の漆原への家事指導が幕を開けたのだった。

「ねえ、これ、どこで買ったの。ていうか、どこで見つけたの。今の家庭用のスタンダードって、全自動じゃないの？」

アパートの共用廊下に出た漆原は、魔王城の洗濯機を見下ろしながら顔を顰める。

かつて真奥が、冷蔵庫や自転車と一緒に大人買いした、魔王城の備品の中でもなかなか高価格帯にある家電だ。

「貴様魔王城に住んでこれまで何を見ていた。洗濯機の形すら分かっていなかったのか」

「いや、そういうことじゃなくてさ。今時の洗濯機って、ドラム式とか全自動とかじゃないのってこと！ そういうのだったって安いのあるだろ!」

「二層式はそれに輪をかけて安いと、魔王様が仰せだったのだ!!」

「……買ったの真奥なの？」

「冷蔵庫もな」

「前から思ってたんだけどさ、真奥も芦屋も、もう少し安さ以外のところにも目を向けたら？ 買い物下手すぎるんじゃない？ そういうの安物買いの銭失いって言うんだろ」

「……まあ、私も、冷蔵庫については……そう思わなかったことがないが……」

「思ったことあるんだ」

珍しく^{やわやわ}芦屋が漆原に同意するが、しかし芦屋は一つ溜息^{ためいき}をついてから、二層式の洗濯機^{洗濯機}の表面に手を置いた。

「だが洗濯機に関しては、衣類を大切に扱うならば、二層式は意外と悪くないのだ。中にはなまじの全自動より値が張る二層式もあるそうぞ」

「そうなの？ てか芦屋、ネットもテレビもなしにそういう情報どこから手に入れているのさ」
 「二層式の利点は、なんと言ってもコンピュータ制御でないことだ。少ない水や洗剤で、少ない洗濯物を洗うことができるのは大きなメリットだな。我ら三人の中で最も洗濯物が多いのは外に働きに出ている魔王様だが、お一人ではそれほど大量の洗濯物はないし、お召し物の数自体、そう多いわけでもない。少ない洗濯物を頻繁に洗わなければならない場合は、使う水と洗剤の量をトータルで考えたと、安価な全自動ではやはり損になる。貴様が魔王城に住むようになってからは、より安価な粉石鹼^{おとげん}を使うようにしている」

「こな……せつけ……」

芦屋がさりげなく家計の切り詰めをアピールしてきて、漆原は二重の意味で衝撃を受ける。「バカにしたものではない。この暑さで水道の水もぬるくなっていてよく溶けるしな。世間では液体洗剤で除菌だ香りの柔軟剤だとやかましいが、洗濯機や衣類を適正に管理していれば、あんなものは本来不要なのだ。除菌除菌と騒^{さわ}がしい連中は、細菌を自分の周囲から完全に消滅させられるとも思っているのか。第一魔王様のお仕事内容を考えれば、商品の香りを邪魔^{じゃま}す

る要素があつては業務に差し支えるだろう。私は食事中に、芳香剤の化学的な匂^{にお}いを嗅ぎたいとは思わない」

「いや、僕に言われても……てかだからテレビもないのにそういう話どこから……」

「それに、脱水和洗濯を同時にできるのも大きい。色落ちのしやすいや、タオルなどを通常の衣類と分けて洗い、脱水中に別の種類の衣類を洗濯するなどして、時間も節約でき衣類も痛みにくくなる。下着と一緒にハンカチやタオルを洗うのには抵抗があるだろう。洗濯物の種類によって小分けに洗濯するのにも、二層式の容量の小ささは大きな武器になる」

「はいはいもう分かったよ二層式の利点はさ。で、この洗濯機はどう使えばいいの」

「うむ、ではまず、左が洗濯槽、右が脱水層なのだが……」

芦屋の二層式洗濯機への愛着に辟易^{へきえき}した漆原は、先を急^せがすことで苦行を終わらせようとする。

だが、いざ話を聞きはじめると、漆原の目からしてみれば、芦屋のこだわりは全く意味が分からなかった。

「え、シャツと一緒に洗うときタオルは、このネットに入れるんだっけ？」

「違う！ タオルのネットはこちらだ！ ……おい！ 先ほども言っただろう！ シャツのボタンは外してから回せ！ おいこれはなんだ！ 漆原！ ポケットに何か紙が入りつばなしになつていただろう！ これではやり直しではないか!!」

「ボタン留まつてたつてちゃんと回つてるじゃん何がだめなのさ！」
 「ボタンは汗をかきやすいところについているんだ！　そうやって放置すると、汚れが沈着して衣類の寿命が縮むのだ！」

「あーもう面倒だなあ所詮全部布じやんかも！……で、脱水はこれだっけ？」

「違う！　それは洗濯タイマーだ！」

「えー、じゃあこれ……」

「パネルに書いてあるだろうよく読め！　それは排水つまみだ！」

「もう！　こんな一気色々覚えられるわけないだろ！　ちよつとは考えさせてよ！」

「あれだけ大量のスイッチがついているパソコンを軽々扱えて、どうしてたつた五つのつまみがあるだけの洗濯機を扱えんのだ!!」

「そういう問題じゃないだろ!?　……あれ、なんでこれ脱水動かないの?　この一番右のいいんでしょ?」

「書いてあるだろう読まんか！　二分以下で脱水をするときは、一旦二分以上のところにメモリを合わせてから戻せと！」

「何それ面倒くさい!!　いちいち戻さなきゃ動かないような機構作るとか頭おかしいんじゃないの!?」

「パソコンを使う者に言われたくない!　……つて、おい!　脱水キャップは!?」

「はあ?」

「脱水機を使うときは脱水キャップを中に落とせと言つたろう!　そうでないと脱水機の中で洗濯物がうわつ！」

動き出した脱水機がごうんごうんとももの凄い音を立てて回りはじめ、芦屋が慌てて脱水機のスイッチを切る。

「……こうなるんだ!　下手をすると中から洗濯物が飛び出す恐れもある!　脱水をするときは、脱水キャップを入れろ！」

「そういう、プラグイン入れないとともに動かないソフトみたいのやめてよね。中蓋入れないと飛び出すとか、なんのためにその上蓋ついてるんだよ！」

「日本語を喋れ！」

試しに洗濯機を回させてみればこの有様である。

芦屋はこの先のことを考えて早くも暗澹とした思いで目の前が暗くなり、漆原は漆原で家事のあまりの面倒くささに、芦屋とは正反對の理由で暗澹たる思いがしてきたのだった。

※

「実際どうなのだ、ゼンジドーと、二層式とやらでは」

「私は全自動しか使ったことないから詳しくは知らないけど、確かに下着と他のものを同時に洗うのはどうかとも思うけど、少量洗濯もできるから分けて洗濯してもそれほど時間はかかる印象ないわ。それこそ『全部自動』なんかも」

二人は、鈴乃が置いていたという煎餅を齧りながら隣の洗濯機談義を引き継いでいた。「ふむ……まあゼンジドーを買う余裕が無いからこそ、アルシエルは手間をかけることで機能が至らない部分をカバーしようとしているのだな」

「でもルシフェルがやろうとして、できるものかしらね」

「無理じゃないか？」

「まあ、無理でしょうね」

※

「……ねえ、芦屋」

「なんだ」

「二時間もかかんないじゃん」

「そうだな。今日は洗濯物も少なかったし、掃除機は昨日かけたからな」
カジュアルコタツで向かい合い、芦屋と漆原は麦茶を飲みながら休憩の最中である。

「それに、別に終わったわけではないぞ。この後乾いた洗濯物を畳置きに取り込んで、それをきちんと畳んでしまう作業もある」

「それだって僕ら全員の服を洗濯しても大した量じゃないだろう。そりゃご飯作るのとかは手間かもしれないけどさ、芦屋の仕事量って、実はそれほどないんじゃないの？ 掃除も洗濯も、買い物だって毎日必ず決まった時間にしなきゃいけないってのもないだろう」

「何が言いたい」

「よく主夫業は大変みたいなこと言うけどさ、真奥みたいに外に出て働くのと比べて拘束時間があるわけでも、どんなのが来るかも分からない客を待ち構えなきゃいけないわけでもないじゃん。こういう家事が終わったら、それ以外の時間何してるのさ」

「何故日がな一日ごろごろしている貴様にそんなことを偉そうに糾弾されねばならん」
芦屋は眉根を寄せながら、グラスの麦茶を煽るとやおら立ち上がって押し入れに向かう。

「まあ、そうだな。ここ一、二ヶ月は色々あってあまり時間が取れなかったが……」

「？」

そして押し入れの下段から、大きな段ボールを引きずり出してくるではないか。

「貴様が来る前は、短期派遣の仕事が無い日は、大体図書館で写経をしていた」

「じゃ、写経？」

芦屋の口から唐突に飛び出した意味不明な単語に漆原は驚くが、芦屋が段ボールから取り出

「何……れ」

漆原が手に取って開いてみると、日本語で書かれた芦屋の文字で全ての紙面がびっしりと埋め尽くされていた。

「まさかこれ、全部……」

驚く漆原の前で、芦屋は中でも一番古そうなノートを取る

「懐かしいな。これはまだ右も左も分からなかったころ、とにかく魔力や魔術に関するもの」と思って手に取った少年少女向けの冒険小説を丸写ししたものだ。作品の中だけにしか存在しない魔術体系を本物と信じて、必死に書き写したせいでペンダコができたものだ。そっちの新聞はもう大分物事が分かるようになってからのものだから、丸写したりせずに要点だけ抜き出して纏めた、そこそこ高度な内容になっているはずだぞ」

.....

書かれている内容もちろんだが、最初のノートと別のノートを比較すると、芦屋の字が少しずつまくなっているのを見て取れた。

「全部手書きで写すって……ど、どんだけ時間かつたの……っていうか、図書館でコピー取れるんじゃないの？」

「コピーもタダではないから。自分の手で書けば文字の手習いにもなるし勉強効率も良い。私は魔王様とは違い、日本に来たときにはもう人間をどうこうできる魔力は残っていないから。何か日本や地球のことを学ぶとなれば、この方法しかないまい」

+

「それに魔王様が外で働き、私が調べものとか事を担当するという分業体制になってからは自由な時間の少ない魔王様の社会勉強をお助けするための資料にも活用していただいている。図書館も、新聞や百科事典などは借り出せないからな。今でも図書館に行つて最初に記録するのは新聞だ。魔王城が最速で得られるリアルタイムの情報は、それしかない」

「今どき、図書館の新聞が最速のリアルタイムって……まあ、いいけど」

漆原は段ボールに収められた芦屋の日本での歴史を眺めて、複雑な思いにとらわれる。

漆原自身 今の状況を（エアコンが無いこと以外は）快適だと思う反面、こんなことになるとは思いもなかったというのが本当のところだ。

それを戸屋と、真奥は、地道な努力で自分なりに良い方向に物事を進めようとしていたのだ。これは、その過程での欠かせない土台だったのだろう。

「でも何も婦人雑誌や女性向け雑誌まで律儀に纏めなくても……芦屋、芸能人の動向とか占いとか興味あるわけ？」

「婦人雑誌は節約術や料理術の宝庫だ。パカにしたものでもないぞ。若い女性向けの雑誌はファッションの観念も勉強になったし、それ以外にもやたらと色々な生活必需品の広告が入っていて、生活に不必要なものを選別する良い材料にもなる」

「持ち上げるのかバカにするのかどっちかにしてよ」

「それを読んでいたからこそ、佐々木さんの魔王様への覚えを良くするお手伝いができたということもある……つと、もうこんな時間か」

芦屋はふと、時計に目をやってやおら立ち上がる。

「漆原、とりあえずシャツの畳み方だけ教えておく。私はこれから図書館やスーパーなどに行かねばならん。この陽気なら洗濯物も三時には乾くだろうから取り込んで畳んでおけ。にわか雨には気をつけろよ」

「……分かった」

漆原は神妙な様子で頷く。

真奥と芦屋のこの一年間の日本での苦勞の証を前にして、さすがの漆原も何も思わないほど鈍感ではない。

漆原は複雑な顔で、芦屋が押し入れの衣装ケースから取り出したTシャツを受け取った。

「いいか、Tシャツはこうして横向きに置いて、肩のところを左右均等の幅で折りながら……」
「こう？」

「そうだ。一折することきちんと手でこうアイロンをかけると、びしっとまとまって綺麗に畳める」

「……なんか、芦屋みたいに綺麗に四角にならないんだけど……」

「アイロンをかけないからだ。こう手でなぞって、全体を畳んだときに少し肩を内側に入れ込んで……」

「本当に、こういう知識をどこで手に入れるんだよ……」

※

「あ、出かけるみたいね」

芦屋と漆原が衣類の畳み方云々の話をしはじめてからしばらくして、芦屋が外出する気配がした。

恵美はなんとなく魔王城側の壁を見やる。

「追うのか？」

その背に鈴乃が尋ねるが、恵美は無表情で首を横に振った。

「さっきまでの話聞いたら、予言者じゃなかったってアルシエルの行動は予測できるわよ」
「それもそうだな」

恵美と鈴乃は諦め顔で溜息をつく。

「ところであなた、これからしばらく日本にいるつもりなんですか？」

「そうだな。当初考えていたより、長期滞在になりそうだ。隣の奴らが、ずっとあの調子でいる限りは」

「……あなたも変なところで義理堅いわね」

数日前までの、頑迷な態度だった鈴乃のことを思えば、恵美も苦笑せざるを得ない。

「家電とか携帯電話とか、お金に余裕があるなら買っておいたほうがいいわよ？」

「そのところ、エミリアに聞いておきたいと思っていたのだ。自分でパンフレットを集めても、何が書いてあるのかさっぱり分からなくて……」

「携帯電話のことなら任せて。どんなのがいいの？」

それからしばらく恵美と鈴乃は、これからの鈴乃のライフスタイル構築について、あれこれと話し合った。

途中かなり強いにわか雨が降り、隣室の漆原が慌てたのか何やら大騒ぎをしていたことを除けば、特筆すべきことは何も起こらなかった。

※

「う・る・し・は・ら……………」

「おうっ!?」

陽も沈み、恵美もとくに帰宅したころ、エンテ・イスラから持ち込んだ宝飾品などをどれだけ日本田に換算すれば当座の生活に問題ないかを計算していた鈴乃は、壁を突き破って聞こえてきた芦屋の殺気だった怒声に正座したまま飛び上がってしまう。

「な、なんだ!? ……うわっ!?」

外に飛び出した鈴乃がまず目にしたのは、魔王城の洗濯機から吹き出されたらしい、廊下を白く染め上げる大量の泡だった。

「な、何が起った!? どうしたアルシエル……って」

鈴乃は泡を避けながら、開きっぱなしの魔王城の玄関を覗き込むと、

「ほ、本当に何が起った……?」

魔王城の中には、乱雑に散らばった皺だらけの洗濯物と、散らばったゴミ、そして妙な異臭が漂い、畳の上でボロボロになった漆原を、怒りだけで悪魔型に戻りかねないほどの殺気を放射する芦屋が仁王立ちで睨みつけている光景が広がっていた。

確かに漆原が夕方になにか雨が降ったころ、何やらどたばたしている気配は伝わってきていたが、こんな惨状を呈する事態が起こつていたと誰が想像できようか。

「クレストイア・ペル!」

「お、おお」

恐る恐る部屋を覗き込む鈴乃を、芦屋が般若の形相で振り返る。

「分かるな……今、貴様の相手をしている余裕は、私には無い！」

「あ、ああ、わ、分かった、邪魔したな」

その迫力に押されて、鈴乃は素直に引き下がった。

また泡を避けながら自室に戻り、神妙に玄關のドアを閉める。

そして、そんなことをしても全く無駄と言わんばかりに、壁を突き破って芦屋の怒号と

漆原の抵抗がダイレクトに伝わってきた。

思わず鈴乃はそれに聞き入ってしまったが、その言い争いは軽く十五分は続き、そして、

「……貴様に家事を任せたらどういうことになるのか、よく分かった」

芦屋が遂にギブアップ宣言を出す。

「定期的に働きに出るなど、不可能だったのだ……」

そしてついにはよよと泣き崩れる気配までする始末。

芦屋が留守の間に、漆原が何か馬鹿なことをやらかした、それだけは鈴乃にも想像できる。

だが、真剣に言い争いに聞き耳を立てて詳細を知ってしまったと、本気で芦屋に同情してしま

いような気がした鈴乃、敢えて耳を塞いで魔王城の内情に踏み入らないように努める。

ただでさえ、敵愾心が薄れそうになる瞬間がたびたびあるのだ。

これ以上同情してたまるものか。

そう思った鈴乃は、気を取り直して立ち上がり、自分の夕食を作るべくキッチンに立とうとする。

軽く手を洗い、献立をどうするか悩みながら、キッチン下の戸棚を開いたその瞬間だった。

「うわあああああああああああああああああああああああああああ!!!」

芦屋と漆原は、押し入れを突き破って飛び込んできた鈴乃の絶叫に、思わず身を凍ませたのだった。

魔王、留守中の事件に動揺する
- 漆原の場合 -

時間は、少し戻る。

窓に干された洗濯物を眺めながら、漆原は小さく溜息をつく。

千穂や鈴乃の世話になりっぱなしは承服できないという芦屋の気持ちも分らないが、それでもこうして自分にお鉢が回ってくると、なかなか面倒なものだ。

芦屋は買い物と図書館と言っていたから、さっき言っていたように新聞でも読みに行くのだろう。帰りは遅いのだろうか。漆原は芦屋の手書きのノートが詰められた箱を押し入れに戻すと六畳一間をぐるりと眺めまわしてから、肩を凍める。

「家事、ねえ。人間の世界はめんどいのか、ラクなのか分かんないな」

魔王軍の四天王・悪魔大元帥としてエンテ・イスラに侵攻したころも、悪魔達は別に裸一貫で突撃したわけではない。

高等悪魔になるほど上等な衣類を纏っていたし、真奥も芦屋も、悪魔時代に着ていた衣類を防虫剤と一緒に押し入れに保管している。

だが、魔王軍時代も、魔界統一前後も、魔界に「洗濯」という概念があったかどうか、漆原にはほとんど記憶がない。

自分自身、衣類について水ですすいだり洗剤で洗ったりといったことをしたことはないし、そもそも衣類からして、魔力による産物である場合が大半を占めたため、洗濯をものを必要としなかったという事情もある。

「ま、こうやって遊んでても死ぬことはないんだから、やっぱラクっちゃラクなんだろうな。あー、久しぶりに働いたから、あつつい」

いけしやあしやあとそう言い放った漆原は、覇気のない様子で立ち上がると冷蔵庫から麦茶ポットを取り出す。

「あ」

だが、ポットの中を見て、顔を皺める。

残っているのはちょうどグラス一杯分あるか無いかだ。

魔王城にいくつもある暗黙のルールとして、最後に飲み切った者が次の麦茶を作る、というものがある。

別に暗黙のルール以前に、共同生活をする以上当たり前のことなのだが、漆原くらいになるとそのわずかな手間すら面倒くさい。

だが一口分だけ残して置いておくとはそれはそれで、

「たったこれだけ残すなら何故新しいのを入れておかない！」

と真奥や芦屋が五月蝍いのだ。

しかし部屋は暑いし喉は乾く。

漆原は冷蔵庫からの冷気で顔を冷やし、やがて冷蔵庫が温度上昇した庫内を冷やすべく悲鳴を上げはじめると、新しい麦茶を淹れる面倒くささと、喉の渴きを癒すか否かの全く無意味

かつ非効率なブライオリティ策定会議を心の中で繰り広げそして、

「仕方ない、淹れるか」

漆原は結論を出した。

この悩む間に無駄になった時間や、冷蔵庫が食った電気代のことを考えると漆原の行動は全く裏められたことではない。

だがここまで芹屋に家事を教わってわずかでも彼の仕事に敬意を抱いたこともあって、漆原の中では「家庭に貢献する方向に進んだ自分偉い」くらいの思いが渦巻いている。

若干飲みが強くなった麦茶を一気飲みして、冷やされた故に走ったこめかみの痛みにしばし瞑目。

空になったポットを一旦シンクに置き、先に戸棚の中にある、水出しパック麦茶を探そうとした、そのときだった。

「わっ！」

戸棚を開けた途端に、黒い影が視界の隅をさっと走り抜けたのだ。

「び、びっくりした！」

漆原は立ち上がって身構える。

同時に「それ」も漆原に気づいたのか、不敵にも部屋のと真真中で停止し、その特徴的な触角をゆらゆら揺らしながら漆原に向き直るではないか。

「うわーなんか意外。あれだけ芹屋が掃除してるのに、こんなの出るんだ」

漆原は「それ」を油断なく睨みつけながらもどうするべきか対策を考える。

彼にとって「それ」は特別恐れるべき存在ではない。

漆原の目の前で不敵な姿を見ているのは学名ペリプラネータ・フリッジノースと呼ばれる、黒い種である。

茶色くて小型の学名プラテッラ・ゲルマニカは建造物に生息するケースが多いが、ペリプラネータ・フリッジノースは野外活動性が高く、建造物内で発見する場合も外部から侵入したものであることが多い。

ペリプラネータ・フリッジノースもプラテッラ・ゲルマニカも日本の日常生活に於いて目にしたくはないのに目にする事が多い種ではあるが、実はいずれも外来種である。

この種の昆虫に対する感想は世界中で様々だが、アメリカと日本では、嫌われている虫としてはぶつちぎり第一位に君臨するのではないだろうか。

家庭内害虫と呼ばれていることは知っているし、目撃するのも初めてではないが、魔王城内でというのは初めての経験だ。

ただ、悪魔である漆原にとっては取り立てて恐れるべき相手でもない。

「退治しておいた方がいいのかな。病氣運ぶってのは実はないらしいけど、こいつが歩いたりした食べ物食べたくないし、何かの拍子に触ったら気分悪いし、窓開けてれば逃げる気もす

るけど、変なところ隠れると面倒だし。えっと、殺虫剤どこで見たんだったかなあ……あ」
 漆原は決して物が多くない室内をきょろきょろと見回して、部屋の隅のカラーボックスの中に、洗剤の買い置きなどと一箱にジェットタイプの殺虫剤が鎮座しているのを見える。
 「あつたあつた」

漆原は油断なくペリプラネータ・フリッジノーサを睨みながら場所を移動しようとした。
 「……ってちよっ!?」

ところが、ペリプラネータ・フリッジノーサの動きは漆原の想像を遥かに超えていた。
 なんと漆原より早く殺虫剤に先回りして、あろうことか殺虫剤の缶の裏に隠れたのである。

「こ、こいつっ!」

漆原は敵の策略に歯がみした。

生命力が強く、実は知能も高いらしい虫だということは知っていたが、まさかこんな捨て身の策略に出るとは思わなかった。

緑色の缶の裏からちろちろと漆原をおちよくるように触覚が動いている。

ペリプラネータ・フリッジノーサを倒すには、今ペリプラネータ・フリッジノーサがしがみついている缶が不可欠だが、缶を手取るにはペリプラネータ・フリッジノーサを排除しなければならぬ。だが、ペリプラネータ・フリッジノーサを排除したところでその缶に素手で触りたくはないし、かといっていちいちそれをウェットティッシュなどで拭いている間にペリプ

ラネータ・フリッジノーサがどこかに隠れてしまう恐れもある。

ペリプラネータ・フリッジノーサが、目を離している間にどこかに行ってしまったのは、外に逃げたのかどこかに隠れたのか分からず、その後もずっとペリプラネータ・フリッジノーサが室内にいないのではないかと緊張と共に過さねばならなくなる。

「図書館に寄るのはいいけど、こういうときのためにたまには新聞買っておけよな……」

漆原は、この場にはいない芦屋に文句を言う。

ペリプラネータ・フリッジノーサやブラテッラ・ゲルマニカが現れたとき、殺虫剤と並んで強力な武器となり得るのは、新聞紙（特に夕刊は平たく畳むと叩きやすい強度としなやかさを実現できる）や薄手の雑誌だろう。

だが、そのいずれもが、今の魔王城には存在しない。

新聞は最初から取っていないし、雑誌は真実がたまに読んでいる分厚い漫画雑誌しかなく、ペリプラネータ・フリッジノーサと戦うのには重すぎ厚すぎで適さない。

「くそ、じり貧だな」

漆原は額に汗を拭いながらペリプラネータ・フリッジノーサの触角を睨み続ける。

「そうだ! 確かあいつは……!」

ふと漆原は、以前芦屋が話していたことを思い出す。

界面活性剤入りの溶剤、即ち食器用洗剤やシャンプー、ボディーソープなどの液体石鹸を使

えば、ペリブラネータ・フリッジノーサやブラテッラ・ゲルマニカを撃退できる。

「でもちよつと待つて。そのあとどうすんの」

漆原は冷静に考える。

ペリブラネータ・フリッジノーサは、とにかく素早い。

しかし一瞬キツチンに視線を走らせた漆原は、ボトルに残っている洗剤の量が四分の一以下であることを確認する。

残りの弾は少なく、液体洗剤の初速を考えれば命中率は絶望的に低く、かつミスショットをした場合の後始末を考えると、洗剤を使うのは得策ではないと思えてくる。

だが、時は漆原に猶予を与えなかった。

「わ！ あ、雨だ！」

先程まで腹立たしいほどの陽光を地面に投げかけていた空が一転俄かに掻き曇り、大粒の雨を降らせはじけたのだ。

「畜生こんな時に!!」

洗濯物を雨に濡らしては、芦屋の逆鱗に触れること必至である。

「くっそお！ そこにいろよ！」

ゲリラ豪雨というべきとんでもない雨粒は、漆原がペリブラネータ・フリッジノーサから目を離すか悩んだほんのわずかな間にも、折角干した洗濯物を次々濡らしはじめる。

「うぬぬぬぬぬぬ！」

漆原はとにかくまずは洗濯物を救助すべく、窓にとびつく。

遠くから雷鳴まで聞こえてくるほどの豪雨は容赦なく室内にも入り込み、結局一部の洗濯物は漆原の目にももう一度洗濯機にかけねばならないと判断できる程に濡れてしまった。

「畜生……」

全ての洗濯物を取り込み、窓を叩きつけるように閉めた漆原だったが、ふとカラーボックスの殺虫剤に目をやる。

「くそっ！ こつちもか!!」

予想できたことではあったが、ボックスの奥に入ったか、それともどこか別の場所に隠れたかは分からないが、ペリブラネータ・フリッジノーサの姿は影も形も無かった。

床に散らばした洗濯物を放置して、ゆつくりとカラーボックスに近づくと、

ウェットティッシュを下の段から取り出し、殺虫剤のスプレー缶を拭いながら手に取り周囲を探るが、ペリブラネータ・フリッジノーサの気配は完全に消えていた。

「あーあ、もう」

漆原はげんなりしながら、次にペリブラネータ・フリッジノーサがどこから飛び出してきてもいいようにハーフパンツのポケットに殺虫剤を無理やりねじ込む。

そして洗濯物を拾い上げながら、

「こちのデニムは大丈夫、ハンカチも許容範囲。このタオル二枚と真奥のシャツはダメだな。いきなり降ってくるんだもんなあ」

漆原は雷が轟かすといった勢いで窓を叩きつける雨を見て、溜息をつく。

「洗い直しか。数少なくても洗えるのが二層式のメリットって声屋言ってたし、いいか」

漆原はベリブラネータ・フリッジノーサに警戒しつつも、廊下に出てタオルとジーパンを洗濯機に放り込む。

「ええと、まず水道を開いて……タオルはこの目の細かいネットに入れて、粉石鹼はさっきの感じだとこれくらいかな。洗濯槽を回すのはこちのつまみ……あ、そうか蓋閉めなきや動かないんだっけ。ええと、洗い直してから時間設定はそんなに長くは……ん？」

漆原は粉石鹼の箱を手を持ったまま、洗濯槽を回すつまみに目をやって、
「うわわわわわっ!!」

つまみのすぐ上に張りついていた、ベリブラネータ・フリッジノーサに気づいて大声を上げるが、そこは腐っても元悪魔大元帥。今度は遅れを取ったりはしない。

漆原は手に持っていた粉石鹼の箱を放り出し、すぐさまポケットにねじ込んだ殺虫剤を取り出して、ベリブラネータ・フリッジノーサ目がけて噴射した。

だがそこはやはり大型のベリブラネータ・フリッジノーサ。吹きかけられると同時に身の危険を感じたのか、それまでの数倍の速度で動きはじめると、キッチン窓の隙間から部屋の中

に入っていくてしまう。

「くそっ!! あ、洗濯槽の上蓋閉めなきや!!」

漆原は、手放した粉石鹼の行方も確かめぬまま洗濯槽の蓋を閉め、流しっぱなしによる水漏れは耳にタコができるほど注意されていたので水道の蛇口だけは閉めて、かつ洗濯槽が回ったのを確認して、

「よし! 待てろよこの野郎!!」

ベリブラネータ・フリッジノーサとの第二ラウンドへと突入する。

「し、しまった!」

だが、すぐに漆原は、自分の詰め甘さに歯噛みすることになる。

部屋の中には、漆原が慌てて取り込んだ洗濯物が散らばっていたのだ。

確かにベリブラネータ・フリッジノーサは窓から室内に侵入したが、これではどこに隠れてしまったかまるで分からないではないか。

家具と壁の隙間などに隠れている場合はそこに殺虫剤を噴霧すれば良いが、まさか取り込んだばかりの洗濯物に向けて殺虫剤を浴びせるわけにもいかない。

そんなことをすれば全ての洗濯物が最初からやり直しになり、また声屋に水道代や洗剤の消費などのことでねちねちと嫌味を言われるのは目に見えている。

「……いこっ!」

漆原は、とりあえず一番手近なところに放ってあったシャツを手に取り、その裏表を確認する。

シャツと畳の間にペリプラネータ・フリッジノースの姿は無く、もちろんシャツそのものにペリプラネータ・フリッジノースが張りついているなどということもなかった。

「次っ！」

漆原はシャツを安全圏に放ると、次のハンドタオルにかかる。

「次っ」

そうやってトランプの神経衰弱でもやるように洗濯物を拾っては軽く振るって後ろに投げ、また拾っては振るって後ろに投げを繰り返していたところ、

「……いたっ！」

漆原は、一枚のタオルの下から見えるペリプラネータ・フリッジノースの長い触角を発見する。

だが、いきなり襲いかかるようなことはしない。

その周りの安全な洗濯物を一枚一枚丁寧に避けて後ろに投げ、ペリプラネータ・フリッジノースが隠れているタオル一枚だけの状態になるまでそれを繰り返す。

そして、ペリプラネータ・フリッジノースがどこに逃げてもいように周囲のスペースを広くとり、そのタオル一枚だけは犠牲も致し方ないと諦め、漆原は、

「死ねえっ!!」

ジェット噴射が売りの殺虫剤を全力でペリプラネータ・フリッジノースに向けて噴射した。狙い違わず、殺虫剤のジェットはペリプラネータ・フリッジノースに直撃する。

だが、

「う、うわっ!?」

漆原は、敵の強さを見誤った。

洗濯機のところでの初撃と合わせ、漆原のジェット噴射の直撃は、確かにペリプラネータ・フリッジノースにダメージを及ぼした。

だが、ペリプラネータ・フリッジノースはそれでも死ななかったのである。

ペリプラネータ・フリッジノース独特の生理的嫌悪感を催すパニックの挙動を見せた上に、あろうことか漆原目がけてもの凄く速さで突撃してくるではないか！

「こ、このっ!?」

もはや足元にまで迫ったペリプラネータ・フリッジノース目がけて漆原はさらに殺虫剤を追撃噴射するが、動く相手に向かってのジェット噴射は濃度が薄くなったせいか、初撃、二撃目はどのダメージが入らない。

ペリプラネータ・フリッジノースは速度を落とさずそのまま漆原の股の間を抜け、折角後ろに避けた洗濯物の山に向けて走り込もうとする。

「させるかっ！」

だが漆原も、ペリブラネータ・フリッジノースに股抜きされた程度でひるむ男ではない。すぐさま体を翻し、洗濯物の山に辿り着かんとするペリブラネータ・フリッジノースの尻目にかけて今度こそ文句なしのジャストミートジェット噴射を浴びせることに成功する。

その場で七転八倒しはじめたペリブラネータ・フリッジノースは、起き上がろうとするが苦しいのかひっくり返ったまま足を構々しくもがらせるばかり。

「ふ、ふふふ、下等生物の分際で、僕に勝とうなんて千年早いよ……」

漆原はようやく一息つくとき、苧屋が揚げ物をする際に油はね避けに使うために取っかけてあるボスティングされたチラシをキッチンから持ってきて、何枚も重ね、そして、

「てこずらせやがって……死ね!!」

チラシ越しにつまみ上げたペリブラネータ・フリッジノースの息の根を、チラシを丸めることで完全に止める。

「ふう、苧屋が帰ってくる前に仕留められて良かった」

漆原は時計を見て、ほっと胸をなで下ろす。

丸めたチラシを燃えるゴミのゴミ箱に放り込むと、

「ちよっと皺になったかみだけ……まあ、教わった通りにきちんと畳めば大丈夫か」

雨で窓を開け切っているため室内に殺虫剤の臭いが充滿しているが、後で事情を説明すれば

怒られることはないだろう。

「ええっと、短い靴下はちゃんと踵を潰して二つ纏めて……あ、そうだ、さっきの洗い直し、脱水しなきゃ……ん？」

顔を上げて立ち上がろうとして、共用廊下に面した窓に、二つの恐ろしい影を認めて血の気が引く。

一つは、窓の外。

何やらふわふわした得体の知れない雲のような影が窓の外に映っている。

一つは、窓の内側。

先ほどの「敵」よりもずっと小さいがしかし、その油光りする茶色の平たい体、そして禍々しい触角は間違いなく、ブラテツラ・ゲルマニカそのものである。

「あ、あれ、まさか……」

ブラテツラ・ゲルマニカはいい。外の方が、問題は深刻だ。

そういうえびさき、洗濯機のところまでペリブラネータ・フリッジノースを見つけたとき、片手に持っていた粉石鹸の箱を、自分は、どこに置いただろう。

なおも膨らみ続ける外のふわふわの正体に半ば気づきながらも、新たな闯入者であるブラテツラ・ゲルマニカも、放置するわけにはいかな。

ブラテツラ・ゲルマニカはペリブラネータ・フリッジノースよりもずっと屋内に定着してし

もう確率が高いのだ。
勝利しても敗北しても、絶望しか待っていない漆原の孤独な第二戦が、開幕しようとしていた。

「う・る・し・は・ら——!!!」

もう当然と言えば当然なのだが、雨もとくにやんだ夕刻に帰宅した芦屋は、自分の怒りだけで魔力を精製するのではないかと思うほどに怒り狂った。

その怒りは、様子を見に来た鈴乃が芦屋の一言で素直に引き下がって帰ってしまうほどに強烈なものだった。

帰宅してみれば洗濯物は丸ごと全部皺だらけ、部屋中に殺虫剤の臭いが充満し、廊下の洗濯機からは、漆原が洗濯槽に放り出してしまった粉石鹼が絶え間なく泡を吹き、人が通るのもままならない有様なのだからそれも当然だろう。

「だ、だから言ったろ！ 仕方なかったんだよ!! いきなり出てきて僕も戦うのに必死だったから!」

「問答無用だ! 貴様それでも悪魔大元帥か! あのような虫けら相手にここまで戦場を荒らすなど……!!!」

「僕だってやりたくてやったんじゃないって!! ゲリラ豪雨が降ったりとか色々不幸が重なったんだよ! 第一、今まで一度に二匹も出るなんてことなかったじゃないか! 何か悪くなつた食材とかどっかに潜んでんじゃないの!」

「この私の完璧な献立計画に食べ物悪くするような事態が発生してたまるか! 貴様の飲み残しのペットボトルや菓子のカスなどに引かれてきたのではないのか!」

「昨日掃除したって言ったのは芦屋だろ!! じゃあきつと、ベルの方で何か腐らせてたかしたんだよ! あのおどんって生だろ! この季節だから悪くなつてたんだって!」

「他人に責任転嫁するな!」

「他人つか敵だろ!」

「……貴様に家事を任せたらどういうことになるのか、よく分かった」

「な、なんだよ! 今日ほたまたまだろ!! 僕だって教わった今日の今日でこんなこと不本意だ!!」

「家に漆原を抱えたまま、私が定期的に働きに出るなど、不可能だったのだ……」
「僕のこと不具憤懣に言うのやめてくれないかな!!」

ベリブラネータ・フリッジノースとプラテッラ・ゲルマニカのせいで、自分の評価がこれま
で以上に下がりそうな気配を感じた漆原は必死に食い下がるが、芦屋はただただ悲嘆に暮れ
ばかり。

と、そのときだった。

「あ、あのー……」

「んあつ？ 佐々木千穂？」

鈴乃が帰ってから聞きつばなした玄關から、恐る恐る顔を覗かせた者がいた。千穂だ。

「こ、こんにちは……あの、またおすそ分けに来たんですけど、漆原さん何したんですか？」

「なんで僕の不祥事だつて最初から決め打ちなの!!」

事実漆原の不祥事ではあるのだが、それでも千穂が最初からそう決めてかかったことに、漆原は若干傷ついたような顔をした。

「……折角お越しいただいたのに申し訳ありません、佐々木さん」

「あ、はい……」

その漆原以上に悲しげな様子ようすの芦屋が、悲憤ひふんという単語を絵に描いたような面持ちおももちで千穂を見た。

「今日はちよつと取り込んでおりまして、また日を改めていただけると」

「で、ですよね。あの、これ煮物なんで、チンして食べてください、そ、それじゃ……」

千穂もひきつった笑顔で芦屋に会釈してから、早々に帰ろうとしたその瞬間だった。

「うわああああああああああああああああああああああああああああああ!!!!」

「きやつ!?」

二〇二号室の鈴乃の部屋から響いた鈴乃らしくもない恐怖の悲鳴がアパートを揺らし、千穂は身を竦ませ、芦屋と漆原も一瞬身を竦ませながらも、すぐに何事かと廊下に飛び出した。

そして、その芦屋や漆原よりもずっと凄すごい勢いで、顔面蒼白そうぱくの鈴乃が、自室から飛び出してきて、

「ぐあつ!!」

勢いのまま廊下の反対側の壁にぶつかり、その場に崩れ落ちてしまう。

「す、鈴乃さん!?」

最初の驚きから立ち直った千穂は、廊下を埋める泡を避けながら、へたり込んでいる鈴乃に慌てて駆け寄った。

「どうしたんですか鈴乃さん! 大丈夫ですか!?」

「ち、ち、ち、ち、ち、の……あ、ああああ」

「何があったんですか!? 大丈夫ですか!?」

熱中症で倒れた翌々日のことでもあるので、また鈴乃が体調を崩したのかと心配になる千穂だったが、鈴乃は恐怖の眼差しでなぜか自分の手の甲を凝視しながら、

「て、て、手の上を……歩……ん、ん、ん……」

それだけ言って、卒倒してしまった。

「へ?」

そして、鈴乃の言うことを一瞬理解できなかった千穂の足元を、

「え」

ブラテツラ・ゲルマニカが威風堂々と横切った。

「ごきごき、ごきぶりがいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！」

千穂の悲鳴がアパート全体を揺らし、それを合図に、芦屋と漆原の、数時間に及ぶ死闘の幕が開く。

「なんだよこれは!? 一体何があったんだよ!?」

日が暮れて、早上がりのシフトで帰宅した真奥は、魔王城で身を寄せ合って怯えきった様子が千穂と鈴乃、そして殺虫剤と束ねたチラシを持ったまま、泡だらけの廊下で姿の見えないブラテツラ・ゲルマニカ相手に数時間に及ぶ死闘を演じた末に疲労困憊で倒れた芦屋と漆原を見て、ただただ目を丸くするしかなかったのだった。

勇者、友の気持ちを喜ぶ
- 千穂の場合 -

千穂は、居間のソファに座りながら、厳しく説教されていた。

「千穂、私はあなたをそんな子に育てた覚えはないわよ」

「だって……」

千穂は傍らで肩間に鞭を寄せながら自分を見下ろす母、里穂の顔をちらりと見上げる。

「真奥さんのお宅からの帰りが遅いから何があったのかと思つたら……」

母は呆れた様子で溜息をつく。

時間は夜の八時。アルバイトがある日ならばむしろ帰宅は早い時間ではあるのだが、当然母が怒っているのはそんな話ではない。

「でも、やっぱり私が甘やかしすぎたのがいけないのかしらね。今後もう、二度と甘い顔はしませんからね」

「お、お母さん！ でもっ!!」

「黙りなさい千穂。お母さん情けないわ、まさか自分の娘がこんな……」

母は呆れたように首を横に振り、そして厳しい声色で娘を叱りつけた。

「ゴキブリと戦えないような軟弱者だったなんて!」

「普通戦えないよっ!!」

ここで初めて千穂は反撃した。

「どうしたって苦手なものは苦手なの! 私女の子なんだよ!!」

「お母さん、都合のいいときだけ女の子持ち出す女嫌いの」

「都合の問題じゃないよ! 男の人だって苦手な人は苦手でしょ!!」

「黙りなさい、ゴキブリと一人で戦えないような女が一人前になれると思うの!?」

「お母さんの一人前の基準が分からない!」

当然、と言うべきなのかどうかは分からないが、里穂は、千穂が真奥の家から帰宅する時間が遅いことを怒っているのではない。

その理由が、ヴィラ・ローザ笹塚の廊下に現れたゴキブリが怖くてアパートから出られなかったためだということについて、怒っているのである。

「いいこと千穂。あなたが将来もし、真奥さんと結婚したとするでしょ?」

「ちよちよちよちよちよちよとお母さん!?!?」

「例え話なんだから聞きなさい」

例え話としても、話がすつ飛びすぎである。

「あなたが主婦になったとして、真奥さんが働きに出ている間、もし家にゴキブリが出たらどうするつもり? 真奥さんを職場からわざわざ呼び出すの? それとも真奥さんが帰ってくるまで家から逃げ出すの?」

「あの、その……」

「二人でいる間なら、まだいいわ。将来子供ができてみなさい」

「お母さんつつ!!!」

「それにそうだったら、今度はあなたが子供を守るために戦わなきゃいけないのよ!」

「話が飛躍しすぎて何が問題なのかもう分からないよ!」

「とにかく、この家も少し古くなってるから、水回りなんかの時々出るのよ。私も極力家回りを綺麗にはするけど、もし今度ゴキブリが出たら、あなたにも協力してもらいますからね!」

「そ、そんなあ……」

異世界の悪魔の王や悪魔大元帥を目の前にしても平常心を失わなかった千穂が、出るかどうか分からないゴキブリに怯えた顔をする。

「情けない声を出すんじゃないやありません! 殺虫剤と丸めた夕刊があれば、あなたも今日から立派な戦士よ!」

「戦士になんてなりたくない!」

「千穂、あなた自分の立場分かっている?」

「……何が」

「千穂が強情に拒絶するのを見た里穂は、片眉を上げて小馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

「真奥さんは、虫見てきやーきやー言うような女が好きなの?」

「え」

里穂の言葉に、千穂は息を呑んだ。

「飲食業に従事する人間がゴキブリ怖いとか致命的よ。どんな清潔なキッチンにも害虫は入ってくるし、業務用のゴミ捨て場なんてゴキブリの恰好の住処よ。真奥さんくらのベテランアルバイトや店長さんは、きっとあなたが帰った後にそういうのに対応してるわよ」

「……」

「あなたの話聞いても真奥さんは芯の強い男の人みたいだけど、最初のうちはゴキブリ怖がるあなたを、守りがいのある子くらいに思ってくれるかもしれないわね。でも、付き合いが長くなってそれを結婚すれば、そんなのは単なる生活能力の欠如よ」

「……うう」

母の言うことに呑まれかけ、千穂は俯いてうめく。

「それに、最近のあなたの話聞いてると、どうも強敵が多そうな気配じゃないの」

「へ?」

「遊佐さんに、鎌月さん、だっけ? 綺麗でしっかりした人達なんですよ? 一人暮らしも長いんだろし、ゴキブリくらい平気の平左なんじゃないの?」

「うーん……」

鈴乃は千穂と一緒にゴキブリを怖がっていたが、後から話を聞くと、手の上を歩かれた嫌悪感が先に立ったというこらし。

母はエンテ・イスラのことなど知りはないが、それでも恵美や鈴乃の過去を思うと、確か

に彼女達が偶然遭遇したゴキブリから悲鳴を上げて逃げ回る姿は想像しにくい。

「とにかく、今後我が家では、あなたを対家庭内害虫の戦力としてカウントしますからね、覚悟しておきなさい」

「……うー」

拒否を認めない母の強い口調に、千穂はただうめくしかなかった。

「お母さんがあんな話するから……」

千穂はお風呂場の脱衣所の戸を開いても、しばらく踏み込むのを躊躇ってしまった。

水回りになる、という言葉から、つつい洗面台や風呂の戸の隅などに「アレ」がないかどうか警戒してしよう。

「……あ」

隙間を気にしていたおかげで、洗面台と洗濯機の隙間に入っている体重計が目に入った。

「そういえば……最近測ってなかった」

古いアナログの体重計を引き出して、服を脱ぐと千穂は恐る恐る体重計に乗る。

最近アルバイトでファーストフードを食べたり、魔王城にカロリー高めものを差し入れたり、料理のレパートリーを増やすために自分でも色々作っては食べ作っては食べしているの

若千体重が気になりはじめてはいたのだが……。

「あ……れ」

千穂は体重計のメモリを見て、声を上げた。

そこに表示されているのは……。

※

「太ってしまいました……」

翌朝のヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室。

千穂は鈴乃の創作料理だという、うどんのコンフィソースアメリカーナなるものを口いっばいに頬張りながら気落ちしたように言う。

「普通そういうときって、絶食とか断食とかいう流れになるんじゃないの？」

「漆原！ 佐々木さんに失礼なことを言うな！」

漆原の突っ込みを吉屋が窘めるが、千穂は小さく首を横に振る。

「ダイエットしたいのはやまやまですけど、私、食べるの好きなんです」と、身も蓋もない釈明。

「千穂殿の場合、どこが増量したかにもよるが……」

「なんだ？ 鈴乃」

「あ、いや、なんでもない」

真奥に小声の呟きを拾われた鈴乃は慌てて首を横に振る。

「それに、毎日暑いし、部活やバイトもあるのに、食べなくなったら倒れちゃいます。きちんと食べて、その分お仕事や部活のときに意識して動けば、いいかなって思っ」

「漆原、聞いたか」

「芦屋が説教振ってくると思ったらから聞いてないよ」

千穂の、若者の模範中の模範としか言いようのない志の千分の一でも漆原にあればと思わざるを得ない芦屋である。

「それでなんですけど、鈴乃さん」

「うん？」

「鈴乃さんって、昔どんな運動してたんですか？」

「うん？？？」

鈴乃は千穂の質問の意図が分からず首を傾げる。

「鈴乃さん、都庁の屋上から飛び降りてもなんともないじゃないですか」

「ああ」

「あんな大きなハンマーを片手で振り回したり」

「うむ」

「私がどんなに筋トレしても、都庁の屋上から飛び降りたらべしやんこになると思っんですよ」

「べしやんこじゃ済まねえと思うから、実行に移さないでくれよ？」

「真奥さん大丈夫です、分かっていますから」

心配する真奥に、千穂は慌てたように手を振る。

「真奥さん達は悪魔だし、遊佐さんは半分天使だって言ってたからなんともないじゃないことしてもああ、そういうものなのかなって思っちゃうんですけど、でも鈴乃さんは普通の、って言ったら失礼かもしれませんが、人間なんですよね」

「まあ、そうだな」

鈴乃は箸を箸置きに置いて、グラスの水を一口飲んでから頷く。

「でも日本の人間……っていうか世界中のオリンピックのメダリストとか軍人さんとか凄く体を鍛えてる人でも、鈴乃さんみたいなことできないと思っんです。この違いはなんなのかなって」

「まあ、聖法気や法術の有無による差は大きいとは思っが……」

鈴乃は考え込み、

「実際、どうなのだろうな。私と千穂殿の間に、そこまで極端な力の差はあるのだろうか」

「いや、それはあるだろ。お前が持ってきたあのうどん、普通の重さじゃなかったぞ」
話の雲行きが怪しくなってきたのを察した真奥が割って入るが、千穂も鈴乃も意に介さない。

「ちーちゃん。惠美にしろ鈴乃にしろ特殊な訓練受けてる人間だから。エンテ・イスラの人間全部がこいつらと同じバカみてえな力持つてるわけじゃねえから。ちーちゃんが今から訓練してもこうはならないからな？」

「何がバカみたいなんだ、失礼な」

「真奥さん、私も、遊佐さんや鈴乃さんみたいに戦う力が欲しいとかそういうんじゃないんです。ただ……」

「ただ？」

「昨日……ちょっと色々あって……」

「ああ、漆原がなんか迷惑かけたんだってな」

「だからあれは僕だけのせいじゃないって言ってるだろう！」

漆原の抗議をスルーして、千穂は続ける。

「心を鍛えるには、体も強くないといけないと思ったんです」

「……は？」

男性三人は、千穂の修行僧か武道家のような発言に目を丸くする。

「丁度太っちゃったし、折角身近にすごく強いお友達がいるんだから、色々教えてもらって強い心と体と、ついでにダイエツトもできれば一石二鳥かなって思ったんです」

ダイエツトという動機づけは分からないでもないが、それが何故心と体を鍛えることにつな

がるのか、いまいち真奥には分からなかった。

だが、

「……ふむ、心を鍛える、か」

鈴乃の琴線には、何か響くものがあつたのだろうか。

なぜか鈴乃はちらりと真奥を横目に見ながら、大きく頷いて膝を打った。

「分かった。千穂殿の頼みだ。術や戦闘技術というわけにはいらないが、神学校や修道会などで初等科の修行僧が学ぶ、精神修養のための体操を教えよう。ゆつたりした動きに見えてなかなか全身を万遍なく動かす体操だ。それなりにきついぞ」

「はいっ！ お願します！」

「……………」

女子二人の妙に熱い会話を見ながら、真奥と芦屋と漆原はただ無言であつた。

「一体どうしちゃったんだちーちゃん。昨日、本当何があつたんだよ。ゴキブリが出たってだけじゃねえのか」

「そのはずなのですが……」

真奥と芦屋は、アパートの裏庭を窓から見下ろしながら首を傾げる。

裏庭では、一度帰宅してから運動着に着替えてきた千穂と、先日購入した日焼け止めをしつかり塗った鈴乃が、修行僧が学ぶという体操を熱心に繰り返していた。

「この暑いのによくやるよねー」

「漆原、貴様はもう少し、佐々木さんのように心と体を鍛えようとは思わんのか」

「体は今更鍛える必要なんてないし、心もどんな罵詈雑言にも耐える自信があるから別に」

「ちーちゃんはそのう方面に心を鍛えたいんじやねえと思うが……」

漆原の「ものは言いよう」に、真奥は苦笑する。

「昨日は、こちらにもベルの部屋にもゴキブリが現れて、こちらのものは漆原が多大な犠牲の末に退治しましたが、ベルの部屋に現れたものはベルの手の上を歩いた末に素早い身のこなしでなかなか尻尾を掴ませず……」

「うえ、手の上歩かれるとか考えたくねえな」

「あれ、真奥は苦手なの？ ちよつと意外」

「そりや好きにはなれねえだろあんなの」

「魔界にはあんなのお話にならないような魔虫がいっぱいたじやん」

「そういう問題じやねえよ。いる場所だよいる場所。俺だって、あの虫が緑あふれる森の中の草葉の蔭で鈴のような音色で鳴く、夏の間の二週間しか生きられないような儚い虫だったら嫌いにはならねえよ」

「そこまで行くと、もはや別種の生物ですね」

「でもあいつら、大体じめじめした薄汚い所において、異常に生命力強くて、数が半端に多くて、それにやっぱあのわちゃわちゃした動きは生理的に受けつけねえよ」

閉店作業のゴミ捨てで、集積所に行くときよく遭遇するのだ。

日本の動植物についての知識が無かったころはそんな生き物もいるか程度の認識だったが、日本での生活が長くなり、周囲の人間の反応や、接触するタイミングなどの経験の蓄積で、段々と苦手になってしまったのだ。

「えー、じゃあ真奥、実は戦えない感じ？」

「戦えるよ。戦えるけど、その相手が得意な相手とは限らないだろ。例えばワイバーンを扱えても、今アパートの裏庭でいきなり蛇に出くわしたら、多分俺大声上げるぞ」

「それもそうか。蚊とか蠅とか、別に怖くはないけど好きな人はいないみたいなものか」

「そういうことだな。ちーちゃん割となんでもできて弱点とかなさそうに思えたから、ゴキブリが苦手なのはある意味予想外というか……まあ高校生だから閉店時間までいることないし、マグロナルドの店内で見ることで減多にないからな」

「減多に、ということは、あの木崎店長が管理する店舗でも、現れることがあるのですか」

意外そうに言う声屋に、真奥は神妙に頷く。

「木崎さん曰く、どんな高層ビルのキッチンでも、完全にシャットアウトするのは難しいらしい

いぜ」

「じゃあこのボロボアパートなんかじゃ、絶対無理だね」

「だから日々、私が掃除をしているのだから！　そういえば漆原、貴様またアイスの袋の内側を水ですすがなかったな？　そういう所に、小蠅やゴキブリは引き寄せられるのだぞ！」

「はいはい、ごめんなさい」

「だからそういう心の強度を持つたての……おい芦屋。そうは言っても暑いから、後でちーちゃんに氷入れて麦茶でも持っていつてやれ」

「御意に」

芦屋が恭しく主命を拝し、頭を下げる。

「そこで体側を腰界まで伸ばす、その姿勢のまま、踵を下ろせ」

「の、伸びます、凄く……」

すぐ下から聞こえる鈴乃と千穂のやりとりを聞くともなしに聞きながら、

「ちーちゃんほど、心の芯の強い子もいねえと思うかなあ」

真奥はほんの数日前の、自分に向けられた千穂の心の底からの言葉を思い出す。

「何、どうしたの、真奥」

「ん」

漆原の問いに、真奥は肩を竦めた。

「自分の気持ちを、完全に自分で制御できる奴が、どれくらい世の中にいるのかってふと思つてな」

「僕は何があっても自分がブレない自信はあるよ」

「だからそういう意味じゃねえっての」

真奥の脳裏に、悪魔であろうと、魔王であろうと、全ての真実を知っても尚、自分のことを好きだと言った千穂の笑顔が、幻のように浮かぶ。

※

「それで、結局どうなったの？」

自宅で鈴乃からの電話を受けた恵美は、話の先を促す。

「別にどうもしない。教会騎士の訓練準備のための体操を少し教えてそれで終わりだ。もちろん千穂殿に法術を教えるような真似はしてないぞ」

「まあ、教えたって聖法気がなきやどうにもならないだろうけど……」

鈴乃の声の背後には、雑踏の気配がする。

駅かどこかの公衆電話からかけてきているのだろう。

「エミリア」

「何？」

「今なら、あのときのエミリアの真意が、少し分かる」

「なんの話？」

あのとき、というのがどのときのことを表すのか分からずに尋ね返すと、鈴乃が少し微笑む気配が伝わってきた。

「友を泣かせた事実を目を睨る平和に意味などない、という話だ」

「ああ……」

鈴乃が己の正体を千穂に明かしたその日のこと。

鈴乃は恵美に、魔王討つべしと進言し、千穂の記憶を含めた真奥の痕跡の一切を、日本から消し去ろうとした。

そのとき、魔王を討つべきでないと千穂の味方をしたのが、他ならぬ恵美であった。

「千穂殿が何故、突然心身を鍛えたいと言いつ出したと思う？」

「さあ……千穂ちゃん時々、もの凄く深いことを考えてるから、色々想像はできるけど」

「つい昨日のことだ。アパートにゴキブリが出てな」

「うわ」

「それに怯えてしまったのが、情けなかったそうだ」

「それって、別に当たり前のことだと思ふけど。私だってあれは嫌よ」

「恥ずかしい話だが、私も相当取り乱した。だがな、千穂殿は言ったんだ。力では敵わなくても、私やエミリアに負けない強い心を手に入れたい、虫如きに怯えていては、魔王に幻滅されてしまう」と

「……千穂ちゃんらしいわね」

時々千穂は、恵美や鈴乃を妙に買ひ被って過大評価をしてくれるきらいがある。

だからこそ、自分が鍛えられるところを強くしようと、必死になっているのかもしれない。

「ああ、私もそう思う。だが私が嬉しかったのは、そんなことを朗らかな笑顔で私に話してくれたことだ。一度は千穂殿の心を踏みにじったこの私を、友と呼んでくれたことだ」

「ベル……」

「魔王を異性として思慕していることについては、応援できないのは確かだ。だが私は、あのどこまでも純粋な健気さを、もう無視できそうにない」

「あなたも、大分千穂ちゃんに毒されちゃったわね」

恵美は苦笑する。

「そうだな。私自身不思議なのだが、まるで悪きものが落ちたように、今はそのことが少しも不愉快ではない。千穂殿と共にいる時間が、私の「日常」になりつつある」

「そっか」

恵美は思わず微笑んで、見えない電話の向こうにいる鈴乃に頷いた。

「でも、それはそれで大変よー。どうにもならない悩みを抱え込むことになるからね」

「覚悟の上だ」

鈴乃の言葉と意志に、迷いや偽りは微塵も感じられなかった。

だから恵美は、鈴乃の正体を知り、サリエルの事件がひとまず収束して尚、彼女に言わなかったことを口にした。

「ところでさっきの肉体の強さと聖法気の関係性の話で思い出したんだけど、あなた、日本に長くいるなら聖法気を補充するアテはあるの？」

恵美はソファから立ち上がると、部屋の隅に積まれている段ボールに歩み寄る。

「うん、実はエメ……そう、エメラダ・エトウーヴァが送ってくれた、聖法気補充ドリンクがあるの。もし良かったら今度そっちに行くと共に、おすそ分けするわよ」

恵美は、聖法気補充ドリンク、ホーリーピタンβの小分けの箱を段ボールから取り出しながら、新しい「友」との相談ことを進める。

「あと、携帯電話買う話だけど、もう少しすると新規加入者対象の大幅割引キャンペーンが始まるの。そのとき一緒に買いに行きましょ。うん、はい、はい、それじゃあね」

通話を終わると恵美は、最良のキャラクターであるリラックス熊の表示された待ち受け画面を見ながら、苦笑する。

「悪い気はしないけど、なんだか、不思議な感じね」

もう鈴乃を警戒する必要があるまい。

千穂とも良い関係を築けているようだし、恵美の思い描く理想も分かってくれたようだ。

これで一つ、恵美の懸案事項が完全に解消されたことになる。

だが、千穂も、鈴乃も、真実を追って日本に来なければ、決して出会うことのなかった友なのだと思うと、

「でも、そんな私達の間にいるのが魔王っていうのが、凄く嫌だわ」

折角浮かんだ笑顔が、妙にひねくれたものになってしまふのだった。

勇者、夢を確認する
・恵美の場合・

「とはいえ、運動不足が良くないのは確かよね」

恵美は自宅から駅までのわずかな徒歩の距離を思いながら、呟いた。

エンテ・イスラでの生活を思えば、幼いころは早朝から目覚めて食事を作り、昼は父の畑仕事を手伝っていた。

勇者として旅立つてからはそれを糧食で毎日何万歩歩いたか分からないことを考えると、デスクワークで運動不足などと、贅沢病も甚だしいと思ってしまう。

では一つ運動でもしてみようかと考えると、昨夜の鈴乃との電話で聞いた千穂の疑問が頭をよぎる。

何故、同じ人間であるはずの千穂と鈴乃に、あれほどの肉体的な力の差があるのか。

もっと言えば、聖法氣の力が完全に無くなった場合、自分や鈴乃は、果たして千穂が「超人的」と認識するほどの力を発揮することができるのだろうか。

「……」

永福町駅。ホームに滑り込んでくる電車を見ながら、恵美は手近な吊り革を掴み、掴んだその手をばんやりと見る。

例えどもし、自分の体が魔術などで大きく跳ね飛ばされた場合、恐らく左右どちらかの手で地面を弾いて空中で、一回転して体勢を立て直し、足で着地して再び敵に立ち向かうだろう。この場合、慣性の助けが多少あるにしろ、恵美は片腕だけで、大人の女性一人を空中に跳ね

上げるだけの力を持っていることになる。

エンテ・イスラ北大陸を支配していた悪魔大元帥、アドラメレクと対峙したときは、魔王やアルシエルすら遙かに凌駕する巨大な体軀を誇ったアドラメレクの、電柱ほどもあるような金属製の槍を真正面から受け止めた。

恵美と同じ体格の日本人、例えば梨香がそんなことをすれば、一瞬で全身粉々になっているだろう。

この違いは一体なんなのか。

だが一方で、恵美はこうして無意識に、日本人の標準的な肉體構造に合わせて強度設計されている吊り革を破壊することなく掴むことができる。

「お間もなくン明大前！。明大前エ……ンお乗換えのお客様、お降りになりましたらあ電車より離れてお歩きください……さい」

そんなことをつらつら考えているうちに、乗換駅に到着して、恵美は大勢の通勤客の流れに押されて、京王本線のホームへと歩を進める。

こういったときも、例えばちよつとぼんやりしていると、人の流れに乗り遅れてぶつかられることがあるが、そういったとき、恵美の体は日本の同年代の女性となんら変わりなくよろけしてしまう。

だが思い返してみれば、飛翔中に魔王軍の投石器から放たれた火炎岩が背中を直撃しても、

よろけるどころか飛翔進路にいきさかのブレもなかったように思う。
 エスカレーターの左の列で、同じ方向に進む通勤客の群れをぼんやりと眺めながら、恵美はふと、こんなことを思った。
 「魔王達と一緒に……聖法氣を完全に失ったら、私達、日本の人達と何も変わらないんじゃないかしら？」

※

一度気になってしまうと、なまじ解決の方法が分からない問題だけに、その後もずっと気になってしまう。

だから、

「恵美、この店いまいちだった？」

「え？」

ランチ時、テーブルの向かいに座っていた梨香が心配そうに覗き込んできたことで、ふと我に返った。

「ご、ごめん、ちょっとぼんやりしてた。何？」

「ああいや、このお店、いまいちだったかなって」

「そう？ 美味しいと思うわよ」

手打ち蕎麦が人気だという新しい店に昼食を食べに来た恵美と梨香。

全ての蕎麦メニューに一品小鉢がついてきて、ドリンク込みでランチ限定六百円という、お財布にもカロリーのにもOLに優しいお店なのだが……。

ついてきた一品小鉢というのが、卵豆腐だったのだ。

エンテ・イスラ人と地球人の肉体の「力加減」に悩んでいた恵美は、「箸で豆腐を摘む」という絶妙な力加減が要求される動作に疑問を呈してしまい、卵豆腐を目の前に思考が停止していたらしい。

「う、うんごめん。ちょっと考え事を……」

「ふうん。昨日の夕ご飯と卵豆腐が被った？」

「え？」

「なんか豆腐を見た途端に固まっちゃったように見えたから」

「……」

卵豆腐は、好きである。それは表明しておかねばならない。

だが、普通に食事をする場合、ごく無意識に箸で豆腐を摘むことはできるが、もし妙な意識が働いて手先や箸に聖法氣を行きわたらせてしまった場合、陶器の小鉢を粉砕してしまうのではないかと想像してしまったのだ。

「うーん……ちよつとごめんね」

「ん？」

妙に意識してしまった惠美は、一旦箸をおいて、右手を振った。指の筋を伸ばしたりして、緊張をほぐそうとする。

「どうしたの？ 突き指かなんかしたの？」

「ううん、なんて言つたらいいのかな。ちよつと力加減がバカになっちゃってるのよ」
 我ながら下手くそな言い訳だとは思ふが、他に言いようがないのだから仕方がない。

卵豆腐が直接のきっかけ、というのがなんとも馬鹿馬鹿しい話ではある。

だが惠美は、自分が今まで、如何に聖法氣を無意識に用いていたかをはっきりと自覚した。それは、電車で遅れそうになったときに、力を入れて道を走ることを特別意識することがないように。

重い荷物を持つときに、腕肩腰足を連動させて力を入れることを特別意識することがないように。

卵豆腐を箸で食べるときに、身が崩れないよう力を弱めて抱え取ろうとするように。

そんな日常の「力量の増減」を無意識に行うが如く、惠美は日本で無意識に聖法氣を使つた場面が思つた以上に多かつたことに気づいたのだ。

日本で初めて真奥に出会つたとき、聖法氣を使いたくないがためにナイフを取り出したが、思えば一足飛びに数メートル跳躍したあのときの惠美の体や足には間違ひなく聖法氣が作用していただろう。

そんな強靱な足が、敵だつた（今も敵だが）漆原が空中に放り出した千穂を受け止めようとして、簡単に折れてしまつたこともある。

だがすぐに全力で聖法氣を解放したこと、あつさり足は治り、飛翔の法術を使うまでもなく、純粋な跳躍だけで低層ビルや電柱の上に飛び上がる事ができた。

一体自分の体や意識は、どのような仕組みで「聖法氣を使う場面」と「聖法氣を使わない場面」を区別しているのだろうか。

それを見ると、うっかり箸で小鉢を破壊しそうになるのではないかと恐ろしくて、手がうまう動かなくなってしまうのだ。

「惠美、結構ストレス溜まつてるんじゃない？」

「え？」

すると梨香が、心配そうに惠美の右手を見る。

「ずっとデスクワークで、話の分かる間い合わせばっかりじゃないし、外食も多いし、その上最近の惠美、真奥さんならみでいつも凄く顔してるじゃん」

そう言いながら梨香は、自分の眉間に寄っている皺を指していることに気づきはつとした。

惠美はそれが、自分の眉間に寄っている皺を指していることに気づきはつとした。

「そう……なのかな」

「うん、前よりもイライラしてること多いし……差し出がましいことかもしれないけど、本当
に真奥さん達との関係がストレスにしかないんなら、思い切ってすっぱり縁切っちゃうの
も一つのやり方じゃない？」

恵美も、真奥を思い切ってすっぱり斬ればどんなに楽だろうと、心の中で思う。

「なんかごめんね、変な気使わせちゃって」

「ううん、いいんだけどね」

梨香は苦笑しながらも、それ以上突っ込んではいかず、自分の蕎麦を手練りはじめる。

恵美はもう一度だけ軽く手を振ってから、改めて箸を手に取り小鉢を持つ。

特になんの問題もなく、いつも通り箸を進めることができた。

「あ、そうだ。恵美こんなの、興味あったりする？」

結局美味しく蕎麦を平らげた後、梨香がふと財布の中から取り出したのは、何かのチケット
の束のようだった。

「何？」「高田馬場ビッグケース・ファイターズジム」無料体験チケット……？」

「高田馬場に前からあるジムが、なんか最近リニューアルだかして配ってるらしいのよ。前々
からよく、チラシだけはポストに入ってきてたんだけどさ」

「へえ」

梨香のマンションは高田馬場にあるから、最寄り駅近くの商業施設からそういう案内が来る
こともあるだろう。

「でもどうせ行つたつて長続きしないし、チラシも五百円割引とか微妙なクーポンしかないか
ら無視してたら、真季ちゃんいるじゃん、最近入った子。彼女がこの無料券くれたのよ」

「真季ちゃん……ああ、清水さんのこと？」

清水真季は、最近恵美と梨香の職場に入ってきた大学生アルバイトだ。

恵美も顔を合わせれば挨拶くらいはする間柄だが、まだ一対一の友誼を結んだことはなく、
食事も真季以外に何人かいる状態で何度か一緒に行ったことがあるきりだ。

普段はおっとりとした雰囲気だが、ハードな問い合わせも少なくないこの仕事においても自分
のペースを崩すことのない豪胆な精神を持っており、商品やサービスの理解度も高い。

一度だけ席が隣り合ったことがあったが、初めから難癖をつけるためにかけてきたとしか思
えない三時間に及ぶ恫喝混じりの問い合わせ案件を、全くペースを崩すことも上長に回すこと
もなく乗り切った場面を見たときには、恵美も舌を巻いたものだった。

「うん。最近よくシフト重なって一緒にご飯とか行くこともあったんだけど、そのとき真季
ちゃんからもらったの。彼女、この会員なんだって」

「へえ。清水さんも高田馬場に住んでるの？」

「ううん。家は池袋の方らしいんだけど、聞いたら驚いちゃった、真季ちゃんの大学、早稲
多

なんだって」

「へえ！ 早稲多大学って、確かすごい学校よね？」

日本の大学の名前に詳しくない恵美でも知っている名前が出てきて、軽く驚く。
「いい学校っていうか、実質日本の私立大学のトップクラスじゃない？ ともかく学校帰りとかにこのジムに行ってるらしくて。よくあるじゃん、友達紹介みたいなするとプレゼントがあるとか」

よくあるかどうかは知らないが、よく見ると各チケットには通し番号のようなものが振ってある。

特典欄を見ると、紹介者と一緒にこのチケットを持って無料体験をすると、体脂肪燃焼系スポーツドリンクを紹介者と体験者両方に一本プレゼント。体験者が入会すれば、より脂肪燃焼効果の高いハイクラスのスポーツドリンクワンケースを双方にプレゼントすると書かれていた。
「やっぱり基本はダイエットなのね」

「ん？ 何が？」

「ううん。でもこういうジムのチラシ、うちにも来たりするし、明大前にもスポーツジムあったはずだから、わざわざここまで行くのめね」

恵美自身は利用しようと思ったことはないが、自宅の最寄り駅から一駅先の明大前にもこの手の施設はあったはずだ。

清水真季には悪いが、このためだけに高田馬場まで出る必要性は感じられないし、自分の経路状況を考えてと会員登録する可能性も低いので、断ろうと思ったそのときだった。

「でもここのジム、普通と違うことがあるみたいよ」

「え？」

梨香にチケットを返そうとした恵美の手がピタリと止まる。

「そこに『ファイターズ』って書いてあるじゃない？」

「うん」

店の名前に深い意味もないだろうと読み飛ばしていた文字に、恵美は目を落とす。

「普通のジムと違ってそこって」

と、梨香は蕎麦屋のテーブルの上で、行儀悪く両の拳を握って構えてみた。

「声、出せるらしいよ？」

「……声？」

※

扉を開くなり、空調を効かせて尚、溢れる熱気と気合たっぷりの声を押し寄せてきて、恵美は思わず声を上げた。

「す、凄いわね」

恵美は、スポーツジムという施設をどこか冷めた目で見ていた感があった。

ダイエットをしたいなら食事制限と適度な運動をすればいい。

実際にこういう施設に来る時間や金銭的余裕がある人ならば、そのような時間を取ることもできるだろうに、何故わざわざ余計なお金を使う必要があるのだろうとずっと思っていた。

「ね？ ちょっと違うでしょう？」

恵美の隣に立った女性、恵美と梨香をこのジムに誘った清水真季は、左腕に更衣室のロッカーキーを巻きながら言った。

梨香からジムの話を聞いた翌日である。

残念ながらシフトの都合上、近い内でもどうしても恵美と梨香と真季が同時にシフトに入っていない日というものが無かったため、今日は恵美と真季の二人だけ。梨香は後日また真季が案内することになっていた。

「この人達、全員スポーツ選手とかじゃないのよね？」

「前に一度、引退した元野球選手見たことありますよ。テレビとかで見るともうおじさんだなーって思っていましたけど、運動してる姿見ると体つきとかやっぱりプロなんだなあって」

「へえ」

恵美は改めて、フロア全体を見渡す。

そこには老若男女、ありとあらゆる世代の人間が、大いに氣勢を上げてトレーニングに励んでいた。

「声の出せるフアイターズジム」という売りだけあって、フロア全体が暑苦しくも気合いの入った大声で満たされていて、隣に立つ真季と話すだけでもかなり大声を出さなければならぬ。多くのジムと同じように、ランニングマシンやエアロバイク、ロデオマシンに始まり全身各所の筋肉を効率良く鍛えられるよう設計されたマシンが所狭しと並んでいるが、やはり一番特徴的なのは少し奥まった場所にある、「ボクシングフロア」としか言いようのないスペースだろう。

「あそこって、誰でも使えるの？」

恵美がその場所を指差すと、真季は目を輝かせて大きく頷いた。

「すっごく楽しいですよ！ あそこのインストラクターの人に言って、拳を傷めないパンチを打つ講習を受けた後なら、誰でも使えます」

そこにあるのは、サンドバッグとボクシングリング、そして天井からぶら下がる二本のロープである。

「見た目より結構難しいですけど、うまい具合にサンドバッグを殴れたら、ちょー気持ちいいですよ！ 遠慮なしに何か殴るって、日常生活じゃまずあり得ないですからね！ 私、マイグロップ持ってるんです！」

「そ、そうなの」

恵美は最初真季のことを、おっとりした大学生だと思っていたが、やはり認識を改める必要がありそうだ。

よくよく見ると真季の体は、細身ではあるもののかなり引き締まっており、過去なんらかの運動をやっていたことが分かる肉付きをしていた。

今の仕事場に馴染めるだけの肉体的、精神的修練はとっくの昔に積まれていたのだろう。

「でも本当、付き合ってくれてありがとうございます。なかなか一緒に来ってくれる人がいないって」

確かにこの空気は「ちょっと運動でも」という程度では尻込みしてしまうかもしれない。梨香や真季や、そもそもジム自体が「声を出せる」ことをこれほど強調するくらいなのだから日本のジムで声を出せるというのは珍しいことなのだろう。

エンテ・イスラの騎士団の練兵場くらいしか知らない恵美にとっては逆にそのことの方が不思議だが、公共の場で静音を保つマナーが浸透している日本では、訓練のない者が、いかにも「がつつりトレーニングしてやる!」という空気に馴染むのはなかなか難しいだろう。

「ううん、私も最近、運動はしなくちゃって思ってたし、それに……」

恵美はそんなことを思い出しながら、奥のサンドバッグを見て、小さく自分の手を握る。「ここなら、自分の体のことをきちんと理解できそうだから」

「入会したときに肉体年齢とか体脂肪率とか姿勢の良し悪しも測ってくれますし、確か入会しなくてもお金払えばやってくれたと思います」

真季は恵美の言葉を、日本の常識に当てはめて気を使ってくれたようだが、恵美が言うのはもちろん、自分の体に超人的な能力を付与している聖法氣についての理解を深めるという意味である。

「まあ入会するかどうかはさておき、折角お誘いいただいたんだから、今日は楽しませてもらうわ」

「はい! じゃあまずあそこのマットの上で、準備運動して、軽く有酸素運動してから、一通り機械の使い方、説明しますね、先輩!」

元氣よくそう言いながら気合を入れる真季の背中を、恵美は覗きしながら見た。今、とても耳慣れない呼ばれ方をされた気がする。

「……先輩?」

備えつけのディスプレイに、肉体の代謝を高める高性能準備運動の映像が流れるマットフロアで、恵美と真季はそれぞれ思い思いのやり方で準備運動を行っていたのだが、

「先輩の準備運動、変わってますね?」

「え、そ、そう?」

真季は途中から恵美の準備運動を興味津々で観察していた。

恵美の知る運動は教会騎士団在籍時に訓練前に行ったものであり、鈴乃が千穂に教えていた修道僧用の精神修養を兼ねた動きが多く取り入れられたものである。

「先輩、武道とかダンスとか、やってたりしたんですか? なんか、そんな感じの動きな気がして」

「え、ええと」

恵美は一瞬たじろぐ。

日本で暮らしはじめて今日この瞬間まで、人前で運動するということがなかった恵美。

ごく自然にかつて行っていたトレーニングをそのまま実行してしまったのだが、考えてみれば日本には日本のスタンダードな準備運動があるのである。

「そ、その、海外にいたとき、近所のミッション系の学校で昔修道士がやってたっていう運動を教わって、それで」

「やっぱり先輩、帰国子女なんですわね! 先輩英語べらっぺらですもんね! いいなあ、やっぱり話せなさや、それこそお話にならないですよわね」

「う、うん、でも清水さんも、外国語案件とかやってるじゃない」

そこはやはり名門大学に通うだけの頭脳が為せる業か、真季も恵美ほどではないにしろ、外

国語問い合わせ案件を請け負うことがあった。

「先輩には負けます。時々何言ってるのか分からないって反応されますし、先輩みたいに英語以外もパーフェクトとかじゃないです。どんな勉強したのかお聞きしたいと思ってたんですけど、やっぱり帰国子女とかじゃないとそこまでなかなか行かないですよわね」

「う、うん、それよりもさ、清水さん」

「なんです先輩」

長座しながら足裏の筋を伸ばしていた真季が恵美を見上げる。

「その「先輩」って、何?」

「え? 先輩は先輩ですけど……遊佐先輩」

「その。落ち着かないから、普通に名前だけで呼んでもらえると……」

「ええっ!? いいんですか!」

すると真季は、本気で驚いているようで、恵美を見返す。

「鈴木せ、あ、違った、梨香さんからもそう言われてるんです! 先輩とかやめろって」

明らかに今、この場にはない梨香のことを「鈴木先輩」と言いそうになり、慌てて言い直す

真季。

「うん、私も普通に恵美でいいんだけど」

「は、はい……ええっと……ううう」

真季は狼狽（うろた）えたように視線を彷徨（さまよ）わせ、なぜか顔を赤くし、そして、
「ゆ、遊佐さん！」

と、散々迷った末に着地したことが分かるような調子で呼びかけてきた。

「あ、う、うん、じゃあそれで」

「な、ならせんば、あ、遊佐さんも、私なんかをさんづけで呼ばずに、呼び捨てにしてください！」

「えっと、じゃあ、真季ちゃん、でいい？」

「はいっ、ありがとうございます！」

「えーっと……」

何度か話をしたつもりでいたが、まさか真季がここまで体育会系なキャラクターだったとは思わなかった。

「……すいません、良くないってことは分かってるんですけど、どうしても昔のクセが……」

どうやら真季も、恵美の動搖（どうよう）を察したらしい。

心底申し訳なさそうに暗い声で言うので、また恵美は慌ててしまう。

「いいのいいの、別に怒ってるわけじゃないの。しみ……あ、真季ちゃんも、学校で何かスポーツやってたりするの？ 体、鍛えられてる感じするし」

恵美は恵美で、うまく口に馴染まないのだ。

確かに職場に入った順番だけで言えば、恵美の方が真季より先輩ではある。

だが、ここまでの会話を聞いても分かる通り、真季は恵美を、職場の同僚としてというより、純粋に年上として敬（うやまつ）っている傾向が見て取れる。

実年齢で考えれば大学生の真季の方が恵美よりも年上で、恵美の日本の戸籍上の年齢から見ても、同年くらいのはずだ。

「いえ、今は特別何も。ここに通う以外は何もしてないですね」

「そうなの？」

「高2のときに、膝（ひざ）やっちゃったんです。ずっと陸上やってたんですけど」

「膝……」

膝（ひざ）や肘（ひじ）の故障が競技者にとっては選手生命を脅（おび）かすことがあるのは恵美も知っている。

陸上と一口に言っても色々な競技があるので真季が何をやっていたかは知らないが、その膝の故障は競技者の道が断たれるレベルだったのだろう。

「あ、すいません、別に暗い話じゃないんです。中学のときはそれなりでしたけど、高校だとそれほど大したことなくて。元々親に無理やりやらされてたんで陸上がそんなに好きなわけでもなかったし」

「そ、そうなんだ」

「その点、梨香（りか）さんの話はちよっとうらやましかったなあ」

「へ？」
「あ、なんでもないです。せ……逆佐さん。準備運動終わったら、マットの上、そのグイッ
グルで軽く拭いてください」

「あ、うん」

恵美は言われるがまま、自分が準備運動をしていた辺りを軽く拭くと、

「じゃあ、最初に十分くらい歩きましょう。それとも自転車にします？」

「歩きで」

自転車と聞くとどうしても腹立たしい真奥を思い出してしまうので、恵美は即答でランニングマシンに向かう。

そういえば鈴乃が真奥の自転車を壊してしまったと言っていたが、新しいものを買うつもりはあるのだろうか。

「こっちのつまみでスピード、こっちで傾斜を設定するんです。そのバー握ると心拍数とか測ってくれますし、大体の消費カロリーはそっちに出ます」

恵美は益体のないことを考えながら、一方で真季がランニングマシンについて説明するのは真面目に聞く。

真季の指導で恵美はとりあえずマシンのベルトの上に乗ると、傍らに立っている真季に一つ一つ確認しながら操作しはじめる。

「ええっと、これを押せばいいのね……っと」

操作パネル中央のスタートボタンを押すと、足元のベルトがゆっくりと動きはじめた。

「な、何か足元がフワフワするわね。これで、速度アップか……」

つまみの数値を上げると、少しずつ足元のベルトのスピードも上がってゆく。

「ねえ、そういえば、なんで最初にこれか自転車なの？」

「最初に有酸素運動をしてからの方が、いきなりハードなトレーニングするよりもシェイプアップにも筋力アップにもいいらしいです。だから呼吸はしっかりしてください」

「成程、分かったわ」

恵美は素直に頷くと、日頃の歩行速度に合うようにスピードを設定し、呼吸を意識して歩きはじめる。

「歩いてるのに景色が変わらないってのも、変な感じね」

「退屈なら、テレビも見られますよ？」

「て、テレビっ？」

「はい。前の画面、テレビです。そのスイッチで」

「こ、これ？……うわ」

最初にマシンの上に立ってからなんなのだろうとは思っていた、顔の真正面にある黒いパネルがまさか液晶テレビだったとは。

「あ、そうだすいません。遊佐さんイヤホン持ってきてないですよ。これスピーカー無いです。イヤホン無いと……」

なるほど、画面は昼のワイドショーを映しているが、音が全く聞こえない。確かに数十台もあるランニングマシンのテレビ全部から音が聞こえたら、他の場所で運動している人間がまるで集中できないだろう。

とはいえ、訓練は負荷をかける場所に集中してこそ効果が出るものだと思っただけ、別に最初からテレビをつけようとも思っていなかった。

「いいわ。今日は普通に運動に集中するから」

「すいません。言うの忘れてました」

「いいのよ。早くもちょっと楽しくなってきたわ」

申し訳なさそうに手を合わせる真季を宥めて、恵美はテレビを消すとマシン本体の操作パネルをいじりはじめる。

「どうして歩くのにわざわざ機械なんか使う必要があるのかとずっと思ってたけど……これは確かにいいトレーニングになるわね」

恵美は歩行速度を上げながら、少しずつ傾斜をつけはじめた。

「こんな長い坂、現実には存在しないもんね」

ランニングマシンがあれば、やろうと思えば一定の傾斜がついた坂を何時間でも上り続けら

れるのだ。

そのトレーニングがどんなことに役立つかはともかく、運動している気分を得るには十分すぎるだろう。

「ありがと、大体分かった。真季ちゃんも自分のやって」

「はい。私、自転車のところにいるんで何かあったら呼んでくださいわね」

そう言うのと、真季は一旦恵美から離れて、エアロバイクの方へと向かう。

あのバイクもきつと、操作すれば色々な仮想の道を走りながら、色々な負荷を体につけられるだろう。

「さて」

恵美は真季が自分のトレーニングに集中しはじめたのを横目で確認してから、軽く手を握り目を閉じた。

「体内の聖法気量はホーリーリビタンβ一本分。聖剣も出せる状態……よし」

意識を体内に集中し、聖法気量を確認してから、

「軽く走ってみようかな」

恵美はとりあえず、聖法気を意識して封じた場合、走ることとでは体力が消耗するの

を確認することにする。

「……はっ……はっ……はっ」

すると、意外なことに、たった五分走っただけで軽く息が上がってきた。そういえば真季が、心拍数を測れる機能があると言っていたことを思い出し、計測バーを掴んでみる。するとそこには、

「……百……三十三……」

それが平常の心拍数でないことは、恵美にもよく分かった。

「ふうっ」

やがて額に珠の汗が浮かび、呼吸も少しずつ早くなってくる。

体力にはまだまだ余裕はある。

だがTシャツ、ハーフパンツにランニングシューズという軽装で走っているのにここまで体に負荷がかかるとは思ひもなかった。

エンテ・イスラでは、総重量が十キロ以上はある全身鎧を着たまま走っても、よほど激しい戦闘でもなければ息が切れることなどなかったのに。

「じゃ、じゃあこのタイミングで聖法氣を使ったら……」

漆原と戦ったときには全身の負傷を完治させた上に、肉体の能力が飛躍的に向上した。

「き、気をつけないとね」

それこそ飛翔の法術ばりの発動で突然走力が高まって目の前の壁に激突するようなことは避けなければ。

恵美はベルトのスピードを徐々に下げながら停止させ、大きく息を吸う。

「ふう……………」

聖法氣が全身に行きわたり、疲労感が抜けていくのを感じる。そう長い間走ったわけではないが、体力も元に戻っていることだろう。

そう思っただけで恵美は、改めて計測バーを両手で掴むが、

「あ、あれ？」

そこに表示されているのは、走っている間よりも少しだけ高い心拍数百三十五。体感している疲労は抜けているのに、数値がそれを裏切っている。

計測の精密さが低いせいだろうか。いや、このジムの機械はリニューアルオープンというところもあって新しいものばかりのはずだ。

「どういうこと……？」

「どうしたんですか？」

「わっ!?」

いつの間にか真季がすぐそばに立っていて、恵美は小さく飛び上がってしまう。

「ま、真季ちゃん？」

「遊佐さん何かマシ止めたままぼーっとしてるからどうしたのかなって。終わったなら、その備えつけの小さなタオルでパー拭いてくださいね」

「え、あ、うん、わかった」

実感として疲労は回復している。だが数値は、そうは言っていない。この差は一体なんなのだろうか。

恵美はしきりに首をひねりながらも、取りあえず疑問は後回しにして真季の言う通り自分か触れた場所を備えつけのタオルで拭いてから、ランニングマシンを降りた。

「あ、なんかふわふわする」

一瞬、車酔いしたかのように視界が揺れた。

「多分、ずっとランニングマシンに乗ってたからです。遊佐さん、体力あるんですね。ずっと走ってたのに視界が動かないのに慣れちゃってたから、三半規管が混乱してるんですよ。少し休みますか？」

「な、なるほど」

真季の解説に大いに頷いた恵美は、思わずランニングマシンを振り返る。

「うん、大丈夫。時間もつたないし、早速次のやってみたいわ」

「そうですか？ 何やりますか？ どこ鍛えたいとか痩せたいとかで変わりますけど……」

真季は言いながら、フロアを見渡して次のマシンを吟味している。

恵美としては、ボクシングフロアとは反対側にある、ダンベルやウエイトリフティングのための道具が密集しているあたりに行きたいのだが、さすがにそのエリアを利用しているのはいかにもパワーがありそうな筋骨隆々の男性ばかり。

聖法氣を活性化させた際の効果をきちんと調べたいのはやまやまだが、細身の恵美がウエイトリフティングなどやろうと言いつても、真季やインストラクターに止められてしまうだろう。

「じゃあ、最近ちよつと二の腕が気になってるから、その運動できる機械がいいかな」

別に太ったりということはないのだが、適当な言い訳をして真季に機械の選定を任せる。

「二の腕……どっちですか」

「え？ どっちって？ 右か左かってこと？」

「いえ、そうじゃなくて、内側か外側かです。使う機械が違うんですよ」

「あ、そうなの？ じゃあどっちかと言えば、外側かな」

「なら、これです」

恵美の言葉を聞いて、真季は迷わず一つの機械を指差す。

真季はアーム・プレスサーなるネームプレートがついたその機械に恵美を座らせると、身長と体格に合わせて手慣れた様子でシートやバーの位置をセッティングしてゆく。

着座して、肩の高さにある二本のバーを両腕で前に押し上げると、後ろの鉈が持ち上がる仕組みになっているらしい。

「最初は一番軽い鉈で設定しますね」

負荷を増減させるには、機械の後方にある煉瓦レンガのような鍾かねの中央に金属のバーを差し込むことで、重量を調整できるようだ。

「そのつまみは？」

「ああ、これは重さを細かく刻みたいときに使えます。八キロずつくらいで重くなってくんで、これ回して二・五キロ刻みで重さ増やすこともできるんです。じゃあ、横になってるバーをしっかりと握ってください。それで、ゆっくり手を伸ばして鍾を持ち上げて、またゆっくり、鍾がガチャンってならないように手を曲げて元の位置に戻します」

「分かったわ」

一番軽いという鍾の重さを見ると、十五キロと書いてある。これならば、聖法氣せいぼうきを活性化させるまでもない。

「息を吸いながら腕を伸ばして、吐きながら戻してください。無理はしないで、まずは十回くらいからやってみてください」

真季の指示通り、恵美はゆっくりと両手で掴んだバーを体の前に押し出す。

すると機械の後方で鍾が持ち上がり、腕を元に戻すとまた鍾が元の位置に戻った。

「ちょっと軽いわね。もう少し上の重さにするには、これでいいの？」

「大丈夫ですか？ 結構重いですよ？」

恵美は鍾の重量を男性のデフォルト重量からずつと上の、四十キロに設定する。

「多分、大丈夫だと思うわ」

恵美は改めてポジションを取ると、バーを掴んでゆっくり腕を伸ばそうとする。が、

「……？」

きちんと鍾は持ち上げられる。だが、想像していたより、遥かに重い。

まあ、それでもこれくらいは予想の範囲だ。聖剣せいけんを操るより前に用いていた教会騎士団の両手剣の重量は、同じサイズの鉄の塊とほぼ等しい重さだった。

それを振り回すことに比べれば、なんと言うことはない。一回上げて戻し、二回上げて戻しただけでは、そう思っていた。

「つく……」

だが、七回目くらいになった途端に、急激に腕への負荷が高くなったように感じた。明らかに、自分の力が足りていない。

最初の三回目までは余裕だと思っていたのに、急激に重さが増したように感じられる。なんとか十回上げ下ろししてバーから手を離れたものの、力を入れすぎて手先がこくわずかだが、痙攣けいれんしてしまっていた。

真季に言われた呼吸も、明らかに乱してしまっている。

「は、本当に、重いわね……」

「そりやそうですよー！ 牛乳パック四十本って考えてみてください！ 荷物持ったときとか

と違つて訓練なんですから、何度も持ち上げたり下ろしたりするんですよ？」

「そ、そうか……そうよね」

思えば、エメラダから送られてきたホーリービタンβが入った段ボールを、恵美は重いと感じていたのだ。

いかな瓶入りの飲料がぎつしり詰まっていたとはいへ、水を担いでエンテ・イスラ南大陸の砂漠地帯を旅したことを思えば、本来あの程度の重さはなんでもないはずなのだ。

「ごめん、ちよつと調子乗つてたかも。きちんと自分の力に合った重さでやってみるわ」

「そうしてください。ダイエツト中に怪我したら最悪ですからね！」

「……！」

頬を膨らませながらも恵美を心配する顔を見て、恵美はふと思ひ当たることがあった。

「なんですか？」

「……ううん、今気づいたんだけど、真季ちゃん私の友達に、ちよつと似てるなつて思つて」

真季は、どこか千穂に似ているのだ。

邪気がなく、特別使命や苦難を背負っているわけでもなさそうなのに、妙に芯が強く、言葉の端々で常に相手のことを思いやる心が見え隠れしている。

「そうなんですか？」

「真季ちゃん、今どきの若者らしくないと言われたりしない？」

「あー、すつこいよく言われます。ウザいくらいに」

おや、と恵美は眉を上げる。

真季は自分の性格が好きではないのだろうか。別に声を荒げたわけではないが、珍しく出てきた汚い言葉に恵美は意外なものを感じた。

「遊佐さんも言われるタイプじゃありません？ あーいうの、すつこくウザくないですか？」

「そうね、まあそうかもしれないわね」

本当は真季よりも年下なのに、明らかに真季に年上に見られている時点で、自分は日本の同年齢の女性とは大きくかけ離れた性格であることは間違いないだろう。

何よりも、

「勇者らしくないのは、私だつて分かつてるわよ」

「え？」

「ううん、なんでもない。ね、少ししたら、あつちのボクシングフロアの使い方教えて？」

「あ、はい、分かりました。私個人の感想ですけど、きちんと背筋と腹筋の運動してからだと、ピシッとパンチできる感じがするから、次そつち行きましょう」

「ええ、よろしくね」

恵美は軽く汗と、機械のシートを拭くと、嬉々として恵美を先導する真季の後に続いたのだ。

ずっと真季がそばにいたために聖法氣を活性化してのトレーニングはできなかったが、その分恵美は、自分の肉体の純粋な強度をしつかり自覚することができた。

「意外だったな。もうちょつと行けるかと思つてたけど」

恵美は、インストラクターの男性からサンドバッグ利用に際しての注意事項を聞きながら、自分の拳をじつと見つめる。

恵美の聖法氣を用いない状態での筋力は、成人男子平均と変わらぬ錘でトレーニングをするのが限界だった。

筋肉の部位によつてはそれでも少し辛い場合もあった。

考えてみれば、魔力を失った真奥や芦屋や漆原は、日本人の成人男子と全く変わらぬ程度の運動能力しか持っていないではないか。

そう考えると、エンテ・イスラの人間の戦士達も、その力の大半を聖法氣に依存しているのではないかという推測が成り立つ。

日本に聖法氣や魔力を自然回復する手段はなく、エンテ・イスラにはそれがある。

だが、それを自然なものとしてとらえながら、こうして実際に運用するしないで顕現できる能力や力には顕著な差が生まれてしまう。

今の恵美は、ホーリービタンβというドーピング的な手段で聖法氣を補充しているが、これだけの力を人間に与えるこの力が自然に摂取できる環境は、どのようにして生まれたのだろう。

「大体、無意識に使うときとそうでないときの差が、いまいち分からないのよね」

「遊佐さん？」

「あ、ああ、ごめん、なんでもないわ。もう、やっていいのね？」

気がつけばインストラクターの説明は終わっており、恵美は自分に宛てがわれたサンドバッグの前に立っていた。

恵美は、グローブの中で拳を握り込む。

実戦で格闘術を用いていたので、物の殴り方は今更教わらなくても分かっている。

親指は意識してきちんと畳み、四本の指は揃えて、手の甲の第一関節から第二関節がフラットになるように握り込み、そのフラットな部分を「相手」に当てればいい。

恵美は天井からぶら下がったサンドバッグを軽く小突いて感触を確かめてから、

「はあっ!!」

初撃。インストラクターの指示通りに突き出された恵美の拳は、軽快な音を立てて、サンドバッグの真芯をとらえた。

「いいですねー、上手ですよ!」

「遊佐さん凄い!」

インストラクターの男性と、隣にいる真季も褒めてくれる。

恵美としては動かない相手の真志をとらえるなど造作もないことだが、実際問題天井から吊られた鎖にぶら下がっているだけのサンドバッグを拳で捉えるのは、見た目以上に難しい。

拳の握り込みが甘いと力が伝わらないし、殴る場所が軸から少しずれただけで、丸いボディに沿って力が外側に流されてしまう。その場合、拳の握りが甘かったりすると突き指をしたり、拳を傷めたりしてしまう。

サンドバッグを一定の力で的確に連続して殴り続けるには、それなりの訓練と正しい姿勢、そして力が必要だ。

「遊佐さん、格闘技とかやってたんですか!?」

「昔、ちょっとね! せえっ!!」

ズドンと、いい音がしてサンドバッグが揺れる。

恵美は、やはり人目があるため意識して聖法気を封印している。

つまり恵美の今のパンチは、普通のO.Lよりもちょっと力が上なだけの、地球の人間の女性がするのとなら変わらない威力のパンチだ。

聖法気を使わなければ肉体的な強度も大したことはないと分かってしまったことは恵美の心に薄く微妙な不安の影を投げかけたが、それでも全力で何かを殴るといえるのは、とても気持ちのいいことだった。

「せいつ!! はああっ!!」

恵美の拳は、全てサンドバッグの芯を正確に捉え、声と相まってどんどん力が入ってゆく。

「真季ちゃん、これ、楽しいわね!」

「気に入って! もらえて、良かったです! えいつ!!」

恵美に触発されたのか、真季ももの凄いい勢いでサンドバッグを殴りはじめる。

「お二人とも、あと十回打ったら一旦離れてください!」

と、そこにインストラクターの声がかかる。

折角調子が上がってきたところだったが、とりあえず素直に従うと、

「いや、お二人とも凄いですね! 女性でここまで揺らせる方、なかなかいませんよ」

インストラクターの男性が声をかけてきた。

「ちょっとバッグが揺れすぎてるんで、一旦収まるまで待つてください。続けるなら今の内に軽く手首をはぐしておいてくださいね。慣れないうちは、連続して打って手首とか痛めちゃうこともありますから」

「あ、はい、分かりました」

恵美は息を弾ませながら、頷く。

なるほど、見るとサンドバッグがかなりの勢いで揺れていて、足元にもかなり恵美と真季の汗が飛び散っていた。

うっかり汗で足を滑らせてバッグにぶつかりでもしたら、怪我につながるってしるだろう。
 プロのボクサーならともかく、素人が使うなら休憩は当然の措置だった。

「ぶはあっ！ もう、これ私病みつきなんです！」

真季がスポーツドリンクをがぶ飲みしながら、はちきれんばかりの笑顔で言う。

「バイトでひどいクレームに当たったときとか、学校とか家とかで嫌なことがあったときなんか、ここで時間一杯殴っててもあります。もう嫌な奴の顔バキ——っ！ ってブン殴ってと思うと、本当ストレス解消になりますよ！」

「嫌な奴の顔……ね」

その瞬間に思い出した顔は、

「……」

自分でも本当に意外だったが、宿敵たる魔王サタンの顔ではなかった。

「殺すっ！ 絶対いつか殺すっ!!」

「う、うわあ……凄く！」

自分のバッグに抱きついて休憩しながら、真季は隣で恵美が振るう拳を感じ半分、恐れ半分で眺めていた。

プロボクサーのような連打。空手のお手本のような正拳。格闘ゲームのようなブローに、真季だけでなくインストラクターの男性も唖然とするしかない。

「何がっ！ ささやかなっ！ サイズよっ！ このっ！ 変態っ！ ゲスっ!!」

声を出せるジムならではの、周囲の喧騒に隠れた恵美の気合の声は、恐ろしく私怨に満ちていた。

真季は知る由もないが、恵美がサンドバッグに想定した「嫌な奴」は、魔王サタンでも真奥、貞夫でもない。

数日前に散々屈辱的な言葉を浴びせてきて、あまつさえ自分や千穂に狼藉を働こうとした大天使サリエルの顔だった。

「その！ バカみたいないな！ ペイントの痕！ 青タンに！ 変えてやる！ ふんっ!!」

「遊佐さん、普段すごく優しいのに……実は凄くストレスたまってるんだなあ」

隣のサンドバッグにいる真季にだけはなんとなく恵美の声が聞こえてきていて、日頃超然とした凛々しさと、圧倒的言語力でどんな面倒な問い合わせ案件も涼しい顔でこなす憧れの先輩も、実は結構ストレスを抱えているのだと知り、勝手に親近感を覚えてしまう。

「おかげで！ あいつを！ あんなっ！ 呼び方！ しなきゃいけないってえっ!!」

「う、わ!」

その威力に真季は目を見開く。

「このっ！ このおっ!!」

惠美にしてみれば、あれだけ非道に振る舞ったサリエルが、真奥に倒されたとはいえなんの報いも受けず、それどころか新たな生きがいすら見つけてのうのうと日本社会に収まっているだけでも許したいのだ。

とはいえ真正面から戦って負けたことは間違いないし、例え闇討ちしたところで物理的にも社会的にも惠美の方が抹殺されてしまうのは必至だろう。

「もつと……強い、力が、欲しいっ!」

屈辱を晴らすこともできず、宿敵に助けられ、偉そうに錦乃に語った理想を叶える術も持たない自分が歯がゆかった。

「誰にも、負けない、強い、力と、心がっ!!」

サンドバッグ上に浮かんでいたサリエルの顔は、いつしか全く違う顔になっていた。それは、どこまでも弱い、自分自身の顔だった。

「私は……っ」

その瞬間。

グローブに隠れた惠美の拳の内側に、誰の目にも留まらぬ光が灯り、そして、

「弱いつ!!!」

惠美の渾身の右ストレートが放たれ、

「わっ!」

「げっ!」

「……………あ」

サンドバッグを、貫いてしまった。

真季は思わず飛びのいて尻もちをつき、インストラクターは目を刺き、一瞬で冷静になった。惠美の顔から血の気がさつと引く。

気がつけば、拳に聖法気が凝縮。明らかにサンドバッグの強度設計を遙かに上回るパワーの一撃を叩き込んだってしまったのだ。

「え、わ、あ、あの……」

裂けてしまった表面から漏れ出しているのは、細かい布のような切れ端や、整形された小さなスポンジ類。

サンドバッグと言いつつ中身は砂ではなかったのか、などともいいことを思いながら、やらかしてしまっただけに因縁して一体どう対処すればいいか分からず固まっていると、

「あ、あの、大丈夫ですかお客様!」

気がつけば、インストラクターの男性が青い顔をして目の前に立っていた。

「え、あ、あの……」

「う、腕とか手、怪我してませんか!? そ、その、まさか破れるなんて」
インストラクターは慌てながら何度も恵美の顔と腕と貫かれたサンドバッグの間で視線を往復させている。

「あ、あの、すいません、その」

「いえ、その、設備には万全を期していたのですが、あの、申し訳ございません! お怪我はありませんか!?」

「いえあの」

「あのその」

恵美は恵美で新しいジムの設備を自分のミスで壊してしまったと思っているし、インストラクターはインストラクターで、まさかプロの仕様にも耐え得るサンドバッグが如何なセンスのいいパンチだったとはいえ、女性の細腕で壊されるはずなどなく、サンドバッグ自体に欠陥があつてお客が怪我をしないかと戦々恐々としている。

「ゆ、遊佐さん! だ、大丈夫ですか!? と、とりあえず腕抜いて……」

「え、ああ、そうね」

サンドバッグを貫いたまま立ち尽くしていた恵美は、真季にそう指摘されてようやく腕をサンドバッグから引き抜く。

「あ、あの、……何か腕に異常はありませんか!?」

引き抜かれた恵美の腕を恐る恐る見るインストラクター。

「すいません、特別何も……」

「は、本当ですか!?」

「遊佐さん、本当ですか!? 興奮して痛み感じてないとかそういうことないですか!?」

「うん、大丈夫。本当に何も」

恵美としては張りついたような愛想笑いを浮かべるしかない。

「どうした!? 何があつた!?」

するとそこに、この状況を見ていたのだろうか、恵美の目の前で半分パニックに陥っている男性とは別のインストラクターが、見るからに責任者然とした、Yシャツにネクタイの中年男性を引き連れて近づくではないか。

恵美は、己の迂闊さを呪いながら、これから待ち受けているであろう非常に居心地の悪い空気を想像し、目の前が真っ暗になるのだった。

※

「なんか、すいませんでしたあ〜!!」

「だーからー! 真季ちゃんに氣に病むことじゃないの! ほら、なんともなかったんだし」

「でもお！ 遊佐先輩いい!!」

「先輩はやめてったら！ お願ひ真季ちゃんにまで落ち込まれると私がいたたまれないから！ 私久しぶりに今日、すっきりした気分なんだから、ね？ あははは……」

「あうううう……」

その夜、軽く夕食でもと立ち寄ったチェーンの居酒屋で、真季はひたすら恵美に謝っていた。真季にしてみれば、先輩にわざわざ来てもらったジムの設備の不備で、先輩に要らぬ手間と時間を取らせ、不愉快な思いをさせてしまったとしか思えないからだ。

だが恵美にしてみれば、自分の不注意でジムの設備を壊してしまったのに、ジムの責任者に平身低頭させてしまうわ病院に連れていかれそうになるわ真季にもジムにも迷惑をかけるわで、自分こそ全方位に向けて謝罪したい気持ちでいっぱいなのだ。

だが常識的に考えて、ごく普通のOLのパンチで壊れるようなサンドバッグなど不良品以外の何物でもなく、当然誰一人として恵美がサンドバッグを壊したとは微塵も思わなかった。

だが自分の不注意で見知らぬ誰かが責任を負わされてはあまりにも寝覚めが悪い。

一度は自分の責任であることを主張しようとして、思い切り真季に止められてしまったし、当たり前だがジム側も安堵の表情が垣間見えたものの信じてはくれなかった。

結局必死で拝み倒して病院行きは勘弁してもらい、その後も別のトレーニングを続けることで体に異常が無いことをアピール。

ジム設備の一つである人工温泉もしっかり利用し、帰りがけにジムのロビーで売っていた吸汗性と通気性と筋肉を支える機能に優れたスポーツ用の下着を一セット、特別必要もないのに購入し（それでも壊してしまったサンドバッグの値段には遠く及ばないと思われるが）、なんとか大事にせずにジムを出ることができたのだ。

それでも真季の落ち込みようは半端ではなく、たった一杯のウーロンハイだけで完全に泣き上戸モードに入ってしまったのだ。

「そもそもタダでやらせてもらってたんだし、私も本当に楽しかったから、会員になるかどうかはともかく、ビジター用の料金もあるんでしょ？ 機会があったらまた誘って、ね？」

「ううう……はい……すいませーん！ 生一っ！」

「ま、真季ちゃん、一杯でやめておいたほうが……」

恵美も日本の戸籍年齢では飲酒はできることになるが、一応本当の年齢のことを思ってオレンジジュースで乾杯している。

それだけに素面のまま泣き上戸の真季をなだめ続けなければならなくなっている。

「ほら、唐揚げ来たわよ唐揚げ、食べよ。ね？」

「ううう……私はあ……遊佐先輩に……ちよつとあこがうえでだんべふよお……」

「唐揚げ、熱くないの？」

「あふいです……あふう」

出来立ての大ぶりな唐揚げを口いっぱい頬張りながら、真季はうるんだ目でクダを巻きはじめた。

「ゆはへんはいみはい……んぐつ、カッコいい大人の女にならなくてえ……」

「そ、そう、ありがと」

大人の女どころか実際は真季より年下なのだが。

「私……陸上やってたって言ったじゃないですかあ」

「うん、そうね、言ってたわね」

「でもお、本当はあ、私、ピアノやりたかったんですよ。音大行きたかったんですよ」

「そうなの？　でも早稲多ってすごい大学なんじゃないの？」

「ですけどお……それも親に言われて行っただけですしい……」

親に言われただけでおいそれと入れる大学ではないと恵美ですら分かるのだが、とりあえず話を聞き続ける。

「お父さんがあ……昔い国体かなんかの選手でえ……男の子が生まれたら陸上やらせるって決めてたらしくてえ……でも私一人っ子でえ」

「ああ……」

要するに、物心ついたころには既に親の夢を託されて動きはじめてしまっており、自分の意志で物事を決められる状況になかった、ということなのだろう。

「高二の冬に怪我して陸上続けられなくなったときい、親父がこの世の終わりにみたくな顔したのが悔しくてえ……私はあんたの夢の代理人じゃねえぞって……勝手に期待して勝手に落ち込むとかフザけんなよってえ……」

「うん、そっか」

スケールは違うかもしれないが、恵美は真季の気持ちがなんとなく分かった。

「別に……陸上競技が嫌いだったわけじゃ、ないんですよ。ただあ、楽しめなかったんですよ期待が重くてえ。だから怪我して陸上でなくなってからあ、必死で勉強してえ……私の高校、体育偏重の学校だったけどお、私い、学校創立以来初めて早稲多の一般受験で現役合格したんですよ……」

「そ、それはすごいわね」

一般受験があるなら、特殊受験というものがあるのだろうか。

日本の学校制度にはとんと暗い恵美は、そんなどうでもいいことを考える。

「お母さんは喜んだけどお、親父はそれでも微妙な顔しやがるんですよ。何が不満ですか早稲多でえ！　そんなに陸上やりたいなら皇居の周りでも一人でぐるぐるしてりやいいんですよ。自分が今から入学してえ、駅伝でもなんでも出りやいいんですよ！　私はピアノサークルで楽しくやってますよ今はあ！」

「うん、うん」

「でえ、もう学費は仕方ないけど生活費まで親父の世話になりたくなくなつてえ……それで、そんなに実家遠くないんですけど一人暮らししたくてえ……今のバイト応募したらあ……遊佐先輩と鈴木先輩がいてえ……」

「ん？ 私と梨香？」

くすんだ青春のトークの中に突然自分と梨香の名が出てきて、恵美ははっとする。

この際先輩呼びは今は不問にしておこう。

「はい。二人共、自分の力で。凄く大きなことしようとしてるじゃないですか」

「私、そんなこと話したことあったっけ？」

「鈴木先輩が言っていました。」「恵美は、よく分からないけど何か凄く大切な目標があって、いつもそのために頑張ってる」ってえ……」

「梨香が、そんなこと」

もちろん恵美は梨香に、エンテ・イスラや真奥との因縁を明らかにしていない。

だが日本でできた一番の友は、恵美の行動の端々から何かを感じ取ってくれていたのだろう。

真季の独白なのに、恵美は梨香の気持ちについて涙腺が緩みそうになる。

「鈴木先輩はなんかご実家の会社のこと考えててえ、遊佐先輩はもう人間力がおかしいレベルじゃないですかあ」

「人間力の定義がよく分からないけど……でも別に私はそれほど大したことじゃあ……」
勇者として世界を救おうとしたのはそれなりに大したことだとは思うが、日本でそんなことを言っても仕方がない。

だが真季は、結局一人でアツアツの唐揚げを全部食べながら首を横に振った。

「それでえ、思ったんですよ。私の夢ってえ、なんだったのかなあって……ピアノはやりたかったんですけどお、陸上頑張ったことも確かでえ……今の大学生活はそこそこ充実してますけどお、私自分の意志で何かをしようとしたことないんじゃないかって思ってた……」

「そんなことはないわよ」

「うえ？」

恵美はオレンジジュースを一口含んで唇を濡らすと、真面目な顔で首を横に振った。

「陸上って、何やってたの？」

「……110mハードルを……」

「どこらへんまで行っただの？」

「一応、関東大会決勝まで……ビリでしたけど」

「でも、決勝でしょ。凄くことだと思わ。誰にでもできることじゃない。私は大学のことはよく知らないけど、早稲多だって、なんの努力もせずに入れる大学じゃないんじゃない？」

「……」

「梨香も……って言っちゃ梨香に悪いかもしれないけど、梨香も私も、まだ何かを成し遂げたわけじゃないわ。むしろルーチンワークの日常に甘えて、時々努力を忘れそうになることもあるわ。でも真季ちゃんとは違う。迷ってるからこそ自分を変える努力を怠らない。だから陸上でも勉強でも立派な結果を出してるじゃない。仕事でも評判いいのよあなた」

「……そ、そうなんですかあ？」

「ええ。でも、もしそれでも何か納得が行かない、すっきりしない部分があるんだとしたら、多分自分が持つてる『もの』は、自分の意志で手に入れた『もの』じゃないって思ってることだと思うの」

恵美は言いながら、心が遙か過去に飛ぶ。

決して自分が望んだ『もの』ではなかった。力も、地位も、得ないで済むのなら、それに越したことはなかった。

だが、恵美は結局、自分で力に手を伸ばした。

その動機がどんなに昏く、苦しいものだったとしても。

父との故郷の村での平穏な生活を奪われ、自分の意志に関わらず置かれた勇者という立場。その中で、復讐のために手に入れた力。聖法氣を操る法術の力と、聖剣。進化聖剣・片翼。そこだけは自分の意志で手を伸ばした。

「状況は、あなたが望んだものじゃないかもしれない。でもそれに向かって払った努力だけは、

あなた自身のものよ」

「……努力は、私の？」

「ええ。もちろん、それでも納得が行かないことはきつとある。でも今のあなたはその努力のおかげで将来の選択肢がもの凄く広がる学校に行って、自分で最低限お金を稼いで、自分の自信になり得る過去の実績だってある。これからよ。私もそうだったけど、一年先なんてどうなってるのか分からないんだもん。真季ちゃんならきつと、何か本当に自分の大切なものに巡り合ったとき、きつと迷いなくそっちに進めるわ」

そこで言ってから、恵美はふと我に返って、氷が解けて薄くなってしまったオレンジジュースを慌てて飲み干した。

「って、ごめんね、そんなに歳変わらないのに、私なんかが偉そうなこと……」

「うううう……」

「真季ちゃん？」

「うわああああああん!! ゆぎぜんばあああい!!」

「わあっ! 真季ちゃん!? 零れる! ビール零れる!」

「わたじい、わたじい、あううああああ! ゆぎぜんばいにいっしょうついできたいいい!」

「何言ってるか分からないわよ! ちよつと本当危ないから落ち着いて!」

「うわああああん!!!」

「ちよっとしつかり立って！ もう！ 真季ちゃんお酒全然強くないんでしょ！ 変な飲み方して！」

「うぶ……す、ずいませ……」

真季は、ウーロンハイと生ビール中ジョッキにカクテルを二杯飲んだ結果、自力で立てない程足元もおぼつかなくなってしまうのだ。

居酒屋から高田馬場駅までの道を、恵美に支えられながら千鳥足でふらふらしている。

「ねえ、家どこなの？ 心配すぎるから送ってくわ！」

「い、いえ、そこまで、して、もらう、わけ、には……」

「途中で転んで頭でも打たれたらそれこそ最悪よ！ ね、どこ？」

「う、あの、どうし、がや……」

「雑司ヶ谷？ どこだっけ、聞いたことあるけど……」

「池袋、から、副都心、線で……あの、本当、すいませ……今日は」

「いいの、いいから、私も色々お話できて、自分のことが整理できたから、ね？」

「はい、うぐ」

真季はそうは思っていないだろうが、ジムでは自分が迷惑をかけたのだし、これでおあいこである。

それに、真季に話したことは、そのまま自分にも当てはまるのだ。

望んでなかった勇者ではないが、そのために払った努力と蓄えた力は自分のもの。

今もって聖法氣のシステムはきちんと把握はできないが、この力を手に入れるための努力は自分のものだし、魔王を倒そうとするのも自分の意志だ。

今日はその道を歩む上で考えるべき問題が一つ明らかにになったのだから、恵美にとっても決して無駄な一日でなかった。

日本での聖法氣運用を、少し考え直さねばならない。

意識するにしろしないにしろ、エンテ・イスラにいたころには考えもしなかった聖法氣と自分の肉体との関係は、もう少し研究しなければならないだろう。

そのためにも、鈴乃には早いうちにホーリービタンβを提供して一緒に問題を検証してもらおう。

そう思ったとき、それは本当に唐突に起こった。

脇の小道から、軽自動車飛び出してきたのである。

明らかに、居酒屋が軒を連ね、多くの人が行き来する道を走るスピードではなかった。

軽自動車にしてはマフラー音が甲高いが、ヘッドライトの逆光とフロントガラスの遮光性能で、運転手の様子は見えなかった。

普通なら、絶対に正面衝突する以外の道はなかった。

「……っ」

「うげう」

だが、酔いつぶれたOLを支えているのはただの同僚OLではなく、異世界の勇者だった。恵美はわずかな遠慮すら見せず、真季の腰を支えると、彼女を支えたまま一瞬ですぐそばの雑居ビルの屋上まで跳躍してみせたのだ。

その瞬間の恵美の体内では、真季の体重と自分を跳躍させるだけの聖法気の爆発的活性化、超人的挙動に耐えるための自身の肉体強化が起ころ。

ジムで活性化の理屈が分からずやきもきしていたことなどまるでなかったかのように、ほとんど反射レベルの早さで一連の動作は行われ、そして、

「あぶう……」

「あ」

今の挙動は酔った状態の真季には無茶だったのか、真っ白な顔で失神してしまった。

※

「それで、ご友人は無事に帰宅できたのか」

「うん、結局雑司ヶ谷まで送っていった、さっき酔いが醒めたのかもの凄いでメールで謝り倒されちゃって参ったわ」

「そうか」

あの後、地上では軽自動車の運転手が着い顔で車から降りて周囲や車の前などをきょろきょろと見回していたが、何事もないことにしきりに首を傾げていた。

遠目ではフロントガラスにドライブレコーダーなどは確認できなかったために、恵美は運転手の記憶を撮る必要は無いと判断し車が立ち去るまでしばらく雑居ビルの屋上に身を潜めていた。

その後は気がついた真季を雑司ヶ谷のアパートまで引張って帰宅させたが、あの酔い具合では、明日学校に遅刻しないかどうか心配になってしまった。

その後、永福町の自宅に帰ってからジムで使ったシャツなどを洗濯機に放り込んで、シャワーを浴びて一息ついたところに鈴乃が公衆電話から電話をかけてきたのだ。

「それで、何か分かったのか？ 聖法気の活性化の法則のようなものは」

「……正直、まだよく分からないんだけど……」

鈴乃にはあらかじめジムの目的を告げてあったのだが、そうして改めて問われると、まだ恵美にもよく分かっていない。

だが、車から真季を助けたときに、ふと思ったことがあった。

ジムで判明した、聖法氣を使わない状態での自分の肉体の力だけならば、あのとき恵美も真季も、そのまま車に轢かれてしまっていただろう。

だが、現実にはほとんど無意識のままに恵美は聖法氣を活性化させ、いつも通りの超人的な挙動を実現してみせた。

「もしかしたら……本来の、人間の力以上のことをしようと思っただけ、そうなるのかなって」

「難しい概念だな。私達にしてみれば、聖法氣を使うことも立派な人間本来の力だからな」

「そうね……もちろん緊急時にきちんと対応できることは分かったから何か問題があるわけじゃないんだけど、ちよつと、落ち着かない感じね。そうだ、明後日、午前中そっちにお邪魔するわ。そのときに例のもの、持ってくるわね」

「ああ、すまない。もしその後も時間があるようなら、それ以外の大きな買い物でも助言をもらいたいのだが」

「大丈夫よ。でも私達の切り札みたいなものだから、魔王達には一応秘密にしておいてね？」

「言われるまでもない」

その後、とりとめのない話をしばらくして、通話を終えた恵美は、エアコンの風に当たりながらソファにだらしく寝そべり、今日のことを思い出す。

「力……かあ」

恵美は今日何度目になるか分からないが、自分の手を眺めてぐーぱーを繰り返す。

「魔王を上回ればそれで良かったところに比べると……使いだころが難しいなあ」

努力だけは自分のもの。自分にも言い聞かせていたあの言葉を反芻し、溜息をつく。

「千穂ちゃんにしろ真季ちゃんにしろ……買い被りすぎよ」

何かを破壊する技には優れているかもしれないが、彼女達に憧れられるような強い「力」を自分が持っているとは、到底思えない。

そんなものを持っていれば、こんなことで悩みはしないし、それ以前にとくに本懐を遂げていることだろう。

「でも……まあ、考えれば、今以上に面倒なことなんて起こりようがないし」

恵美は再び携帯電話を手に取り、電話帳に登録された千穂の番号を眺める。

「変な話だけど、悩みを相談できる友達が増えるのも、間違いないしね」

少なくとも、力の限り真っ直ぐ進まなければ、明日の命も知れぬ生活ではないのだ。

恵美は通話キーをタップすると、しばしコール音を聞く。

「あ、もしもし千穂ちゃん？ 今大丈夫？ うん。ちよつと聞きたいことがあって。千穂ちゃん達の周りの女の子って、どんな携帯電話使ってるの？ 今度ベルの携帯を買いに行くんだけど、女の子がどんなの使ってるか参考にしたいくて……」

明るい声で返事をする異郷の友とおしやべりで、夜が更けようとしている。

その間の恵美は、自分でも見たこともないほどに、リラックスした穏やかな笑顔^{えがほ}を浮かべていたのだった。

魔王、身だしなみを整える
- 真奥の場合 -

店内の時計は、十四時を少し過ぎたころを指している。

これくらいの時間になると、ランチタイムのピークも過ぎ、店内の様子も少しずつ落ち着いてくる。

仕事に手抜きは禁物だが、それでも一分一秒を争う時間帯を抜け出すと、どこかホッとした空気がクルーの間に流れるのも確かだ。

だが、ここ数日のマグロナルド・^{はなみ}幡ヶ谷駅前店では、むしろこれからが本番だと言って良い。時間帯責任者の真奥貞夫を含め、多くのクルー達が「その瞬間」を緊張の面持ちで待っていた。

そして、今日も、ソレはやってくる。

「き、来た……」

「あの小さな影は……」

「まーくん！『ヤツ』が来たよ！」

「み、皆下がつてろ！俺が相手をする！」

屋外の逆光に照らされた小さな影が、店の入り口の自動ドアに立った瞬間、骨の髄まで鍛えられたはずの木崎真弓のクルー達は、騒然となって慌てふためきはじめる。

時間帯責任者たる真奥は、指揮官として全員の動揺を鎮めつつ、自ら最前線に立ち、「ヤツ」を迎え撃つべくレジに立った。

「い、いらっし」

「太陽と月、それはあまねく大地に光をもたらしながら、決して交わることのない悲運の星！そうまるで、この僕と我が女神のようにっ!!」

「……やいませ……」

「き、来た」

「うわあ」

「毎度毎度よくもまあ」

真奥の背後でクルーがざわめくが、真奥はそれを手で制し、ただただ「ヤツ」がカウンターの前までやってくるのを待つ。

「この爆々と降り注ぐ業火のような太陽の光は、僕の愛をより激しく燃え上がらせるっ！我が女神よ！今日もまた、僕の愛を届けにやって参りましたっ!!」

「いよっ！いいぞ！」

「うわあ、何アレー！」

「何？何かミュージカルのドツキリ？フラッシュモブって言うんだっけ？」

これだけ入り口で大騒ぎしていれば当然店内の客も注目するわけで、真奥もクルー達もただただ冷や汗を流すしかない。

夏の暑さのせいで、頭のネジが芋羊羹が何かに入れ替わってるとしか思えぬ傍聴感で小柄な

この男こそ、真奥達の商売敵であるセンタツキーフライドチキン幡ヶ谷駅前店店長猿江三月にして、その正体は恵美の聖剣を追ってエンテ・イスラの天界からやってきた、大天使サリエルその人である。

「つと、これはこれは、真奥貞夫君、我が女神の姿が見えないようだが？」
手にはミニヒマワリとバラという不思議な取り合わせの花束を抱え、この暑いのにタキシードと見まごうばかりの三つ揃い。

数日前に真奥と異次元の激闘を繰り上げたこの男は、今は単なる愛の奴隷（自称）である。

恵美の聖剣を奪う過程で千穂をかどわかし、真奥の逆鱗に触れたサリエル。

もちろんサリエル側としても魔王サタンたる真奥を放置することなどせずにお互いの命を賭けた死闘を繰り上げたが、力の性質の差により真奥が勝利。

その後、行先も指定せぬゲートに放り込んだはずが、どういうわけかマグロナルド幡ヶ谷駅前店の冷蔵庫の中から再び出現。

そこで出会ったマグロナルドの店長木崎真弓に一目惚れして以来、大天使は、どうも大天使であることを捨てたらしい。

「も、申し訳ございません、本日、店長の木崎は不在でして……」

「なあんと！ それは間の悪いときにお邪魔したね！ では真奥君、この花束を持って猿江が来たとき、女神帰還の際にはぜひ伝えていただきたい！」

「は、はあ、かしこまりました……」

それ以来毎日毎食木崎目当てにマグロナルドにやってきては、センタツキーの店長としても、一般的な成人男子としてもあり得ない量のオーダーをして帰ってゆくのだ。

売り上げに貢献する客には木崎が愛想が良いということを知っているのである。

見ての通り、一度は真剣に干戈を交えた真奥に対しても異常なまでに愛想が良く、それは真奥や千穂に限らず他のマグロナルドクルーに対しても同様で、木崎への贈り物である花束を標準装備として、二度ほど菓子折りまで持ってくる始末だ。

そして一番恐ろしいのは、注文するたびに三千円には達しようかというマグロナルドのメニュー全てを、彼がきちんと完食しているらしいことだ。

明らかに、サリエルはたった数日で急激に太った。

一度は真奥と千穂がその健康を心配してスーパーサイズミーな食事内容を考え直すよう止めたのだが、サリエルは聞く耳を持たなかった。

ハンバーガーはジャンクフードの類であることは自覚していたものの、これでは確かにかつての芦屋が真奥の健康状態を心配したのもやむなきことである。

結局この時間も、サリエルは二千五百円もの注文を通した挙句に律儀に領収書を要求し、両手に紙袋を抱えて去っていった。

残ったのは店内の異様な雰囲気と、大きな花束。そして、猿江三月の名が記された領収書控

えである。

木崎が不在の場合、サリエルは必ず控えに宛名が残る手書きの領収書を要求する。

そうすれば、自分が売り上げに大きく貢献したということが木崎の目に留まりやすくなるからだ。

ここまで来ると完全なストーカーに見えるが、困ったことにサリエルのアプローチは、意外にも犯罪の臭いを感じさせない。

自らも仕事があるせいか、客として店にいる時間は長くても三十分。木崎のプライベートを探るような気配もなく、基本的に接触してくるのは営業中のみ。

木崎の不在時も、今日のように素直に引き下がり、しかも売り上げには貢献し、最近はずっと客の間で『名物客』として認知されはじめ、サリエルの登場を見るためにわざわざ店に来る客まで現れる始末だ。

恵美も以前心配していたが、サリエル自身は真奥に敗北したものの、聖剣の勇者たる恵美すら圧倒した実力と聖法気は決してなくなつたわけではない。

やろうと思えばサリエルは、その能力で木崎を自分のものにするこすら訳ないはずだし、実際に千穂はサリエルにそのまま天界へと連れ去られそうになつたこともある。

それだけに、ここまで斜め上な正攻法で来られると、真奥としてもどう対処していいものやらまるで分からないし、千穂も無暗に緊張すると考へていた。

何も起こらないに越したことはないが、何かが起こらないはずがない、でもやっぱり何も起こらないという状況は、なかなか精神に来るものがある。

そして当然というかなんというか、

「戻ったぞー……つて」

真奥以上に、この事態に辟易しているのは、

「また来たのか、猿江が」

「お、お帰りなさい、木崎さん……」

カウンターで花束を抱えたまま棒立ち状態の真奥を見て思い切り顔を顰めた、木崎真弓本人であつた。

「ええい！ もう花瓶が足らん!! まーくん！ 君の家に引き出物の余りの花瓶が転がついてたりしないのか!」

「そんなものありませんよ」

スタッフルームでサリエルが持ってきた花束を解体しながら、木崎と真奥は溜息をついた。スタッフルームや木崎の事務室はもちろん、店内も既にサリエルが持ってきた花で溢れてしまつてゐる。

店内に植栽を飾る場合には事業所にいちいち申請書を書かなければならず、木崎もそろそろ我慢の限界が近づいているようだ。

「花に罪は無いと思いたい、こう毎日だとどうにもならん！ 大体奴の金銭感覚はどうなっている!? 花束だってタダではないだろうに、毎食の注文と合わせれば奴は私のためだけに毎日一万円近く出費していることになるぞ！」

「そ、それは、やっぱその、木崎さんに気に入られたいからだ……」

「こんなことで私の心を手に入れられるなどと思っているうちは、箸にも棒にもかからん！」
言いながら木崎は、それでも花の茎を揃えて切ると、なんとか先程持ち込まれたバラとミニヒマワリを店内にある花瓶に入らないかどうか四苦八苦する。

最終的にバラはなんとかなかったものの、行き場を失ったミニヒマワリの束をデスクに横たえた木崎の顔には、妙な疲れの影が浮かんでいた。

「それに……気に食わないのは、だ！」

「は、はい？」

「今に至るも我々は、総客数に於いて奴の店の後塵を拝しているということだ！」

「え」

「実はな、近々エリア全体で新業態導入の大きな流れがあるらしい。その中で各店舗と近隣他社の客数が計測され、どうやら我が店は、日に五十人近くも、奴の店に後れを取っている。ど

ういうことか、分かるか？」

「あ、あの、えっと、平均の客単価が……」

真奥が恐る恐るそう述べると、木崎は魔王の王すら嫌みからさせる鋭い目つきで大きく頷いた。

「そおだ！ マグロナルドとセンタッキーでは平均の客単価だけで見ればセンタッキーの方が高いのだ！ その上集客数でも負けているとなれば、即ち売上でも負けていることになる!! その上その店長に毎食高単価の金を落とされてみる！ 耐え難い屈辱だ！」

「あ、あの、木崎さん、ちよつといいですか。前から聞きたかったんですけど」

「なんだ」

「木崎さん、なんかものがすくセンタッキー嫌ってません？ 猿江店長が来るようになる前から、なんかそんな感じが……」

「……別に会社や店、品物に含むところはない。だがな、あのセンタッキーという会社には、私の終生の宿敵が在籍しているのだ！」

「宿敵!?」

ただの日本人であるはずの木崎の口から出てきた物騒な言葉に、真奥は驚く。

「最初は、向かいの店に『奴』が赴任してくると聞いて聞志をたぎらせていれば、実際に現れたのはあの変態だろう。私はこの拳をどこに振り下ろせばいいのやらっ！」

その「奴」というのが一体何者なのかは分からないが、それを聞ける空気でもないので真奥は貝の沈黙を貫いた。

何か心の底から溢れる煮えたぎる思いをこらえるように木崎はしばし拳を握るが、やがて小さく息をつくとき、なんとか湧き上がる怒気を抑えて冷静な顔を作った。

「とにかくっ！ 他のどこに負けても、『奴』のいるセンタッキーに負けることだけは罷りません！ そこでだまーくん！」

「はいっ!?」

特別強い言葉で言われたわけでもないのに、天性の女帝軍曹の気質は魔界の王の姿勢を自然と正してしまふ。

「丁度いいことに、これからマグロナルドは一週間、クリンネス強化週間に入る。まずはそこから、店内の網紀を改めて引き締め、次なる戦略に備えようと思う」

「は、はい」

真奥は普段あまり耳にすることのない「クリンネス」という言葉の意味を思い出しながら頷く。

業態や会社によって使われる意味合いが微妙に異なる言葉ではあるが、共通するのは「清潔」というキーワードだ。

お客様が目に触れる所はもちろん、ありとあらゆる場所や道具を清潔に保つことで、より店

舗のイメージを向上させる。

肝心なのはただ掃除をすればいいということではなく、『清潔な状態を維持し続け』、更に「そのイメージをお客様に感じ取ってもらう」ことである。

だからこそ、どんなに店舗の清掃が行き届いていても、例えば従業員の爪や髪が伸びていては、特に食べ物扱う店ではお客様に商品への不安を抱かせてしまうことになる。

お手洗いのトイレットペーパーや、手洗い用液体石鹸の残量が少ない、というのもクリンネスの概念上、よろしくないことだ。

また「清掃する姿や姿勢」というのも案外重要で、どんなに綺麗に見えても、従業員が清掃する姿や取り組み方がいい加減だと、それはそれでお客様に悪い印象を与え、逆に清掃する姿をあまり大っぴらに見せていると、お客様が落ち着いて食事できない。

こと清掃というのはお客様の数が少ない時間帯に行われがちで、かつ余程しっかり従業員に教育が行きわたっていないければ、アルバイト従業員で営業が回っている店など目につき辛いところは手を抜かれがちである。

その点マグロナルド轄谷駅前店は、全ての従業員が自分達が使うロッカールの清掃にすら手を抜かない訓練されたクルーであるので、これ以上店舗設備のクリンネスは行きわたらせようがないのだが……。

「とりあえずまーくん、最近ちょつと髪が伸びてきてるんじゃないか?」

「髪……そういえば、そうだ、随分切つてなかった気がします」

「学生が夏休みに入つて、新しいクルーも入つてくるかしれん。時間帯責任者として皆に模範を示すために、一週間以内に髪を切つてこい。これは店長命令だ」

「分かりました、明日シフト入つてないんで、明日の内に切つてきます」

「そうしてくれ。頼んだぞ」

木崎は頷くと、再び残ったミニひまわりの行先について、頭を悩ませはじめたのだった。真奥は事務室を出てスタッフルームに戻ると、ちょうど千穂が出勤してくるところに出くわす。

「あ、おはようございます真奥さん」

「やあーちゃん。今からか」

「はい。どうしたんですか、髪なんかいいじつて」

「ん？ ああ」

木崎に言われた途端に、どうにも前髪が目にかかるのが気になってしまい、ずっと触れたままでいたのだ。

「クリンネス強化つてことで、髪切つてこいって店長命令が下つてさ」

「そう言えば真奥さん、髪ちょつと伸びましたよね」

「やつぱさそう思うか？」

千穂にも言われてしまい、真奥は自分の身だしなみチェックの甘さを齒噛みした。

「そういえば真奥さんつて、普段どこで髪切つてるんですか？」

「え？ どこつて？」

「美容院とか、床屋さんとか」

「ああ」

真奥は手をついて頷くと、千穂にとっては予想外なことを言い出した。

「俺さういうところで切らないんだよな」

「えっ？ じゃあ、一体どうしてるんですか？」

千穂の記憶にある限り、真奥は一度だけ、髪を短く切つてきたことがあった。

だが、美容院にも床屋にも行ったことがないとはどういうことなのだろう。

「うん。だから明日は昼過ぎくらいに……」

そして真奥の答えは、彼の生活スタイルについてかなり理解をしているはずの千穂をして、予想外すぎるものだった。

※

鈴乃はポストに入れられていた電気屋の広告を眺めながら、昨日の恵美との電話を思い出し

て買い物予算を計算していたのだが、玄関のドアをノックする音に顔を上げた。

「ベル、私だ。少しいいか」

「アルシエル？ どうした」

珍しいことに、芦屋が訪ねてきているらしい。

鈴乃は立ち上がると、何事だろうと思いつながらドアを開ける。

鈴乃は、悪魔大元帥が日中当然のように訪ねてきて、その訪問にみんなの警戒心も抱かず素直にドアを開けてしまう生活に早くも疑問を感じなくなっている自覚はあるのだろうか。

「ベル、古新聞か大きな広告紙を余らせてはいないか。あれば少し分けてもらいたいのだが」

「新聞紙か広告？ ちょっと待て。確かこの前、興味本位で買った新聞がどこかに……」

悪魔大元帥が要求してくるものが古新聞とチラシなのだから、もう何を警戒しても無意味かもしれないが。

「これしかないが、これでいいのか？」

鈴乃が持ってきたのはごく普通の朝刊が、半分ほどの厚みになった束だった。

「十分だ。恩に着る」

「この程度で恩を着せるつもりはないが、なんだ、窓掃除でもするのか？」

「何？ 新聞紙は、窓掃除に使えるのか」

「窓掃除用スプレーと併用するといいらしい」

「なるほど、今度実践してみよう」

とても、悪魔大元帥と、元異端審問官の会話とは思えない。

「ともあれ、今日はそうではない。これくらい大きな紙がないと、捨てるのが大変だな」

「捨てる？」

「うむ」

芦屋はこともなげに頷いた。

「今日は、魔王様の御髪を切る」

「……………は？」

「あ、鈴乃さん、こんにちは」

「おお、千穂殿も来ていたのか」

とんでもないことを言い出した芦屋を追って二〇一号室に乗り込んだ鈴乃を待っていたのは、部屋の隅にどかされたカジュアルコタツと、部屋の真ん中に座る真奥。いつも通りパソコンに張りついている漆原と、何やら見慣れない道具類を興味深げに眺めている千穂だった。

「はい、ちょっと、興味があつて」

「うむ。私も正直、驚きを隠せないでいる」

「なんだよなんだよ鈴乃まで。見せもんじゃねえぞ」
「すまない、だが」

鈴乃は、てきぱきと古新聞を畳に広げて、さらに束ねた雑誌類を中央に置き、そこに真奥を座らせる芦屋を見ながら言う。

「まさか、アルシエルがそこまで多芸だとは思ひもしなくて、一体どうするものなのか、少し興味が湧いてな」

「芦屋さんって、本当になんでもできるんですね。尊敬しちゃいます」

「それほどのことは……ははは」

ストレートに褒められて、芦屋もまんざらではない様子。

千穂も鈴乃も、まさか真奥の髪を切っているのが芦屋だとは思ひもなかった。

真奥の髪が不自然な形をしていた覚えはないので、一体どこでどう学んだかは不明だが、芦屋が単に髪の長さを短くする切り方をしているのではないことが分かる。

千穂が眺めていたのは、魔王城の備品である妙に年季の入った成人用の散髪セットだった。

「な、なんだか落ち着かねえなあ」

一方の真奥は居心地悪そうにしながら、芦屋に背を向けて雑誌の束を椅子にして座る。

「佐々木さん、その布張のケープを、取っていただけませんか」

「あ、はい」

千穂は芦屋に言われて、固い輪の付属したケープを、芦屋に渡す。

芦屋がそれを真奥に頭から被せると、ちょうど円錐の上部が真奥の肩に支えられ、真奥の肘あたりで大きな輪が止まり、テルテル坊主のような形になる。そして、裾の部分が切られた髪を受け止める構造になっている。

だが芦屋が言うには切った髪は結構周囲に飛び散るらしく、髪を切る際には足元に新聞などを敷く方が後々片付けも楽なのだということだった。

「どうされますか魔王様。いつも通りの髪型に？」

「そうだな。ちよつと多めに梳いておいてくれると、暑くなくていい」

「かしこまりました。では」

芦屋は頷くと、軽快に鋏を鳴らしながら、真奥の髪を切ってゆく。

「ほう、うまいものだな」

「芦屋さん、凄いです……」

芦屋の手の動きはよどみなく、明らかに百円ショップで購入したと思われる櫛を使いながら、あつという間に真奥の髪型を整えてゆく。

「本当最初のうちは、床屋とか行ってたんだよ。でもまた芦屋がさあ……」

「この近所では、どんなに安くても散髪に最低二千元を要します」

「とまあ、いつもながらのこの調子で」

「男の人って、安く済むんですね」

「私はまだ日本で髪結などしたことはないが、いくらくらいかかるものなのですか？」

「私が美容院に行くと、色々あって安くて四千円はかかりません。鈴乃さんだと髪長いからもうちょっとかかるかも」

「とにかく、髪切るたびにそんな金使ったら、芦屋が心臓発作で死にまうからよ」
千穂の言葉を溜息交じりに受けながら、真奥は目だけで芦屋を示す。

「そしたら、商店街の雑貨屋でこんな散髪セット見つけてきてさ。どうしても自分がやるって言うからおっかなびつくりやらせたら、意外とうまいでやんの」

「出費を抑えることこそ、魔王城の正義ですので。この散髪セットも、未使用ですが古いものだということで、雑貨屋の店主が千円に負けてくれたのです」

「悪魔の正義は結構だが、終わった後しばらくくちくちくんのは勘弁してほしいんだがなあ」
普通は髪を切ったらその場で軽く洗い流して細かい髪の毛を取り除くものだが、今更言うまでもないことだが魔王城に髪を洗い流せるような設備は無い。

だから普段、真奥は髪を切った後は、その足で銭湯に向かうことにしている。

「じゃあ、芦屋さんと漆原さんは、どうしてるんですか？ 真奥さんが切ってるんですか？」

「僕はまだこっちで髪切ったことないよ……っていうか、そもそも髪切ったことないけど」
千穂の疑問に、またも驚きの回答をしたのは漆原である。

「そ、そうなんですか？」

千穂の驚きに、真奥が顔だけで頷いた。

「そうだなあ、魔界には美容師なんて洒落た職業はねえし……なんか、そんな髪伸びた記憶もないなあ。なんで伸びなかったんだろうな？」

「髪が伸びる必要が、そもそもないからだと思われます。さすがの私も、魔王軍全盛当時は髪など気にしたこともありませんでした」

芦屋の分析に、千穂は唖る。

「……こうして聞くと、やっぱり違う生き物なんですねえ」

「うーん、でも、全部の悪魔が髪が無かったり伸びなかったりしたわけじゃないし、詳しいことは分かんねえな。まあ、人間みたいにオシャレするために髪切るような奴がいなかったことだけは確かだな」

「色つけて、威嚇するとかしてた連中もいるけど、あれも身だしなみとか理美容かって言われるとねー」

「ともかく、我々は元々こまめに髪を切る必要のなかった種族だけに、人間の世界では身だしなみのために髪を切らねばならないと知ったときの衝撃はもう……」

「芦屋、そこは泣くとこじやねえだろ」

「で、でも今は芦屋さんも漆原さんも、髪伸びるんですよ？」

「僕はまだそれほど実感ないけど、芦屋はどうなの？」

「そうだな、確かに伸びてきてはいる」

「やつぱりそういうときは、真奥さんが切ったりするんですか？」

「いや、それが……」

するとなぜか、真奥と芦屋が複雑な顔で声を揃えた。

「散髪セットを買った当時はそうすっかって話してただけだな……俺、芦屋ほど器用じゃないよ」

「……決して魔王様を責め奉るつもりはないのですが……しばらく、辛い髪型で過ごした期間がありました」

「辛い髪型とは、一体どういうものか？」

「さあ……」

悪魔時代は髪のことなど気にしたこともなかった、と豪語する芦屋をして辛いと言わせるのだから、生半可な失敗ヘアーではなかったことだけは想像に難くない。

「そもそも今の私は魔王様ほど頻繁に髪型を整える必要はありませんし、どうしてもやむを得ない場合のみ、千円カットで十分以内に済ませることにしております。実際、まだ日本に来て髪を切ったのは二度ほどですし、それで用は足りましたから」

だが飲食業に従事する真奥なら、最低でも二ヶ月に一度は髪を切りたいところだ。

接客をする以上単純に短くすればいいというものでもなかったため、結果として、芦屋が真奥の髪型の切り方だけを覚えてこのように散髪しているのだという。

「だが、一体どうやって知るのだ、髪の手切り方など。素人が見様見真似でできるほど簡単な作業ではあるまい？」

鈴乃の疑問に芦屋が口を開こうとして、

「どうせまた図書館とか言うんでしょ」

機先を制したのは漆原だった。

「図書館に髪の手切り方の本が置いてあるのか？」

「っていうか、置いてあったとして、どういう理由で芦屋さんがそんな本を？」

「佐々木さんはともかく、ベル、貴様は分かってもおかしくないと思うがな。あ、魔王様、目を閉じておいてください」

芦屋は今度は真奥の前に回って、前髪を整えはじめる。

「貴様とて、儀式に化粧を用いていたと言っていたではないか。悪魔も同様だ。オシャレた身だしなみだという意味で髪を整える者はいなかったが、魔術や儀式の都合上、一定の髪型に整える種の悪魔もいたのだ」

「ああ、なるほど」

鈴乃は素直に納得した。

教会の儀式にも、フードに隠れる下の髪型まで細かく指定されている儀式はいくつもある。そういう意味で言えば実は剃髪するのが一番聖職者としてオールマイティではあるのだが、鈴乃は過去の役職柄聖職者だと知られてはいけない場面も数多くあったし、そこまで極端ではないにしろ、場面場面に応じた髪型ができることは、俗世間とのつながりを残す意味でも重要なことだった。

「あー、思い出した。それで一度芦屋と大ゲンカしたことあったんだっ」
目を閉じたまま、真奥が言う。

「ありましたね、そんなことも」

「え？　なんでですか？」

「ちーちゃん、日本で超常的な力を持っていない人っていったらどんな奴想像する？　現実がどうかは置いておくとして」

「超常的って、つまり真奥さん達みたいに、魔法みたいな力を使いそうな人ってことですか？」
「そうそう」

「うーん……やっぱり、お坊さんとか、神主さんとか、巫女さんとかですか？」

「てなるだろ？　で、マダロナルドに入る前のことだけど、日本に来て初めて髪を切った方がいんじゃないかって話になったときに、芦屋が坊主頭にしようとか言い出したんだよ」

「……えええ？」

これには千穂のみならず、漆原と鈴乃も声を揃えて驚いた。

「まだそのころは、日本に於ける聖魔の区別がはっきりしていなかったこともありまして」
真奥の言葉を受けて、芦屋も少し恥ずかしそうに苦笑する。

「芦屋がいきなり丸坊主にするとかスキンヘッドにしようとか言い出したときには、いよいよ貧乏暮らしが行きすぎて頭おかしくなったかと思っただけ」

「私はいつだって大真面目です」

「真奥さんと……」

「アルシエルが」

「スキンヘッド……」

千穂と鈴乃と漆原は、目の前の主従をしばし凝視し、

「ふふ——！！」
一斉に噴き出した。

「なんだよそれなんだよー！　そんな面白そうなこと、なんで実行に移さなかったのさー！」
「く……く……く……」

「す、すいません……すいませんすいません、でも……うふ、ふふふ」

漆原は遠慮なく笑い、鈴乃は腹を抱えて畳に顔を伏せて必死で笑いをこらえ、千穂も我慢しようとするが、どうにもこらえきれない。

「なんなら漆原、今すぐ貴様を摂生と自戒を込めて丸坊主にしてやってもいいのだぞ!」

「他人に丸坊主にされるのに自戒とかならないでしょ!? 日本語おかしくない!?」

「でもあのときは本当にヤバかったよな。芦屋に説得されて実行一步手前まで行っただけ」

「ええ!? そうなんですか!?」

「あはは、そ、そうなのか、ど、どうして思いとどまったんだ?」

「それが……」

芦屋の説得に折れる形で、真奥は芦屋と揃って床屋へと出向いた。

スキンヘッドにするには剃刀が必要で、さすがに家庭で行うには危険を伴ったし、美容室で

はなく理髪店、つまり理容師の手でなければできないということもあり、町内の理髪店に出向いたところ。

「すげえ高かったんだ。料金が」

「へ?」

「ちーちゃん、見たことねえだろ? 床屋のメニューでスキンヘッドとか」

「そっか、丸刈りとは、また違うんですもんね」

中学のころは、クラスの野球部の男子が何ミリカットなどと言っているのを聞いたことがあったが、剃髪、つまりスキンヘッドとは、完全に頭皮を露出させるので、ただバリカンやハサミで髪を切るのとはわけが違う。

「通常カットの二倍の料金がかかると言われて……その時点では安定した収入も無く、二倍のカット料金など払うのは不安すぎたので、結局見送りになったのです」

「へえ! 高いんですね!」

「話聞いたら時間もかかるらしくてさ」

「そうだな、魔王もアルシエルも毛量が多いから、完全に剃髪するなら三時間はかかるだろうな」

するとなぜか鈴乃が得心顔で頷き、前髪を切り終わった真奥が驚いたように目を開いた。

「何? 鈴乃お前、やったことあんの? スキンヘッド」

そして、鈴乃はこともなげに頷く。

「ああ、一度だけだが、修道僧時代に」

「ええ!? そうなんですか!? こ、こんなに髪綺麗なの!?」

もちろん驚いたのは千穂である。

今はシャンブーのCMにでも出演できそうな鈴乃の長い髪が、剃髪されていた時代があるなど女性として信じられないのだろう。

「よほどの事情が無い限り、神に仕える道を選んだ者は修道僧時代には一度は剃髪をしなければならぬ。免除されるのは、貴族や王侯の子女が、なんらかの事情で一時的に出家するときくらいだな」

「そ、そっか、鈴乃さんって聖職者なんですよもんね」

「でもさ、オルバはずっとツルツルだったみたいだけど、スキンヘッド維持しなくちゃいけないとかないの？ まさかその髪、取り外し自由とか」

「修道僧時代を終えれば髪型は自由だが、敢えて剃髪を維持し髪を着用している者もいる」
「いるの!？」

漆原としては鈴乃をからかう意味で言ったのだが、大真面目に返されて逆に驚いてしまった。
「それはど驚くことでもあるまい。日本ではどうか知らないが、海外の作曲家の肖像画など、大半は正装としての髪を被っているだろう。私はこの通り妙に髪伸びが早く毛量も多かったから大抵自前でもどんな髪形でも作れたが、私が所属する官教部には、剃髪を良しとしない地域の貴人などと接見するための専用の髪を持っている者は多い」

「へえ！ 何か勉強になります」

異世界の土流階級の文化を学んでもどうにもならない気がするが、千穂は熱心に鈴乃の話に聞き入っている。

「オルバ様は単純に自分の好みで剃髪を維持されていたのではないかと思う。大法神教会の聖職者達が剃髪するのは一度は俗世から離れたことを示す儀式やはじめのようなもので……女としてこんなことを言うのもどうかとは思いますが、剃髪していたころは、髪の手入れなど考える必要はないからその点は楽だったな。今はこの長さだから、銭湯のドライヤーで髪を乾かすのに

十円玉が五枚は無くなってしまう」

ヴィラ・ローザ笹塚からはど近い銭湯「笹の湯」のドライヤーは十円で約二分ほど利用できるのだが、鈴乃の長い髪をきちんと乾かそうとすれば、確かに十分はかかるかもしれない。

「あー、銭湯でたまーにスキンヘッドの人にアウトくわすけど、確かに頭洗うのはラクそうだな」
「今なら少し家計に余裕がありますし、やってみますか？」

「明日いきなり俺がスキンヘッドで出勤したら、さすがの木崎さんも腰抜かしちゃうよ」
「明日の冗談を、真奥は笑って流す。

「でも、苺屋さん、本当に上手ですね。ちゃんと格好良く短くなってる」
「恐れ入ります。よろしければ、参考書などお貸しすることもできますが」

「参考書ですか？」

「おい、漆原」

「え？ もしかしてあれのこと？」

苺屋に言われて、漆原は押し入れを開くと下の段から大きな段ボールを引きずり出す。

「どれ？」

「最近見ていないが、確か青い表紙の大学ノートだったはずだ」

「えー、ほとんどそんなんだから分かんないよ」

「なんですかそれ？」

千穂と鈴乃が興味を抱いて近づくと、漆原がその中の一冊を適当に手渡す。

「芦屋お手製の資料集」

「凄いな、どれも手書きではないか」

「これ……芦屋さんが一人で？」

芦屋の得意分野である家事全般はもちろんのこと、魔法や科学、地理や歴史、新聞のコラムなどと題されたノートの上に、千穂も鈴乃も唖然としてしまう。

「あ、あった、これかな。『理髪』って書いてあるけど」

「それだ」

漆原が手に取ったノートを受け取って千穂が聞くと、それはわざわざイラストまで写生した理髪の教科書の丸写しだった。几帳面な芦屋らしく表紙に引用した本のタイトルと出版社まで書かれていて、その詳細な内容に千穂と鈴乃は肝を潰す。

「何か……真奥さんが、ほとんど違和感なく日本に馴染み切ってる理由が、分かった気がします」

「すごえだろ？ これ以上ないほどの、縁の下の力持ちってやつだ」

「お褒めにあずかり光栄でございます」

真奥が我がごとのように誇らしげに言い、芦屋も氣負うことなくその言葉に応える。

「これは一度時間をかけて、じっくり読んでみたいな。私にもこれくらい精密で、時代に合っ

た資料があれば……」

「鈴乃さん？」

芦屋の手書きのノート群を見て知的好奇心を刺激されたか、鈴乃が新たなノートに手を伸ばそうとするが、

「佐々木さんは構わんがベル、貴様からは閲覧料を取るぞ。伊達や酔狂で作った資料ではないのだから。おいそれと敵に見せたりはせん」

「む……そ、そうか」

芦屋に言われて、鈴乃は少し残念そうにしながらも素直にノートを箱に戻す。

千穂も苦笑するが、真奥達と鈴乃の関係性を考えれば、外野が口を挟める問題でもない。

ところが一度はあきらめかけた鈴乃が、ふと、別の一冊のノートを手にとると、芦屋に向き直った。

「それでもこの『日本の仏教』というものには興味がある。職業柄、異国の宗教を学ぶ機会は逃したくなくてな。読ませてもらうには、いくら払えばいい？」

「え？」

「む？」

鈴乃が素直に金を払うと言い出して、逆に千穂も芦屋も驚いてしまう。

「う、む……そ、そうだな」

まさかそう来られると思っていなかった芦屋は、しばし遠慮したがやがて鈴乃から顔を逸らした。

「……表紙の裏に、参考文献の表題が書いてある。宗教関連は、基本的に聖性に属するものと分かつて以降あまり真面目に資料を収集していない。本当に学習したいなら、タイトルだけ覚えて図書館に行け。貴様の学習水準ならその方がずっと良いだろう」

「……アルシエル？」

「芦屋さん！」

先ほど底意地悪く笑っていたくせに、いきなり気弱にそんなことを言い出す芦屋に、鈴乃はきょとんとし、千穂は思わず微笑んでしまう。

「芦屋って、案外そういうところ日本人的だよな。お金取ること遠慮しちゃったりしてさ」「う、うるさい」

漆原の突っ込みに、芦屋は決まり悪そうに顔を顰めた。

「宗教関連の資料は本場に適當なのだ。後で間違っていたなどと文句を言われたくないし、きちんと学ぶなら本来の文献を当たる方がいいことは自明の理だろう」

「芦屋さんって、やっぱり真面目ですね」

「ふむ、ではお言葉に甘えて、書名だけメモさせてもらおうか」

「やれやれ、日頃節約節約うるさいくせに、お金のこととなると要に真面目でやんの」

髪を切られながら、芦屋と、千穂と、漆原と、鈴乃の、そんな益体のない話を聞いていた真奥は、小さく笑った。

「ま、ご近所付き合いつてやつだ。悪いことじゃねえや」

「真奥さん？」

「ん？ なんでもね」

「さ、魔王様、終わりましたよ」

「おう、さんきゅ。うー、真夏にもなるとコレもあつちいなあ」

真奥は髪を受け止めていたケープの下で汗をかいてしまっていた。

「アイスかなんか食べたいよねー」

「日がな一日家でごろごろしている貴様にそんな贅沢品は必要ない。なにがアイスだ」

「ええー、いいじゃんそんなくらい。ほら、スーパで箱アイスが二百円の時代だよ!」

「その二百円を稼ぐ努力を理解してから言え」

「あー、もう分かった分かった。銭湯の帰りに買ってきてやつから、喧嘩すんな暑苦しい」

「魔王様は漆原を甘やかしすぎです! 子供には厳しいくらいが丁度いいのです!」

「ちよつと芦屋! 誰が子供だよ!」

「漆原さんは一番子供だと思えますよ?」

「千穂殿に全面的に同意する」

「なんだよお前らまで！ 本当の子供は怒られただけで素直に引き下がったりしないだろ!?」

「漆原さんが怒られて引き下がらなかつたらそれこそドン引きですよ」

「うむ、子供の嫉妬しほというのは最初が肝心だと言うからな。そういう意味では魔王軍時代から既に失敗しているということか」

「クレストピア・ペル！ 貴様、漆原に何を言おうと勝手だが、魔王様の御力を疑うような発言は許さんぞ!?」

「僕はもうこの場の全員を侮辱罪で訴えたい！」

「もし将来魔王様に御世継ぎが生まれた場合には、きっと魔王様の指導の下、父君の御心を立派に受け継ぐ立派な御子になろう！ 漆原の如くなるはずがない!!」

「おおおおお御世継ぎ!? ままさま真奥さんまさか魔界に帰つたらそんな予定が!?」

「ねえよ!? そんな予定も身に覚えもねえよ!? 芦屋お前も適当なとこにしとけよ!」

「……そんなことになる前に、さつさとエミリアに魔王を討伐してもらわねばな。明日私のところに訪ねてくる予定だから、ついでに頼んでみるか」

「お前も出かけたついでにスーパーで牛乳買ってきてくれみたいな軽いノリで俺の命を刈り取ろうとすんなよ!? 執行猶予短すぎだぞ!? ああもう！ 俺とにかく銭湯行ってくる！ Tシャツの襟がちくちくして痛い！」

「ああ、待て魔王。私も出かける。図書館の場所を教えてくれ」

「ああ? ついてくん。ンなもん芦屋に聞け。銭湯とは正反対だ!」

「そうだ、私夕方に家に届け物があるかもって言われてたんだ。早く帰らないと。真奥さん、芦屋さん、お邪魔しました」

「僕もこの部屋の住人なんだけど!?」

「いえいえ、またいらしてください。帰り道はどうぞお氣をつけて。ペル、貴様とエミリアは特別来なくていいから、明日エミリアにもそう伝えておけ」

「ふん、ここの食材が少なくなりはじめたと分かった途端に氣が大きくなりおつて。なんなら二人して玄関の前に居座ってやろうか」

「それは遊佐さんの方が嫌がりそうですね」

「俺は日本にいるうちは、極力静かに暮らしたいんだがなあ」

※

「……くしゅっ」

「お、どうした惠美、エアコン当たりすぎた?」

「ちよっと今日の席寒いですよねー」

恵美は職場で小さくくしゃみをし、隣の梨香と、その向こうにいる真季に心配される。

「そうね……なんか、突然むずむずしはじめたのよね。なんなのかしら」

「なんでしたっけ、何回だといひ噂で何回だと良くない噂って言いますよね」

「回数は私も聞いたことあるけど、一体そういうの誰が考えるんだろうね。確か三回とかでいい噂だっけ？」

「でも私、三回も連続でくしゃみするとか、花粉の季節くらいじゃないですけどねー」

「私は花粉も特にないから、連続したくしゃみはほとんど記憶にないな」

「梨香も真季ちゃんも、人のくしゃみで変に盛り上がりがないでよ」

恵美は苦笑しながら、エアコンの送風口の位置を確認して、午後は軽く上に一枚羽織った方がいいだろうかとそんなことを思いながら、

「明日はまた笹塚に行かなきゃなんだし、風邪なんか引いてられないわよね」

そうやって、気合を入れるのだった。

終章 ― 六人の『その日』の前日 ―

「ほう……日本の夏には、全国的にこんな大がかりな宗教儀式を行うのか」
鈴乃が図書館で、仏教に関する文献を調べているころ。

※

「お世話様です……何これ、お中元？ あ、アイスだ！ ハーゲンデッセのプレミアムギフトボックス！」
ちょうど家に帰宅した千穂は、宅配便の来訪を受け、両親宛てのお中元を受け取る。

※

「あーもう、エミリアも佐々木千穂もベルも気安く来すぎ。気が散って仕方ないよ。あー、自分の部屋がほしい！」

漆原が身の程を弁えずにそんな愚痴を垂れているころ。

※

「ううむ御世継ぎか……しかし、魔界統一事業の偉大さを考えれば魔王様の将器を受け継ぐ御子を得ようとなると伴侶もそれなりの………」
とりあえず佐々木さんの前では、この話題はやめておこう

芦屋はスーパーで、冷凍子持ちシシャモを手にもうでもいいことを考える。

※

「とりあえずベルの体質に合うかどうかって問題もあるし、お試しで三ケースくらいでいいかしら。まあ、サリエルが大人しくしてる分にはこれ以上面倒事も起こらないだろうしね」

恵美がマンションで、鈴乃におすそ分けするためのホーリービタンβの数を吟味しているころ。

「あ……ちつと長湯しすぎた」

真奥は長湯に顔を火照らせながら、だるそうな足取りで銭湯を出た。

夕暮れ時と言えど、湿度のおかげであまり気温が下がった感じもせず、帰り道にかいてしまう汗のことを思いながら、真奥は漆原にアイスを買っていてやると言ってしまったことを思い出し、仕方なくスーパーに寄る道を取る。

スーパーで一番安いスティックアイスだけを購入し、笹塚駅前からアパートまでの間にある菩薩通り商店街を歩いていると、とある店の前で真奥は声をかけられた。

「よお、真奥ちゃん」

「あれ？ 広瀬さん！」

広瀬は、町内会のボランティア清掃で知り合った商店街の自転車屋の主人だ。

ヒロセ・サイクルショップの店先で何かを整備していたらしい広瀬は、機械油まみれの顔をタオルで拭い一息つく。

「仕事の帰りがいい？」

「いや、今日は休みで、今銭湯行ってきたとこなんすよ。……広瀬さんそれ」

「ん？ ああ、これ。今日入荷したんだ。国産だけど、結構お買い得だな」

「実は、最近自転車がぶつ壊れちゃったんですよ。今、新しいの探してて」

「ん？ 簡単な故障だったなら直してやるぞ？」

「あ、いや、フレームがもう完全にへし折れちゃってて、こないだ粗大ごみで出しちゃいました」

鈴乃の渾身の一撃で粉砕されてしまった初代デュラハン号の亡骸を思い出し、真奥はそっと涙を拭う。

「まあでもそういうことなら、こいつは割とおすすめだよ。ライトがオートで点くのが一番の売りかな。あとはギアも六段あるし、丈夫で錆び辛いパーツ使ってる。真奥ちゃんが買うなら、ちつとくらい負けるぞ」

広瀬がそう紹介する新商品だという自転車には、手書きで「特価！ ￥32800」と書かれていた。

真奥はそれを見て、小さく微笑む。

「三万円ちょいか。これくらいなら、あいつも嫌とは言わんだろ」

真奥は決心すると、早速広瀬に値段の交渉を兼ねた予約を頼む。

小さな小さな変化と、小さな小さな行動が積み重なって、星の巡りを目で捉えられないが如くに推移する日常の風景。

「ばばは……サタン」

「そうか……パパはサタン……は？」

そんな魔王と、勇者と、女子高生と、悪魔大元帥と、堕天使と、聖職者達の『平穏であることと自体がおいしい日常』に訪れた新たな存在によって、彼らを取り巻く世界が再びうねりはじめるのは、もう、間もなくのこと。

作者、あとがく — AND YOU —

この四半世紀で、アニメの視聴環境というものは大きく変化しました。

和ヶ原が幼いころはテレビは一家に一台。一度に視聴できる番組は当然1チャンネルのみ。ビデオ録画するにも、ビデオテープを無駄にしないためにはずっとテレビの前に張りついていなければならない。

未来からやってきた猫型ロボットを見るために、一刻も早く父が見ている巨人戦が終わることを天に祈っていたものです。

ところが今や、ブルーレイデッキは複数番組を録画し、ロードバンド環境さえあれば世界中どこにいてもインターネット配信を見ることができ、話題も多くの人とリアルタイムで共有が可能。

作品がより多くの人の目に触れる機会が多くなり、メディア作品としての評価も日に日に向うしてきているように思います。

このような時代にアニメ『はたらく魔王さま!』を作っていただけことは、とても幸運で、とても素晴らしいことだと思いました。

アニメ『はたらく魔王さま!』第六巻をお買い上げの皆様の特典小説という形でこうしてお

会いできるのも、現代のアニメ事情ならではの幸運でしょう。

本書は特典という形ではありますが、電撃文庫、そしてアニメの描く世界と同じ時間軸の中にある、連作短編形式の作品となっております。

それぞれのお話の時間が微妙にリンクしながら、原作三巻に描かれた時間へ、徐々に徐々に近づいてゆきます。

表題の数字を「2・5」とせず敢えて「2・8」としたのは、アニメの世界が少しでもその先へと近づいて欲しいという願いを込めてつけました。

アニメ『はたらく魔王さま!』の全体打ち上げの日。

精一杯楽しく過ごすための準備を色々して、原作者だというのに一所に留まらずに会場中をちょろちょろと動き回り、それまでもお会いした人、お会いできなかった人、色々な人と挨拶をし、色々な人とバカ話をし、色々なイベントに首を突っ込み、遂に閉会のとき。

挨拶を求められ、これでアニメの世界が、仕事が終わるのかと思ったとき、不覚にも泣いてしまいました。

アニメにまつわる全てが、楽しく、刺激的で、素晴らしい時間ばかりでした。

『はたらく魔王さま!』というアニメを作り上げるためにお力添えをいただいた全てのスタッフ、キャスト、編集部の皆さんに感謝を。そして何より出来上がった作品を楽しんでくださった読者と視聴者の皆さんに、深く御礼申し上げます。

願わくば、また『次』の特典小説を書くために仕事をし、『次』の特典小説で皆様とお会いしたい。

だからこそ本書に収録された物語は、先の見えぬ明日に向かって、決して同じ時間の訪れない『日常』を前を向いて生きる奴らのお話になっています。

先のことは誰にも分かりませんが、また何かの運と縁と弾みがついたときに、その全てを逃さず掴むため、毎日一つ一つ小さなことを積み重ねて、和ヶ原は再び皆さんとお会いできる日のために頑張ります。

それではっ!!



BD&DVD8巻も買い上げありがとうございます。カバーについて少し、毎回和ヶ原さんと担当さんから取り入れるべきキャラを例のご意見踏まえつつラフ案練んですが、「本編の連動編で登場する某生物のモザイク処理での登場もありかも」という意見が飛び出た時に即答で「すみません無理です!」という反応をしたそんな一幕がありました。今考えると魔王さまならではの生活感が出てそれはそれでありだったのかもしれない……とか、魔王さまにしかできない絵になる……!? とか思ったんですが、きっと判断は誤っていなかった。

さてさて、各話でキャラの新たな能力に気づかされるシーンが多かった2.8巻、個人的印象に残った悪魔の髪の設定や万能すぎる戸屋にガブルの衝撃をうけたんですが、スキンヘッドになったたかもしれない主役2人を想像して、髪があつてよかった……とどれだけの人がほっとしたことか。そして鈴乃の○○を絵で描くことがなくて本当によかったと袖を擦ながらに思ってしまったことを懺悔いたします。和ヶ原さんまじり容赦ない!! でももしかしたらいつか……。

っと、いろいろ思うことがあつながら2〜3巻の頃を思い出しつつ原稿を読ませてもらいました。振り返ると速いようで早い、2013年、「魔王さま!」もこうしてアニメ化して頂き、それから続々と出る原作、イベント、公開録音、雑誌、立体物にまでして頂きました。現実なの夢なの? という日々の連続でした。「はたらく魔王さま!」の原作もアニメも私にとって大きな影響、思い出を与えてくれました。皆さんにとってもそうであつたらいいな! というわけで、また原作でお会いしましょう! 029でした。

●和ケ原聡司著作リスト

「はたらく魔王さま！」〔徳聖文庫〕

「はたらく魔王さま！2」〔同〕

「はたらく魔王さま！3」〔同〕

「はたらく魔王さま！4」〔同〕

「はたらく魔王さま！5」〔同〕

「はたらく魔王さま！6」〔同〕

「はたらく魔王さま！7」〔同〕

「はたらく魔王さま！8」〔同〕

「はたらく魔王さま！9」〔同〕

「はたらく魔王さま！2.8」〔魔王編文庫〕

「はたらく魔王さま！5.5」〔同〕



はたらく魔王さま! 2.8

和ヶ原聡司

魔王城文庫 6J1M202



MAOUJO BUNKO



わ-特-2



はたらく魔王さま! 2.8

和ヶ原聡司



魔王城文庫

6J1M
202



魔王城文庫

はたらく魔王さま! 2.8

Blu-ray Disc&DVD 第6巻

初回生産限定特典 書き下ろし小説

PCXG-50246 / PCBG-51596



NOT FOR SALE



わがはらとし
和ヶ原聡司

『旅先で、紅茶片手に創作に取り組む和ヶ原』

和「ふう、やはり環境が変わると、創作意欲が湧くな」
和「……………」
和「……落ち着かねえ」
和「やっぱ普段通り家で仕事しよ……」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま!
はたらく魔王さま!2
はたらく魔王さま!3
はたらく魔王さま!4
はたらく魔王さま!5
はたらく魔王さま!6
はたらく魔王さま!7
はたらく魔王さま!8
はたらく魔王さま!9
【魔王城文庫作品】
はたらく魔王さま!2.8
はたらく魔王さま!5.5

おにく
イラスト:029

前回の魔王城文庫と並べると金魚掬うみたいなきを旨指しました。
ついにBD&DVDも最終巻ですが、原作はまだ続きます!
今後とも応援の程よろしくお願ひ致します。
最後に、一家に一人戸塵ください!!!

まおう
はたらく魔王さま! 2.8

『魔王さま!』のメインキャラクター
6人がそれぞれ主役となって登場! 普
段はまったく化粧をしない鈴乃がデパー
トの化粧品売り場に行ったり、魔王に忠
誠を捧げる芦屋が日本にやってきてから
の並々ならぬ努力を公開したり。さらに
漆原はみんな苦手な黒い悪魔と戦い、唐
揚げの差し入れ率高めの千穂は女子高生
らしい悩みを持ち、恵美は職場の後輩と
ジムで派手に運動しまくり、髪が伸びて
きた魔王はてる坊主姿になって芦屋
の鉄で散髪に挑む。

電撃文庫2巻と3巻の間の、ちょっと
3巻寄りの時期を描いた庶民派スペシャ
ル短編集!